

---

## 第二部 『天と地』

堂神瞬一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

第二部『天と地』

### 【Nコード】

N7834D

### 【作者名】

堂神瞬一

### 【あらすじ】

あの『オルテナ』での出来事から一年が過ぎた。学校も元通りになり、そして何事もなく月日が流れた。だけど、天満達は知らなかった。新たな戦いの足音が、すぐ近くまで来ているということに…。

## 第一劇『裏月』（前書き）

『天と地』第一部の続編です。第二部で全ての謎が解明します。第一部では語られなかった登場人物達の真実、運命が明らかになっていきます。どうぞ、『天と地』の完結編をお楽しみ下さい。

## 第一劇『裏月』

天満の語り「あの『オルテナ』での出来事から一年が過ぎた。学校も元通りになり、そして何事もなく月日が流れた。だけど、俺は知らなかった。新たな戦いの足音が、すぐ近くまで来ているということに…。」

天満「じゃあ母さん、行ってくるね。」

母「気を付けて行ってらっしゃい。」

天満「うん、行ってきます！」

母「…早いものね。あれからもう一年経つのね。でもここ最近…妙な胸騒ぎがするわ…。何事もないといいのだけれど…。」

天満「…あ、真雪！」

真雪「天くん！おはよう！」

天満「おはよう。」

真雪「テスト勉強やった？」

天満「まあ…一応ね…。」

真雪「今日は英語と数学と化学！天くんの苦手な科目勢揃いだね！」

天満「言うなって～！どうせ真雪みたいに全科目得意じゃないよ！」

真雪「私は勉強するのが好きなだけだよ。」

天満「はあ…剣斗や琴花も徹夜して、顔がスゲエことになってんじゃないかなあ。」

真雪「アハハ！そうかも！あ、二人だよ！琴花——！」

琴花「…ん？ああ…おはよ…。」

天満「やっぱり徹夜したみたいだな！てことは剣斗もか？」

琴花「いや…コイツは…。」

剣斗「おーっす！さあ、今日も張り切って行きましょう！」

天満「あれ？元気だな…異様に…まさか…。剣斗…テスト勉強…したか？」

剣斗「してないっ！」

天満「はは…やっぱり。」

真雪「ちよつと剣ちゃんいいの？」

剣斗「とりあえず何とかなるだろ！アハハ！」

琴花「開き直れるアンタが羨ましいよ…。」

天満「アハハ！じゃあ行こう。」

(テストが終わる)

真雪「天くん、どうだった？」

天満「はは……聞くな……。」

真雪「琴花は？」

琴花「はは……燃え尽きたさ……真っ白に……。」

真雪「はは……剣ちゃんは……大丈夫か。」

剣斗「ナツハハハハハ！テストが何じやい！俺達の価値はテストでは測れない！故に、俺達は！テストが駄目でしたぁー！！」

生徒達「おーーう！」

真雪「な、何か……新しい宗教が成立したみたい……。」

天満「そ、そうみたいだな……。ふう、さて帰るか真雪。」

真雪「そうだね、琴花も行こ！」

琴花「うん……。」

真雪「ほら元気出して！」

剣斗「我々は手にしているはずだ！テストでは測ることができないモノを！それは……愛だ！愛こそ全て！皆、愛があればテストなんて要らない！そうだろう！」

生徒達「その通りだああー！ー！」

剣斗「よおーし！これはクーデターだ！今から職員室に駆け込み……！」

琴花「恥ずかしいからもうやめろっ！」

剣斗「ぐはっ！」

生徒達「ああ……剣斗様が……。」

琴花「アンタらも、いつまでもものるなっ！ほら行くよ剣斗っ！」

剣斗「皆……忘れるな……愛が……愛こそ……。」

琴花「まだ言うかつ！」

剣斗「皆……我死すも……信念死なず……。」

琴花「うるさいっ！さっさと行くよ！」

天満「はは……剣斗の奴、尻に敷かれてるね。」

真雪「琴花も苦労しそうだね。」

琴花「ちよつとお、何してんの！行くよ、二人とも！」

天満「行くか。」

真雪「そうね。」

（謎の集団）

？「ではそろそろ始める。皆、位置に着け。」

？「マジいよいよか！これで『天球』もマジ救われんだな！」

？「んゝあれあれえ？『ユナイマ』がいないけどお？」

ユナイマ「遅れてすみません…。」

？「テメエ、マジどこ行つてたんだよ！」

ユナイマ「『オルテナ』の様子を伺ってきたのですよ。」

？「時間ぐらいマジ守れよな！」

ユナイマ「ですから謝ってるじゃないですか。」

？「二人とも…いいかげんにしろ…さつさと…『エリア』を…広げろ…。」

？「マジ分かってるよ…！」

ユナイマ「『レベル』は？」

？「『2つ』だ。」

ユナイマ「おや？それでよろしいんですか？」

？「まだ一段階だ。それでいい。」

ユナイマ「分かりました。」

？「よし、やるぞ。」

（天満は）

天満「ん？何か暗くない？」

真雪「本当だわ…どうしてだろ…？」

琴花「あ、太陽が欠けていつてる！」

剣斗「『月食』だな！」

真雪「『日食』よ！」

剣斗「…。」

天満「でも、『日食』なんてテレビでも言っただけで無かつ…」

琴花「きゃあああつつ！」

剣斗「うわあああつつ！」

天満「琴花！剣斗！」

真雪「天くん、二人だけじゃないわ！」

生徒達「うわあああつつ！」

天満「皆が石になっていく！何でだよ！」

琴花「…真…雪…逃げ…。」

真雪「琴花あつ！」

剣斗「くっ…天…満…。」

天満「剣斗おつ！」

生徒達「…………。」

天満「一体何で…？真雪、無事か？」

真雪「う、うん…でも…どうして私達は無事なの…？」

天満「…はっ！母さん！」

真雪「あ、天くん！」

（家に到着）

天満「母さん！あ……ああ……母……さん……。」

真雪「天くん！あつ！天くん……。」

天満「一体何なんだよ……。」

真雪「天くん……。」

天満「真雪……。」

？「天満！」

天満「えっ！この声は！」

真雪「『シャウト』さん！」

シャウト「真雪も無事だったのか！」

天満「シャウト！剣斗達が！」

シャウト「分かっている。こっちも石化する者達が多数いるんだ。」

天満「『オルテナ』もか！」

真雪「一体何が起こっているんですか？」

シャウト「詳しくは分からない。ただ…こっちに起こったことを説明したい。お前達に『オルテナ』に来てもらいたい。」

天満「『オルテナ』に？でもどうやって？」

シャウト「あの時の駄菓子屋があつた所に来てくれ！」

天満「分かった！」

真雪「天くん！」

天満「真雪は残れ！」

真雪「え？」

天満「また『オルテナ』なんだ…真雪に危険があるかもしれない…。」

真雪「嫌よ！私も行く！」

天満「駄目だ！今度は絶対に！」

真雪「…一人にしないで…。」

天満「え？」

真雪「一人は嫌だよ…。」

天満「でも…。」

真雪「前の時は…足手まといにしかならなかった…。だから今度こそ…天くんの『力』になりたいの！」

天満「真雪…。」

真雪「お願い…天くんの側にいたいのに。」

天満「…一つだけ約束してくれ。」

真雪「…何？」

天満「絶対いなくならないでくれ。」

真雪「天くん…うん。」

天満「…行こう。」

（駄菓子屋に到着）

天満「あつた！…懐かしいな。」

シャウト「久しぶりだな、天満に真雪。」

真雪「本当にお久しぶりです。」

天満「シャウト…。」

シャウト「…積もる話もあるだろうが、来てくれ。お前達にとって

は、懐かしき『オルテナ』にな。」

天満「でも剣斗達が！」

シャウト「それも説明する。とにかく来てくれ！」

天満「分かった！」

真雪「はい！」

シャウト「よし、行こう！」

(『オルテナ』に到着)

天満「暗い…ここも同じか…。」

?「天満ああーっ！にゅーっ！」

天満「え？うわっ！……痛つつ……に……にゅう！」

にゅう「にゅー！会いたかったにゅー！天満あー！」

天満「無事だったのか、にゅう！良かったあ！」

にゅう「天満も無事にゅー！良かったにゅー！にゅーっ！」

真雪「にゅう、久しぶりね。」

にゆう「ま、真雪……にゅーー！真雪真雪真雪真雪にゅーーっ  
！」

真雪「あは！元気だった？」

にゆう「元気にゅー！とても元気にゅー！」

天満「シャウト、他の人達は？ミリアやララアさんや、ソリッドさんやシンセーテンやジ阿斯は？」

シャウト「……。」

天満「ま、まさか！皆…石化したのか？」

シャウト「ああ…全滅だ。」

二人「！」

天満「そ、そんな…。」

真雪「で、でも…どうして私達やシャウトさんは無事なんですか？」

にゆう「にゆうも無事にゅー！」

シャウト「それは私達が『資格者』だからだそうだ。」

天満「『資格者』？」

真雪「それって何ですか？」

シャウト「その説明は『ある奴』がしてくれる。私も詳しくは知らないんだ。少し聞いただけなんだな。」

天満「『ある奴』？」

シャウト「お前達もよく知っている人物だ。」

天満「誰…？」

？「僕ですよ！」

天満「え？ゼ…『ゼロ』！」

ゼロ「どうも、お久しぶりですね、天満くん、真雪さん。一年ぶりくらいですか？」

シャウト「約束通り、説明してくれ。」

天満「約束？」

シャウト「ああ、ゼロが言ったんだ。天満が来たら全てを話すと。」

天満「……。」

ゼロ「そう、今回も天満くんに関係があることなんです。というより、デイクさんがらみと言った方が正確ですか。」

天満「どうということだ？」

ゼロ「この出来事の全ての発端……それは『月』からの侵略者です。」

」

シャウト「何だと！」

天満「侵略者？」

真雪「な、何のためにですか？」

ゼロ「侵略者達は『月』のことを『天球』と呼んでいます。その『天球』を『地球』のような青く、生命溢れる星にするためです。」

天満「何だって！」

シャウト「……………」

真雪「その人達は、何をしているんですか？」

ゼロ「『地球』に住む者達から、生体エネルギーを取り、『地球』そのものからもエネルギーを吸収しているんです。そしてそのエネルギーを『天球』に注入しているんですよ。」

真雪「エネルギー…ですか？」

ゼロ「皆さんもご存知の『錬』ですよ。」

真雪「『錬』って、生命力…ですよね？」

ゼロ「…はい。」

天満「じゃあ…母さん達は…。」

ゼロ「大丈夫です。まだ間に合います。侵略者達がしていることを止め、再びエネルギーを『地球』に送り込めばね。」

真雪「でもディークさんが関係しているのは何故ですか？」

シャウト「…『月』というのはな、ディークの創造物なんだ。」

二人「！」

シャウト「そうか……侵略者は…『アイツ』なのだな？」

ゼロ「さすがはシャウトさんですねえ。…その通りです。」

天満「知ってるのか、シャウト！」

シャウト「もう一人の…ディークだ。」

天満「どういうことだ？」

ゼロ「正確にはディークさんが生み出した自分の分身みたいなものですね。『月』を保護する役目として生み出したんです。」

真雪「一体どんな方なんですか？」

ゼロ「見た目はディークさんにそっくりな方ですよ。」

真雪「そういえば、さっき侵略者達って言いましたよね？達っていうことは一人だけじゃないんですか？」

ゼロ「ええ、彼が組織した者達がいるんです。『ムラクモ叢雲』と呼ばれる、六名からなる組織……創立者の名前は……『ユエ』……。」

天満「そいつが、もう一人のデーク……。」

シャウト「ああ、そうだ……私は会ったことは無いがな。だが『ユエ』はデークと違うところがあるんだ。」

真雪「違うところ……ですか？」

シャウト「デークは『力を統べる者』で、奴は『知を統べる者』で、主に『錬』についての研究を……あ……そうか！」

ゼロ「気がつきましたか？」

天満「どうしたんだシャウト？」

シャウト「ネオスの封印を解いたのは……『ユエ』……だな……。まさか！奴は『エリア』を完成させたのか！」

ゼロ「その通りです。」

天満「『エリア』って何だ？それに封印を解いたって………デイクの分身なのに、何故封印を解いたりしたんだよ！」

ゼロ「『月』を……『天球』を繁栄させるためですよ。」

天満「何故封印を解くことが、繁栄に繋がるんだ？」

ゼロ「ネオス様は利用されたんですよ。『ユエ』さんにね……。」

天満「全然分らない…。」

シャウト「『ドリューマ』の復活だな？」

ゼロ「…はい。」

シャウト「膨大なエネルギー体の奴を『天球』に注入することができれば考えたのだな？だからネオスを解放した。」

ゼロ「そうです。」

天満「大体止めるって言ったって、『月』にいる奴らなんてどうすればいいんだよ！それにさっきも言ったけど、『エリア』って何なんだよ！」

シャウト「それは……そうだな…。」

ゼロ「んゝ論より証拠、百聞は一見にしかず！とりあえず目で見て頂きますよ！僕の『エリア』をね…。」

次回に続く

## 第二劇『領域』

天満「僕の… ってゼロ使えるのか！」

ゼロ「そうでなければ、お見せするなんて言いませんよ。」

シャウト「… 何故だ？」

ゼロ「は？」

シャウト「何故お前が使うことができるんだ？ 『エリア』は『ユエ』が編み出した技術のはずだ。」

ゼロ「そうですよ。」

シャウト「だったら何故だ？」

ゼロ「簡単ですよ。僕も組織にいたからですよ。」

天満「いた？」

シャウト「過去形ということは、お前はもう抜けたということか？」

ゼロ「ネオス様に出会う前でしたかね…。僕がレイダーと初めて『オルテナ』に来た時、『ユエ』さんに会ったのですよ。そこで誘われちゃったんですね。まあ、『オルテナ』のことや、エルフのこと、様々な情報収集のために、『叢雲』に入ったのですよ。そこで初めて『エリア』と呼ばれる『力』を知りました。『錬術』とは違った『力』… 実に興味深かったですよ。」

シャウト「『ユエ』が『オルテナ』に来たということは、アレも完成させたのか……『銀河の架け橋』<sup>コスミックブリッジ</sup>を！」

ゼロ「ええ。」

真雪「『コスミックブリッジ』って何ですか？」

ゼロ「『橋』ですよ。『地球』と『月』を繋ぐ唯一のね。」

天満「じゃあ『ユエ』はその『橋』を使って、『地球』にやってきて、ネオスの封印を解いたのか……。」

シャウト「お前は何故組織を抜けたんだ？」

ゼロ「彼らがネオス様を利用していることに気づいたからです。いや……彼らは誰もかれも利用することしか考えていない。僕も……あなたの方のこともです。ただ自分達の望みのために、他人を利用することしかない。そう理解した時……僕は組織を抜けて……ネオス様についた。まあ、ネオス様は僕のことを、あまり信じてはいなかったようですがね。ですが、僕がネオス様の側にいて牽制していなければ、『叢雲』の方達にもっと好き勝手されていました。ですから僕は、あなた方にネオス様のことを任せたいんです。それがネオス様にとっても、一番いいと思いましたがね。『叢雲』に好き勝手されるよりはね……。」

天満「ということは……お前は俺達を利用したということか？」

ゼロ「そう……ですね……すみません。」

シャウト「お前の言葉を全部信じることはできないが、今はお前の情報が必要だ。『エリア』についてな。」

ゼロ「大丈夫ですよ。今回ばかりは味方ですよ。レイダーを助けるために、『叢雲』を倒すしかないんですから。」

天満「そっいやレイダーがないよな……どうしてだ？」

ゼロ「石になっちゃいましたよ……。全く……僕らは完全に利用されただけだと、心から思いましたよ。レイダーも『エリア』を完成させるために、手を貸していたというのに……。」

天満「そっか……。」

ゼロ「ですから、組織を討つために、あなた方に僕と同じレベルまで上がって来てもらいたいです。僕一人では、ちょっと厳しい方達なんでね。」

天満「本当に抜け目の無い奴だな……。まあいいや、俺達だって助けなきゃならない人達がいるんだ！教えてくれゼロ！」

ゼロ「そちらは？」

シャウト「……頼む。」

真雪「お願いします！」

にゅう「にゅうもいいにゅー！」

ゼロ「分かりました。では……。」

シャウト「この感じ……ユズキと戦っていた時感じた、『錬』ではない……いや、『錬』を超えた『力』！」

ゼロ「…『レベル1』……『氷』！」

天満「霊神もないのに属性能力がっ！」

シャウト「霊神の力を借りての属性能力が『錬術』。そして、自分の力で『錬術』を使い、属性能力を生み出すのが『エリア』。『ユエ』は、その『エリア』をずっと研究していたんだ。つまりは…エルフや人間が…『霊神化』する『変化術』みたいなものとデイクは言っていた。」

ゼロ「そのとおりです。今世界から『錬術』が消えつつあります。あの『天球』に『錬』を吸いとられていますからね。『ユエ』さんは『力』を求めています……デイクと違って自分には『力』が無い……。だから『月』を守るために『力』が…『錬術』とは違う、新たな『領域』……それが『エリア』と呼ばれる『力』として完成された。」

天満「ちょっと待ってくださいよ！『ユエ』はデイクの分身なんだから？ だったら強いんじゃないのか？」

シャウト「『力』は渡せなかったんだ。渡してしまったては、自分の『力』も半減してしまう。アオスの脅威があるのに、自らの『力』を減少させるような行為は出来なかったんだ。…そのかわり、『知性』のほとんどを『ユエ』に与えたんだ。」

ゼロ「彼は信じられないくらい頭がいいんですよ。それこそ…彼が

その気になれば操れない者がいないというくらいにね。その頭脳で人の心を読み、そして操る。それに普通の人が百年かかる課題を、彼なら一日も経たずに解くでしょうね。」

天満「その頭脳で『エリア』を編み出したのか…。」

真雪「凄いですね…。」

にゆう「賢いにゆ〜！羨ましいにゆ〜！」

天満「だからディークは『力を統べる者』で、『ユエ』は『知を統べる者』か…。」

シャウト「…ゼロ。」

ゼロ「あ、はい、そうですね。ではこれを…。」

天満「…これは？」

ゼロ「『フォンス』と呼ばれるモノです。いわゆる『資格者』の印みたいなモノですよ。」

天満「このビー玉みたいなモノが？」

ゼロ「僕も付けてますよ。」

天満「あ、それって…一番最初に会った時に身に付けてた…。」

ゼロ「よく覚えてましたねえ。そうです、以前見せた『タリスマン』…『フォンス』が埋め込まれているんです。」

天満「確かあの時は、これが『力』を増幅させるって言ってたよう  
な…。」

ゼロ「ええ、装備の仕方が間違ってますから、少しだけ『力』を増  
幅してくれるだけですけどね。」

天満「じゃあ、正しい装備って？」

ゼロ「ふふ…皆さん、手の甲を向けて下さい。」

天満「え？…ああ。」

シャウト「…分かった。」

真雪「はい…。」

ゼロ「それでは…。」

天満「うわっ！手にめり込んだぞっ！」

シャウト「…！」

真雪「い…痛くは無い…けど…これ大丈夫なんですか？」

天満「こ、これが正しい装備…なのか？」

ゼロ「やはりあなた方は『資格者』だったようですね。」

天満「え？」

ゼロ「本来、この『フォンス』は『資格者』でない者、つまり認められない者に触れると、粉々になるんです。」

シャウト「その『資格者』はどうやって決められたんだ？」

ゼロ「今石化している方達は、『月』の光に対して抵抗力が弱い方達なんです。」

天満「え？それならシンセーテン達なら大丈夫なんじゃ！だってデイクに創られたんだろ？」

ゼロ「『鍊』で構成されているモノは、『月』に『鍊』を吸収されているものですから駄目なんです。ですから霊神は全滅です。もちろん邪霊もね。」

真雪「でしたら、シャウトさんは…？」

天満「そうだ！シャウトは霊神だぞ！何でシャウトは無事なんだ？」

ゼロ「それは…。」

シャウト「『デイクの羽』…だな？」

ゼロ「おや？さすがですねえ。」

天満「どういうことだ？」

シャウト「私は『デイクの羽』をずっと持っていた。ジ阿斯を天満に移した時からな。一年前に、天満達を人間界に送った時に灰に

なったが、ずっと持っていたお陰で、私は『月』に対する抵抗力が極めて高かったのだろ。うな。ディークは『月』の属性だからな。もしかしたら私の体にはまだ灰が残っているのかもしれないな…。」

天満「そうか…ディークに守られていたんだな。」

ゼロ「まあ、それしか考えられないでしょうね。それに天満くんはディークの後継者、そして真雪さんは『光の民』の後継者、ですからお二人とも『月』には高い抵抗力を持っていたんですね。」

真雪「そうでしたか…。」

にゆう「にゆうも無事にゆ〜！」

天満「そ、そっぴや、何でにゆうは無事なんだ？」

ゼロ「詳しくは分かりませんが、おそらくは『レストピア聖鍊金』ではないかと…。」

シャウト「ふむ…もしかしたら、『ポンコロ』は『レストピア』で無意識に防御壁を作っているのかもしれないな。あるいは『レストピア』は創り出す能力だ。とっさに『鍊』を『鍊』ではない『何か』に新しく創り直したのかもしれないな。そうすれば吸収から回避出来る。」

真雪「にゆうってば凄いね！」

にゆう「エッヘンにゆ〜！」

ゼロ「まだまだ謎が多い生物ですからね、『ポンコロ』は。」

天満「あ、そうだ！ところで…『エリア』はどうしたら使えるのかな？」

ゼロ「では『エリア』を詳しく説明しますね。先程も言いましたが、『ユエ』さんは、『錬術』ではない新たな『領域<sup>エリア</sup>』を生み出しました。これは先程皆さんに与えた『フォンス』から出る、『想いの力』なんです。」

天満「『想いの力』？」

ゼロ「はい。この『フォンス』は、持ち主の『想いの力』を増幅させ、形を成してくれるモノなんです。『錬術』は使い手の『錬』を用いますが、『エリア』は『錬』と『想いの力』両方が合わさった『力』なんですよ。」

シャウト「成程な…『錬』でない『錬』を超えた『力』か。」

真雪「こんなに小さいのに、凄いですね。」

ゼロ「例えば僕の場合……ほら、『氷』という文字が現れます。」

天満「本当だ！」

ゼロ「この『フォンス』は、その持ち主の資質にあった『力』として、形を成してくれるんです。」

シャウト「成程な…。」

ゼロ「そして『フォンス』には『領域<sup>エリア</sup>レベル』というモノがありま

す。」

天満「『エリアレベル』？」

真雪「確かさつきは、『レベル1』とか言っていましたよね？」

ゼロ「よく覚えてましたね。そのとおりです。『レベル』は全部で三つあるとされています。」

シャウト「『レベル』が上がると、どうなるんだ？」

ゼロ「通常の属性能力に付加能力が現れます。」

天満「特別な何かが、元の能力にプラスされるってことかい？」

ゼロ「はい。シャウトさんには、もうお見せしたと思いますよ。」

シャウト「え？……『氷紋』か！」

天満「何だいそれ？」

シャウト「確か『氷』で印をつけた所に、瞬間移動出来るという能力だ。そうか…『瞬間移動能力』が、お前の付加能力なんだな？」

ゼロ「さすがはシャウトさん！そのとおりです！」

天満「なるほどな。付加能力ってそういうモノなんだ…。」

ゼロ「『レベル』が上がると、『フォンス』に記される文字が増えていくんですよ。形も変えてね。『氷』から『氷紋』といった具合

にね。」

真雪「それが『エリア』なんですね……。でもどうやったら使えるようになるんですか？」

天満「確かに、『想い』とか言われても、正直よく分からないもんな……。」

ゼロ「必要な時がくれば『フォンス』が導いてくれますよ。その人にあつた『力』としてね。」

シャウト「だが、さすがは『ユエ』だな。明らかに『錬術』よりも『強い力』である『エリア』を編み出したなんてな。唯一無二の頭脳を持つ研究者の『ユエ』だからこそ出来たんだろうがな。」

ゼロ「彼の頭脳には際限がありませんからね。その頭脳で導き出された答えには、驚異的な『力』があります。このまま放っておけば、必ず『地球』は滅びます。」

天満「そんなこと、絶対にさせるもんか！」

真雪「私達の『地球』は私達を守るわ！」

シャウト「そうだ！『ユエ』……組織『叢雲』を必ず止めなければならぬ！」

ゼロ「石化された方々を元に戻すためにもね。」

天満「よしっ！『月』に行こう！」

ゼロ「待つて下さい！」

天満「どうしたんだい？」

ゼロ「すみません。ですが、少し調べなければいけないんです。」

天満「何をだい？」

ゼロ「『月』への道『コズミックブリッジ』のことです。」

天満「ええ！ゼロが知ってるんじゃないのか！」

ゼロ「すみません。全く知らないんですよ。」

天満「そんなあ…時間が無いのに…。」

ゼロ「大丈夫です。何の手がかりも無いわけじゃありません。」

天満「本当か！」

ゼロ「ええ、実は…僕は『月』には行ったことが無いのですが、組織の者が口を滑らせたことがあるんです。」

真雪「何をですか？」

ゼロ「ある場所に、『コズミックブリッジ』に関するデータを残してきたと…まあ、口を滑らせたというか、盗み聞きしたんですけどね。」

シャウト「ある場所とは？」

ゼロ「『ハクウェル研究所』です。」

シャウト「あの忌まわしい、因縁の場所にか…。」

天満「アーミヤが実験を受けていた所…。」

真雪「……………」

にゆう「真雪………… 大丈夫にゆ？」

真雪「うん、大丈夫よ。ありがとう、にゆう。」

ゼロ「今はもう使われていませんが、様々な資料が残ってあるはず  
です。」

シャウト「行ってみよう。」

天満「真雪…。」

真雪「行こう、天くん！」

天満「真雪………… ああ！」

ゼロ「では参りましょうか！『ハクウェル研究所』に！」

次回に続く



### 第三劇『再会』

天満「くそ…みんな石になってる…。」

真雪「あれは！」

シャウト「…。」

真雪「…ミリアちゃん…。」

天満「ララアさんまで…。」

真雪「絶対…絶対元に戻してあげるからね…。」

天満「ジアスやシンセーテンは？」

シャウト「シンセーテンは『極の宝塔』で石化していた。ジアスは…舟の中だ。」

天満「そうか……そういや…『鍊』で動く『ディークの箱舟』は起動しないんだよな…。」

ゼロ「はいはい、沈んでいても何も始まりませんよ。石化した皆さんを救うために、一刻も早く『ハクウェル研究所』へ参りましょう！」

天満「ああ！」

にゅう「気合いにゅー！頑張るにゅー！」

シャウト「うむ、そのとおりだな！」

真雪「行きましょう！」

（『ハクウエル研究所』へ向かう）

天満「ここも花や草木が枯れてる…生命エネルギーを…『鍊』を吸いとられてるせいかな…。地面にも…生きてる感じがしないな…。」

ゼロ「あとのくらい、『地球』が耐えてくれるかですね。」

シャウト「せっかく、ネオスが破壊した、町や村などが、この一年で元通りになりかけてたというのにな…。」

真雪「どうしてこつても他人を傷つけることが平気で出来るの…？」

ゼロ「我々には感情がありますからね。恐怖、憎悪、疑心、悲哀、嫉妬、そういった負の感情がある限り、残念ですが、他人との間にズレが生じ、結果争いを起こしたり、傷つけたりしてしまうんですね。」

真雪「悲しいことですね…。」

にゆう「悲しいにゆう…。」

天満「でも、それだけじゃないだろ？俺達は変わるんだ。心から笑える人達がいる限り、まだ未来を諦めちゃいけないよ！」

シャウト「天満の言うとおりだ。」

真雪「そくだよね。」

ゼロ「ふふ…。」

にゅう「さすが天満にゅ〜！」

シャウト「…はっ！誰だ！」

皆「！」

？「ん……ああっ！」

天満「あっ！『サイガ』！」

サイガ「おお！おお！誰や思たら、懐かしいやないか！久しぶりやなあ、天満！」

ゼロ「これは驚きですね…まさか僕達以外にも『資格者』がいたなんて…。」

サイガ「『資格者』？ちゅうかゼロまでおんのかい！ちゅうことは、何ややつぱり、ややこしいこと起こるとるんか？石化する奴もおるようやし…。」

天満「そうなんだ…えと…サイガは一人なのかい？」

サイガ「ちゃうちゃう。アイズもおるで！」

天満「アイズも無事なのかい？」

サイガ「せや、ピンピンしとんで！生意気ぶりも全然変わってへんけどな！」

ゼロ「アイズくんまで……ですか……これはもう絆ですね。こうまで『月』の光に抵抗がある方々が、知り合いにいたなんて。」

サイガ「何やよう分からへんけど、とりあえず来いや。」

天満「どこに？」

サイガ「立ち話もなんやろ？今ワイ達が住んどるトコに案内したるさかい。」

天満「ああ……分かった。」

サイガ「せや、天満？」

天満「何だい？」

サイガ「アイズがお前に会いたがつとつたで！しょっちゅう、お前の話しとつたからなあ！」

天満「俺だつてアイズに会いたかったよ！こんな形で再会するとは思わなかったけどな。」

サイガ「せやろな………おお、ココやココや。」

天満「ここはまさか…。」

ゼロ「『ハクウェル研究所』です…。」

サイガ「何や、知つとったんか？」

天満「俺達はここに用があつて来たんだよ。」

サイガ「さよか……まあ、詳しい話は後や。こっち来い。」

（小屋がある）

サイガ「『アイズ』！今帰ったで！」

アイズ「ん？遅いぞ！それで、しっかり食べ物は見つけ……！」

天満「久しぶりだな、アイズ…。」

アイズ「て…天…満……天満なのか！」

天満「ああ。」

アイズ「ん？ゼロまでいるとなると……やはりこの異変は…。」

ゼロ「いやはや、相変わらず察しがよろしいですねえ。」

アイズ「ふん…。」

天満「アイズ……会いたかったよ。」

アイズ「う……と……とりあえず中に入るといい。詳しい話を聞かせてくれ……天満。」

天満「ああ……ありがとう。」

（小屋に入り説明）

シャウト「……ということだ。」

アイズ「なるほどな……道理で僕のレイゼクスや、サイガのネスゲイトが石化するはずだな。」

サイガ「そんで……『エリア』っちゅう『力』はワイらにも使えんのか？」

ゼロ「ええ……では手の甲を向けて下さい。」

アイズ「……。」

サイガ「アイズ？」

ゼロ「どうしました？」

アイズ「……気に入くないな。」

天満「アイズ……。」

アイズ「お前は一度僕達を裏切ってる。簡単に信用出来ると思ってるのか？その『フォンス』とやらも、実は毒とか、僕達を操る何かかもしれない。」

ゼロ「おやおや、嫌われたものですねえ。」

アイズ「それだけのことを、お前がしただけのことだ。」

ゼロ「確かに僕はあなた方を利用しています。戦力は多い方がいいですからね。」

アイズ「……。」

サイガ「ええやんか！」

アイズ「サイガ？」

サイガ「ワイは信じたんで！確かにゼロは、底の知れん奴や。せやけど、今の話に関しては嘘は言ってへんと思うんや。」

アイズ「何を！……根拠は？」

サイガ「んなもん、ただの勘やで！」

アイズ「はあ？あんな、僕達の命に関わる重要なことなんだぞ！それをお前は勘だと？ふざけている場合じゃ……。」

天満「頼むアイズ！」

アイズ「天満……。」

天満「頼むアイズ……ゼロを……もう一度だけ信じてやってくれ……。」

アイズ「しかし……。」

サイガ「ワイからも頼むわアイズ！」

シャウト「ゼロが言うとおり、今は戦力が多いにこしたことはない。  
アイズ……頼む。」

真雪「お願いします！」

にゅう「お願いにゅー！」

アイズ「……ふう……分かった。」

天満「アイズ！」

アイズ「だがゼロ、覚えておけ！次は無いからな！」

ゼロ「肝に銘じておきますよ。」

アイズ「では、さつさとその『フォンス』とやらをよこせ。」

ゼロ「はいはい、ではお二人とも、手の甲を向けて下さい。」

サイガ「おわっ！めり込んだでっ！大丈夫なんかコレ？」

アイズ「これが『フォンス』か……。」

ゼロ「先程話したとおり、必要な時期が来たら、『フォンス』が導いてくれますよ。」

アイズ「…分かった。」

天満「ところでアイズ達はなんでここに？」

アイズ「…。」

天満「アイズ？」

アイズ「…ある研究資料を探してるんだ。」

天満「何の研究資料なんだい？」

アイズ「そ、それは…。」

サイガ「アイズ…。」

アイズ「大丈夫だ。天満達には…知ってもらいたいんだ。」

サイガ「せやけどお前…。」

天満「一体どうしたんだ？」

アイズ「実はな……『クローン研究』の資料を探してたんだ。」

天満「『クローン』……アイズ……。で、でも何で……。」

アイズ「僕がサイガの『クローン』なのは知っているだろう？」

天満「あ、ああ…。」

アイズ「世界で最初の『クローン』…それが僕だ。だけど…。」

天満「アイズ？」

アイズ「不完全なんだ。」

天満「え…？」

ゼロ「成程…。」

アイズ「確かに僕はサイガの『クローン』として、唯一の成功体だ。けど、『クローン技術』が完全なモノで無かった時代に作られた僕だ。僕の体は…17歳以降から急激に衰弱し始める。サイガが教えてくれた…。」

サイガ「…。」

天満「何だって！何とかならないのか？」

サイガ「そのために、ワイらはゼロに言われたとおりに、ここにアイズを救う何かを探しに来たんや。」

天満「ゼロ、お前なら何か…。」

ゼロ「詳しくは僕にも分かりません。ただ僕は、『ハクウェル研究所』に、『オルテナ』の全ての研究資料が残っていると、ネオス様

に聞いていましたから、それを教えて差し上げただけです。サイガさんは、そのことを知るためにネオス様についていたんです。ですが、ネオス様も、ご存知だったのは、それだけなんです。」

天満「そんな…アイズ…何か…何か見つかったのか？」

アイズ「この一年で、色々探してみた…『クローン研究』の資料はあったが…。」

シャウト「『クローン』を完全な個体にする資料は無かったと…。」

サイガ「せや…それにや、天満達が探してるうちゅう、『コズミツクブリッジ』なんちゅう資料も無かったで。」

天満「え？嘘…！」

ゼロ「地下室は調べたんですか？あそこは隠し部屋になってますからね。」

アイズ「ああ、もちろんだ。だが、地下室にあったのは、アーミアの資料だけだった。」

ゼロ「おかしいですね…。となると考えられるのはただ一つですね。」

天満「考えられることって？」

ゼロ「誰かが研究資料を持ち出した…ということです。」

アイズ「その可能性も考えたさ。だから研究に携わった奴らを探し

てたんだが、皆ネオスに殺されている……王達みたいにな。」

ゼロ「ふむ……。」

天満「このままじゃ『地球』が……それにアイズも……。」

シャウト「デイク……我々はどうすればいい……教えてくれ……。」

にゆう「にゅ……。」

ゼロ「アイズくん、研究に携わった者達を探したと言いましたよね？」

アイズ「それがどうした？」

ゼロ「ここにいた全ての者を調べましたか？」

アイズ「ん？」

天満「何が言いたいんだ？」

ゼロ「全てですか？」

アイズ「ああ……調べたが……。」

ゼロ「『闇医者』も……ですか？」

アイズ「……何だそれは？」

ゼロ「ただの『医者』ではなく、『闇医者』と呼ばれる、実験体達

を診察する『医者』がいたはずです。」

アイズ「は？そんな奴のデータなんか無かったぞ！」

ゼロ「当然です。ラファール王が、エーテル王にバレないように、密かに組織したんですから。実験体達を、ここから出すことは出来ない。だが少しでも長く生きていられるようにと、ラファール王が実験体達のために、組織したんです。」

アイズ「そんな組織があつたのか…。」

ゼロ「『闇医者』は三人いました。ですが、二人は既にネオス様によつて葬られています。」

天満「じゃあ残りの一人が生きてるんだな？」

ゼロ「はい、ネオス様が見つけれなかった程の者です。簡単には死んではないでしょう。」

アイズ「じゃあそいつが研究資料を？」

ゼロ「可能性はあります。」

天満「よしっ！光が見えてきたぞ！」

真雪「うん！」

ゼロ「もう一度地下室に行きましょう。その者について、何か残っているかもしれません。」

アイズ「…分かった。」

サイガ「せやな。」

シャウト「ところで、名前は分かるのか？」

ゼロ「実は『闇医者』のことなどは、『ユエ』さんに聞いたんです。その時『ユエ』さんが言っていました。『闇医者』の中で、『万薬の師』と呼ばれる者のことを。その方なら、あるいは『コズミックブリッジ』のことも知っているかもしれません。」

天満「へえ…。」

ゼロ「研究者達からは『Dr・サリーオ』と呼ばれています。おそらくは…その方が生き残っていると思います。」

（地下室へ）

真雪「凄く寒い…。」

ゼロ「部屋が暖かいと、薬に影響がありますからね。ですから常に温度を低くしておかないといけないようです。」

真雪「そうなんですか？」

天満「これ着てろよ。」

真雪「え…いいよ…天くんだって寒いでしょ？」

天満「いいから着てろって！ほら！」

真雪「あ……天くん…ありがとう。」

ゼロ「本当にアーミアさんの研究資料だけですね…。」

アイズ「この地下室だって、散々探したんだ。『クローン』のことも、『コズミックブリッジ』のことも無かったさ……何も…無かった…。」

サイガ「アイズ…。」

にゆう「にゅ？この穴にゅ？にゅ…何も見えないにゅ…！にゅ…そうにゅ！」

天満「何だ！地震か？」

真雪「天くん！」

ゼロ「違います！診察台が二つに分かれてるんです！」

アイズ「これは……地下に通じる階段か…？」

サイガ「なんでや！ワイらも色々やったけど、何も起こらんかったで？」

にゆう「ごめんにゅ…。」

天満「え？にゆうが何かしたの？」

シャウト「何をしたんだ、にゅっ?」

にゅっ「これ見てにゅっ。」

次回に続く

#### 第四劇『計画』

天満「何を見るんだい？」

みゆう「この壁にゆゝ！」

真雪「何？……何も無いような……。」

ゼロ「いえ、ここに小さな穴があります。」

にゆう「この穴にゆゝ！」

天満「この穴が何だい？」

ゼロ「…まさか…この穴…。」

シャウト「もしかして穴の奥に………かすかにスイッチみたいなのが見えるな。」

アイズ「そのスイッチを押したのか？どうやってだ？」

にゆう「コレにゆゝ！」

サイガ「針？どこにそないなもんあつたんや？」

にゆう「作つたにゆゝ！」

ゼロ「『レストピア』…ですね。」

アイズ「そうか…その『力』で、針を作ったんだな。」

にゆう「そうにゅ〜！」

サイガ「せやけど…これは気付かへんわ！にゆうがおって良かった  
つちゅうこつちやな！まさかこないなトコにスイッチがあつたなんてな…。」

アイズ「僕らの一年は一体…。」

天満「まあまあ、にゆうのお陰で、先に進むことができるんだ。ありがとうな、にゆう。」

にゆう「にゅ〜〜〜！」

シャウト「それでは行こうか！この階段の先に！」

にゆう「行くにゅ〜！」

天満「行こう！」

（階段を降りる）

天満「ゼロ、この先には何があるのかな？」

ゼロ「はい…恐らくは最高機密の研究資料保管庫ではないかと…。  
なんせ、隠し部屋にあった、さらに隠された通路なんですから。」

真雪「でも結構歩きましたよね？何処まで続いているんでしょうか？」

ゼロ「確かにもう二十分は歩きましたね。いつまで続くんでしょうかね…この階段…。」

シャウト「これは帰りは骨が折れるな…。」

サイガ「嫌やなあゝ帰りはこれ登らなあかんのか…。」

アイズ「ん？扉があるぞ！」

天満「これは…ぐ…開かない！」

シャウト「この感じ…。」

ゼロ「『エリア』ですね…。」

天満「え？」

ゼロ「見て下さい、『フォンス』が埋め込まれています！」

シャウト「やはりか…しかし…。」

ゼロ「シャウトさんの疑問は当然ですね。」

天満「どういうことだ？」

アイズ「『エリア』は『ユエ』が編み出した技術なんだろう？その技術が、何故この扉に施されているのか…。」

サイガ「せやな…まあ、一つ分かることは、この先に『ユエ』が関わっとる何かがあるっちゅうこっちゃな。」

天満「そうか…。」

アイズ「問題は『ハクウエル研究所』で、『ユエ』は何をしていたかだ。」

ゼロ「僕達の疑問の全てが、この先にあるかもしれません。」

天満「でもどうやって扉を開けるんだ？」

ゼロ「ふむ…『フォンス』には『閉』の文字が記されていますね…。『スタンスエリア』ですか…やっかいですね…。」

アイズ「何だ、『スタンスエリア』というのは？」

ゼロ「これは、あなた方が『力』に目覚めてから、お話しするつもりでしたが、まあいいでしょう。『エリア』には、『自然の力』を集め、増幅し具現化する『ネイチャーエリア』と、『力』を固定化させて対象物の状態や状況などに影響を与えたりする『スタンスエリア』の二つがあります。ちなみに僕は『氷』ですから『ネイチャーエリア』ですね。」

天満「それで…この扉は『スタンスエリア』で…何でやっかいなんだ？」

ゼロ「『ネイチャー』と違って『スタンス』の方は、術者自身の『力』で対象物の状態を左右するものがほとんどなんです。」

シャウト「つまり扉に施された『エリア』は、施術者しか解けないのか？」

ゼロ「本来はそれはずなんですけど……」

アイズ「何か手立てがあるのか？」

ゼロ「この扉に限って……ですがね。以前にも言いましたが、本来の使用方法は、生物に『フォンス』を埋め込み、その装備者の『想いの力』を発現させることです。ですがこれは、僕の『タリスマン』のような使い方をしています。」

天満「確か……その使い方だと、『力』を少し強化してくれるだけなんだよな？」

ゼロ「はい。」

真雪「ではどうすればいいんですか？」

ゼロ「簡単です。この『フォンス』を破壊するんです。」

サイガ「んなこと出来んのか？」

ゼロ「『フォンス』は生物に埋め込んで『力』を発動させます。ですから普通なら術者を探して、解かせなくてはならないですが、先程も言いましたが、間違った使い方、『フォンス』が直接扉に埋め込まれています。」

アイズ「そうか！『エリア』というのは『フォンス』から出る『力』

…その『フォンス』の『力』を上回る『力』で破壊すれば、術は解ける！」

ゼロ「そのとおりです。」

天満「じゃあ早く壊そう！」

ゼロ「幸いにも、弱い『レベル1』のようですから、僕の『エリア』で破壊できるはずですよ。」

天満「じゃあゼロ、頼む！」

ゼロ「分かりました。皆さんは下がっていて下さい。近くにいると巻き込まれますよ。」

天満「わ、分かった！」

にゅう「にゅー！」

ゼロ「では…。」

にゅう「凄い力を感じるにゅ…。」

アイズ「『フォンス』が光ってる…。」

ゼロ「『氷の領域・氷の蒼陣<sup>ソウジン</sup>』！行け！」

天満「スゲエ…。」

真雪「凄い！」

シャウト「『錬術』とはレベルが違うな…。」

アイズ「まさかこれほどのモノとはな。」

サイガ「ホンマ驚きやで…。」

にゅう「ビックリにゅ〜!」

ゼロ「ふう…どうやら看破したようですね。では行きましょか。」

天満「あ、ああ。」

ゼロ「皆さんも早く、僕のレベルまで来て下さいね。」

アイズ「ふん、偉そうに…。」

天満「まあまあ。」

シャウト「この部屋…かなり広いな!」

ゼロ「保管庫…みたいですね、やはり。」

シャウト「そのようだな…。ここに我々が探している資料があるといいんだがな。」

ゼロ「…これは驚きましたねえ…『禁忌種の実体』に『クローン理論』に『霊神解体法』……これは!」

天満「どうかしたか?」

ゼロ「『融合生命体創造計画』……『フュージョニア計画』！」

シャウト「何だと！」

天満「それって何だい？」

ゼロ「…。」

シャウト「『ユエ』の奴…。」

天満「だから何なんだ？」

ゼロ「名前の通りですよ。」

シャウト「生命体を融合させて、新たな種を創造する計画だ。」

天満「融合？」

アイズ「なるほどな…そのための手始めに『クローン実験』か…？」

サイガ「アイズ…。」

ゼロ「そのようですね。まず『クローン』を生み出し、『クローン』同士を融合させて実験をする。」

天満「な…何だって！…『ユエ』は一体何のために…。」

アイズ「く…。」

ゼロ「もう一つ…真実がありそうですね。」

真雪「もう一つの真実ですか？」

ゼロ「ええ…この研究を率先して行っていた者は誰ですか？」

シャウト「…そうか！」

アイズ「エーテル王だ…なるほどな…。」

天満「エーテル王がこの計画を進めていたのか？」

ゼロ「正確には『ユエ』さんがさせていた…エーテル王を操ってね。」

天満「それじゃあ…。」

ゼロ「データを一通り取って、用がなくなつたから、今度はネオス様を操って、エーテル王を処分…。」

天満「操って…ってそんな簡単に他人を操れるんて！」

シャウト「それができるのが『ユエ』なんだ。恐らく、エーテル王は『ユエ』の口車に乗せられたんだろ。罠とは知らずにな。そしてネオスには、その復讐心を操って、自分にとって不必要になつた者を一掃するよう仕向けた。散々利用したあげく、ゴミのように捨てたんだ。」

真雪「酷い…そんな…それじゃアーミアさんのこともですか？」

ゼロ「それも『ユエ』さんがさせていたんでしょうね。ほら、コレを見て下さい。」

真雪「『第一特別種能力解離法』…これは？」

アイズ「僕や天満や真雪のような、普通の生物とは違った能力を持つモノから、能力だけを取り除くことを進めた計画みたいだな。まあ、僕の場合は能力というより、世界で最初の『クローン成功例』として、エーテル王が欲したわけだな。」

サイガ「ワイらの親は…ホンマに馬鹿やで…。こないな計画に加担しとったやなんて！」

アイズ「サイガ…。」

ゼロ「全ての計画は、この『フュージョニア計画』のための準備だったようですね。」

シャウト「そのようだな…。」

ゼロ「まだ『ユエ』さんが何をしたいのか分かりませんが、一先ず我々の目的を優先しましょう！」

天満「『銀河の架け橋』<sup>「コスミックブリッジ」</sup>だな。」

ゼロ「いえ、その資料が残っているとは思えません。ですから先程も言ったとおり、『闇医者サリーオ』さんについての資料を探して下さい。」

アイズ「悪いが、僕は『クローン』についての資料を探させてもら

う。」

サイガ「あ、待てやアイズ！」

ゼロ「やれやれ…。」

天満「いいよ、アイズの気持ちは分かるから。だから…俺達は俺達で調べよう。」

シャウト「そうだな。」

真雪「うん。」

にゅう「頑張るにゅ〜！」

ゼロ「やりますか。」

（数時間経過）

シャウト「とりあえず分かったことを話し合おうか。」

ゼロ「ふむ…どうやら皆さん…あまりいい結果では無かったようですね。」

天満「あるにはあったんだけどさ…居場所までは…。」

真雪「私もです…。」

にゅう「にゅ…。」

シャウト「ゼロはどうだ？」

ゼロ「正確な居場所…までは分かりませんが、『サリーオ』さんが住んでいた場所は掴めましたよ。」

シャウト「そうか…こちらでも重大なことが分かった。」

天満「重大なこと？」

シャウト「これだ…。」

天満「『月の繁栄』？……これは？」

シャウト「中に『ユエ』が今行っていることが書いてあった。」

天満「何だって！」

シャウト「無論『ユエ』の目的の全てが書いてあるわけではないが、大まかな内容は分かるぞ。」

ゼロ「見せて頂けますか？」

シャウト「ああ。」

ゼロ「……………」。

天満「ゼロ？」

ゼロ「…ふむ。」

真雪「一体…。」

ゼロ「どうやら『地球』の壊滅まで、計画は三段階あるみたいですね。」

天満「三段階…。今…今は…？」

ゼロ「今はまだ一段階みたいですな。」

天満「はあ…良かった…。」

ゼロ「安堵している暇は無いですよ。時間的に言って、一段階はもうすぐ終わって、二段階に移行します。」

天満「そんな！」

真雪「だったら急がなきゃいけないじゃないですか！」

シャウト「一段階『アフソーブ錬吸』、二段階『フルエリア最高領域』、三段階『オールムーン大満月』と…二段階と三段階の詳しい内容は分からないが、一段階の終わりは砂漠化した時みたいだな。」

真雪「砂漠化って…。」

ゼロ「まず生体が石化します。そして、段々と全てが枯渴していきます。もうすぐで完全に枯渴してしまい、砂漠化します。すると一段階終了です。」

アイス「なるほどな。」

天満「アイス！」

ゼロ「お目当てのモノはあったんですか？」

アイス「…。」

天満「無かった…のか？」

サイガ「あんのはあったんやけど…ワイらの知りたいトコは…。」

天満「どうだったんだ？」

アイス「破られていた…。」

ゼロ「恐らくは誰かが、『クローン』を完全体にする計画資料のみを破棄したんでしょうね。」

真雪「何の為にですか？」

ゼロ「『クローン』の研究を独占したい者が奪っていったか……あるいは…。」

天満「ゼロ？」

ゼロ「ふう…今は確証が無いですから、発言は控えておきますね。」

アイス「貴様…何か知っているなら話せ！」

ゼロ「ですから確証無いことは控えておきます。間違ってるかもしれないから……それに……全ては『サリーオ』さんの所で分かると思いますよ。」

アイズ「ち……。」

サイガ「ならさっさと行こうや!」

シャウト「ところでゼロ、『サリーオ』の住んでいた場所とは何処だ?」

ゼロ「『アストラル』です。」

アイズ「何処だ?知ってるか?」

サイガ「聞いた事あるような無いような……。」

シャウト「『アストラル』ってまさか!」

ゼロ「さすがシャウトさんは博識ですね!」

アイズ「一体何処なんだ?」

ゼロ「船ですよ!お・ふ・ね!」

アイズ「船だと!」

サイガ「けったいなトコが住まいなんやなあ。」

ゼロ「とりあえず行きますか。船がある場所はここから最南端『ゴ

「ドリナ大陸」です！

天満「よし、行こう！」

次回に続く

## 第五劇『暗望』

天満「ああっ！地面が砂になってる！」

ゼロ「危険ですね…一刻も早く『叢雲』を止めないと、本当に『地球』が滅びます。」

シャウト「急いで『サリーオ』を探そう！」

(『叢雲』は)

？「もうすぐだ…もうすぐ一段階が終了する。」

？「ふう…ところで『ユナイマ』よお！お前がマジ目がつけた人間、マジ『資格者』じゃ無かったじゃねえかよ！」

ユナイマ「おかしいですね…。確か、新垣剣斗といいましたか…それに相田琴花…それに…。」

？「その者達…本当に…『フォンス』を…覚醒させられる者…なのか…？」

ユナイマ「そう感じたから、あの時助けたのですがね。」

？「へっ、マジ石化しちまってるじゃねえかよ！」

ユナイマ「そうですね…。」

？「ナニナニ？ユナってば、その子達にご執心なお？」

？「今は止まっていたとしても、『時』がくれば、針が動くだろう。」

ユナイマ「『時』……ですか……あなたは全てを見通しているのですね。」

？「私は私の成すべきことをしているだけだ。それに、見通せるのは私ではないだろう？」

ユナイマ「…そうですね。」

？「私は…必ず果たす……これだけは譲れない。」

ユナイマ「………ところで…動き出しましたよ。恐らくは『ドクタ―』に会いに行ったのでしょね。あなたのお考え通りに…。」

？「私の考えというより、『ユインシス』の『領域』が出した答えだ。」

ユナイマ「そうでしたね…。」

？「…ユナイマ………私は…。」

ユナイマ「はい？」

？「…いや、何でもない。」

ユナイマ「……。」

？「さあ、仕上げにかかろう。」

（天満は）

天満「ここが『ゴードリナ大陸』か……。」

シャウト「本来なら、ここ『ゴードリナ大陸』にある街『シャンプティ』は、踊りが盛んな街で、毎年今頃になると『舞踏会』が開かれて、賑やかな街なんだが……。」

アイズ「まるでゴーストタウンだな。」

サイガ「ホンマにこないなトコにおるんか？」

ゼロ「石化している方々は大勢いらっしやいますがね。」

シャウト「港に行こう。私達が探している船『アストラル号』があるはずだ。」

アイズ「だがそんな船の名前は聞いたことが無いぞ。」

シャウト「『闇医者』や研究者などのためだけに造られた船だからな。非公式で造られた船なのだから、知らなくても仕方ないな。」

天満「でもさ、サイガの言うとおり、本当にいるのかな？こんな状況なのに……。」

アイズ「問題はそれだけじゃない。たとえば見つけたとしても、『サ  
リーオ』も石化している可能性だってある。」

シャウト「そうだな……お、着いたぞ。」

真雪「色々な船がありますけど、『アストラル号』はどれなんです  
か？」

ゼロ「それらしい船はありませんね。」

シャウト「この資料によると、この港のどこかに、地下に通じる道  
があるはずなんだが……。」

天満「それらしいモノも見当たらないな……。」

にゆう「……にゅ？……なんか甘い匂いがするにゅ……！」

真雪「本当……何の匂いかな？」

シャウト「この匂い……マズイ！皆、急いでここから……っ。」

天満「シャウト！」

アイズ「く……催眠ガス……か……。」

サイガ「……あ……あかん……。」

ゼロ「ば……僕としたことが……油断……しました……く……。」

真雪「天…くん…。」

にゆう「にゅ…。」

天満「真雪っ！みんなっ！」

？「これは驚いたな…アンタは平気なのか？」

天満「誰だ？」

？「とぼけんじゃないよ！アタシを捕えに来たんだろ！」

天満「え？捕まえる？」

サリーオ「…違うのかい？ん……そうか…アンタが『ディーノ』かい？」

天満「え…と…。」

（数十分後）

シャウト「う…。」

天満「あ、シャウト！気が付いたのか？」

シャウト「…天満……はっ！そうだ！みんなは？確か…。」

天満「大丈夫だよ。」

ゼロ「…どういふことが説明して頂けますか？」

天満「ゼロ！皆も、起きたんだな！」

真雪「一体何が…？」

アイズ「ん？誰か来るぞ！」

天満「大丈夫だつて。」

？「ん？起きたのか…。悪かったね、てっきりアタシを捕えにきた刺客だと思つてついな。」

シャウト「天満…誰だ？」

天満「ああ、彼女は…。」

？「アタシは『サリーオ』だ。アンタ達もアタシに用があるんだつて？」

ゼロ「も？」

真雪「あなたがサリーオさん…？」

サリーオ「ああ、話は大体天満に聞いたよ。」

シャウト「では『コズミックブリッジ』のことは？」

サリーオ「もちろん知ってるさ。」

ゼロ「教えて頂けますか？」

サリーオ「……アンタ達……本当にあの『ユエ』を倒すつもりかい？」

天満「もちろんです！」

サリーオ「やめときな。」

天満「ど、どうして？」

サリーオ「どうやったって『ユエ』に敵いつこないよ。」

天満「そんなこと、やってみなきゃ分からないじゃないですか！」

サリーオ「天満……アンタがたえディークの後継者だろうと、『ユエ』には勝てないよ。」

天満「そういえば、何で俺がディークの後継者だって知ってるんですか？」

ゼロ「……『ユエ』さん……ですか？」

サリーオ「アンタがゼロだね。……そうさ、全ては『ユエ』の『默示録』<sup>ログ</sup>の導きの通りさ。」

ゼロ「……。」

天満「何ですかそれ？」

サリーオ「未来の出来事が刻まれた『何か』…だ…。」

アイズ「馬鹿な！そんなものがあるわけないだろ！」

ゼロ「残念ながら事実です。『ユエ』さんは、その『黙示録』に従って、行動しているんです。」

シャウト「『ユエ』にそんな力があつたなんて…。」

サリーオ「少し違うね…。」

シャウト「え？」

サリーオ「正確には『ユエ』の力じゃない。」

天満「ということですか？」

サリーオ「『ユエ』の忠実なる右腕とでも言っておこうか…。その思想は『ユエ』と同じ暗黒に染まり、今も『地球』を滅ぼそうとしている『叢雲』が一人…名を『ユインシス』だ。」

シャウト「…『叢雲』について、知っているコトがあつたら教えてくれ。」

サリーオ「…どうしても戦うのか？」

シャウト「そのためにここまで来たんだ。」

サリーオ「それが定められた『ユエ』の思惑でもかい？」

天満「俺達は負けません！必ず勝つ！」

サリーオ「……未来は変えられないよ。」

天満「たとえそうでも、何もしないよりは全然いいですよ！あがいて、もがいて、必死に動き回りますよ！未来を変えられることを信じて！」

サリーオ「『キイル』！」

天満「え？」

サリーオの心「いや…『あの子』じゃ…『あの子』はもう…。」

天満「サリーオさん？」

サリーオ「く…。」

天満「お願いします！何もしないで運命に負けたくないんです！最後まで…とことんあがけばきっと…きっと運命は変えられるはずですよ！」

サリーオ「『キイル』………そうか………分かった…。確かに…『ユエ』の思惑を唯一越えられる奴がいるとすれば、それはきっと、天満…ディークの後継者であるアンタただだろうからね。」

天満「サリーオさん！」

サリーオの心「…もう一度…もう一度だけ…信じてみるか………未来を変えられるって…ねえ『キイル』…。」

シャウト「頼む、そのために今は情報が必要なんだ！『ユエ』や『叢雲』について、知っているコトを教えてください！」

サリーオ「分かった…だがその前にアタシのことを、話しようか。アタシはラファール王が組織した『闇医者』の一人だ。だけど、研究者でもあるんだけどね。『ハクウェル研究所』では被験者の病や傷害を診ていた。」

シャウト「ゼロの言った通りだな。」

サリーオ「『ユエ』とは、結構昔からの付き合いでね、『天球』にも何度か行ったことがある。」

天満「じゃあサリーオさんは『ユエ』の仲間だったんですか？」

サリーオ「……古い話さ……。まあ、アタシの話はこれくらいでいいだろう。…『叢雲』について話そうか…。」

天満「お願いします。」

サリーオ「『叢雲』は全部で六人。『月』の『ユエ』、『火』の『イオキス』、『水』の『フェイ』、『木』の『リアリイ』、『金』の『ユインシス』、『土』の『ユナイマ』、コイツラが『叢雲』だ。」

天満「六人…。」

サリーオ「アンタ達も『フォンス』は持っているんだろ？」

天満「はい。」

サリーオ「一つ教えておいてあげるよ。その六人は全員、最高の『レベル3』を扱える奴らだからね。」

アイズ「今のままじゃ、格が違うつてことか…。」

サリーオ「見たところ、ゼロ以外は、まだ覚醒すらしてないみたいだしね。」

天満「それは…。」

サリーオ「…アタシも『フォンス』を持つてる。」

天満「サリーオさんは『レベル3』なんですか？」

サリーオ「残念だけど、アタシは『スタンスエリア』だから、『レベル2』までが限界だね。」

シャウト「『ネイチャー』と『スタンス』は違うのか？」

サリーオ「まあ、『スタンス』は『レベル2』までというか……『ネイチャー』だけが『レベル3』を覚醒出来る可能性があるんだよ。」

天満「サリーオさんは、どんな『エリア』なんですか？」

サリーオ「そのうち見せてあげるさ。」

シャウト「それで『ユエ』の目的は何だ？」

サリーオ「アンタ達、地下の保管庫には行っただろ？」

シャウト「ああ。」

サリーオ「そこで、ある資料を見つけたはずだよ。」

サイガ「まさか…『フュージョニア計画』か？」

サリーオ「そうさ…『ユエ』の野望…それは…『新たな月』を生み出すことだ。」

皆「！」

天満「『月』を繁栄させるんじゃ…新しい『月』？」

サリーオ「『ユエ』の最終目標……『地球』との融合さ！」

皆「！」

アイズ「そうか！『地球』の全てを飲み込むつもりか！」

ゼロ「なるほど…融合…ですか。」

天満「そんなことされたら『地球』は…？」

サリーオ「『地球』に生きている全ての生物は、『月』の糧になる。そしておそらく、クローン技術で、自分の思い通りの生物だけを生み出し、支配者として君臨する。それが『月の支配者・ユエ』の暗黒の野望さ。」

ゼロ「…だから『クローン資料』をあなたは奪ったのですか？」

アイズ「！」

サリーオ「そうさ…少しでも『ユエ』の思惑を越えたくてな…。小さな悪あがきかもしれないが…。」

ゼロ「やはりあなただったんですね。『クローン資料』の重要な部分の持ち去ったのは…。」

アイズ「教えてくれっ！」

サリーオ「ん？何だい急に…。」

アイズ「僕は…。頼む！教えてくれっ！」

サイガ「ワイからも頼むわ！教えてくれへんか？」

サリーオ「お前まさか…………『アイズレスロード』かい？」

サイガ「せや…。」

天満「『アイズレスロード』…？」

サリーオ「そう…か…お前が…初の『クローン成功体』の『不完全希種』だったのかい…。」

アイズ「教えて…くれるか？」

サリーオ「…当たり前さ…元はといえばアタシのせいだからね…。」

サイガ「どういうこっちゃ？」

サリーオ「『クローン理論』を生み出したのはアタシだ。」

皆「！」

サイガ「アンタが！」

サリーオ「アタシは理論を生み出したが、怖くなって封印したんだ。アレはまだ早い……あの理論を扱えるほど、まだ生物は賢くはない……だから封印した。だけど…恐らく『ユエ』がそれを引き継ぎ、アイズを創らせた…。」

天満「また『ユエ』か…。」

サイガ「そんなもんでもええわ！」

サリーオ「え？」

サイガ「ワイはアイズが生まれてきてくれて感謝しとる…。ホンマに嬉しいんや…。だから…死んで欲しない！生きていて欲しいんや！」

アイズ「サイガ…。」

サイガ「だから教えてくれへんか？アイズを…ワイの弟を助けてえな！」

サリーオ「ふ…さつきも言っただろ？必ずアイズを完全体にしてみせる。それが理論を生み出してしまった、アタシの責任さ…。」

サイガ「ありがとう…。」

アイズ「サイガ…。…サリーオ…よろしく頼む…。」

サリーオ「ああ。…さて、あとは『コズミックブリッジ』のことだったね。」

シャウト「ああ。」

サリーオ「それについては、ある奴の方が詳しい。」

シャウト「ある奴？。」

サリーオ「今から連れてってやるよ。唯一無二の霊神…『流星のジウ・ワイコーカ』がいる『最果てのハデス峡谷』にな。」

次回に続く

## 第六劇『流星』

シャウト「『ジウ・ワイコーカ』だと！まだ生きていたのか？」

サリーオ「ああ、ピンピンしてるよ。」

天満「どんな霊神なんだい？」

シャウト「私もディークに聞いたことがあるだけで、会ったことは無いから詳しくは分からないが、ただ…この『オルテナ』の創世期に存在した霊神だそうだ。『ジウ・ワイコーカ』とは、『孤高の頂き』という意味なんだ。長い歴史の中で、エルフから、そう呼ばれるようになった。」

アイズ「最も『オルテナ』で生き、最も『オルテナ』を知っている霊神か…。」

ゼロ「一番長命な生体…ということですね。」

天満「一番長生きしてる霊神か…一体どんな霊神なんだろ…？」

サリーオ「まあ、会えば分かるさ。それに天満、お前と何の関わりも無いってわけじゃないしな。」

天満「え…？」

アイズ「ところで、その『最果てのハデス峡谷』とやらには、どうやって行くんだ？」

サリーオ「もちろんこの船でさ。」

サイガ「この船で……まさかここ船中なんか？」

天満「そうだよ。サリーオさんと二人で、皆を運んだんだよ。」

シャウト「しかし、動くのか？」

サリーオ「『アストラル号』をナメるんじゃないよ。この船は最高の科学者や研究者によって、そいつらのためだけに造られた船なんだよ。『オルテナ』で一番の乗り物なのさ。」

天満「しかも『フォンス』が原動力なんですよね？」

アイズ「そうなのか？」

サリーオ「以前はそうじゃなかったんだけどね……アタシが『ユエ』から離れた時に、いつかこの船が『ユエ』の思惑を越えるために必要になると思い、アタシが『フォンス』を埋め込んだんだ。『オルテナ』から『鍊』が消えても、動けるようにな。」

シャウト「だが『ユエ』のことだ……。」

サリーオ「ああ……もしかすると、それすらも『黙示録』に刻まれているかもしれない。アタシがこうやって動くことすら、『ユエ』の掌の上かもしれない……。」

天満「……それでも……。」

サリーオ「それでも動く……だろ？あがいて、もがいて、動き回る！

未来を変えられると信じて…。」

天満「サリーオさん…。」

サリーオ「やるよ天満！必死でな！」

天満「はい！やりましょう！」

アイズ「…ん？だが見る！海が渴れているぞ！まさか一段階が終わったのか？」

天満「そんな…このままじゃ、船が出せないんじゃない？」

サリーオ「ふふ、だから『アストラル号』をナメられちゃ困る！この船の『真の力』を見せてやるよ！」

天満「『真の力』？」

サリーオ「さあ、行くよ！『フォンス』開放！『ケーニツヒシステム』作動！」

にゅう「にゅー！動くにゅー！」

シャウト「水が無くても動くのか？」

サリーオ「『陸型変形システム（ケーニツヒシステム）』、これが水陸両用『ケーニツヒ・アストラル号』の真の姿さ！」

真雪「船の形が変わりましたね。」

アイズ「『フォンス』の『力』で、陸でも動くようにしたのか…。」  
にゆう「便利にゆ〜！便利にゆ〜！」

ゼロ「では参りましょう！『最果てのハデス峡谷』へ！」

（その頃『叢雲』は）

？「よし、一段階終了だ。」

？「はあ…マジ疲れたあ〜。『レベル2』でいいって言ってもよお、マジ長時間『エリア』を広げっぱなしはマジきちいよ！なあ、『ユナイマ』？」

ユナイマ「そうですね。」

？「けっ、マジ全然疲れて見えないつつの！マジバケモンかよお！」

ユナイマ「いえ、こう見えても、結構疲労が蓄積していますよ。」

？「ふにゆ〜肩凝ったあ〜ユナア〜肩揉んでえ〜。」

ユナイマ「すみません。これから二段階に向けて、しなければなら  
ないことがあるので、お相手出来ないんですよ…。」

？「むう〜じゃあ百歩譲って『フェイ』のお馬鹿でいいや、揉んで  
よあ〜。」

フェイ「揉むかつ！」

？「フェイのいけずう！いいもん！こうなったらイオ…。」

？「我は…揉まないぞ…。」

？「まだ何も言っていないじゃんかあ！」

フェイ「マジ自分で勝手に揉んどけ！マジ他人を使うな！あのな、マジ前から言おう言おうと思ってたけど、マジお前はな…！」

？「お腹も減ったあ！おい馬鹿フェイ、何か作れ！」

フェイ「作るかつ！てかマジ他人の話を聞けよっ！」

ユナイマ「賑やかですねえ…そう思いませんか、『ユエ』？」

ユエ「そうだな…さすがのフェイも『リアリイ』には敵わないみた  
いだな。」

リアリイ「ユエ…、馬鹿フェイがイジめるよあ！」

ユエ「ふ…。」

フェイ「マジ誰がイジメてんだよ！マジでお前が…！」

ユナイマ「まあまあ、もういいじゃないですか。リアリイも、いい  
ですね？」

リアリィ「はあゝい！」

フェィ「ちっ！マジこれだから女はマジ嫌なんだよ！」

ユエ「すまないなフェィ、許してやってくれ。リアリィだって、悪気があるわけじゃないんだ。」

フェィ「え…いや…まあ、いいけどさ…マジで…。」

リアリィ「ユエ優しいゝ！ユエだゝい好き！フェィの怒りんぼお！お馬鹿フェィなんてだゝい嫌い！」

フェィ「マ…マジこのガキヤ…！マジ悪気満載じゃねえかよ…！」

ユエ「はあ…。」

ユナイマ「やれやれですね。……ところでユエ、あの者達…『流星』のもとに向かったみたいですが、『黙示録』の導きは、どうなっているんですか？」

ユエ「……フェィ！」

フェィ「ん…何だよ？」

ユエ「お前の『エリア』を、ある所に送ってもらいたいんだ。」

フェィ「マジどこに？」

ユエ「『オルテナ』だ。」

フェイ「はあ？今更マジ何のためにだよ？」

ユエ「…『流星』のもとにな。」

フェイ「うーん…マジよく分からんけど…指令は？」

ユエ「『破壊』だ。」

フェイ「了解。じゃ、マジ送ってくるわ。」

ユナイマ「それでよろしいんですか？いくらフェイの『エリア』でも、『流星』相手では荷が勝つでしょう…。」

ユエ「まあ、いろいろとな…。」

ユナイマ「いろいろ…ですか…。」

ユエ「…さて、二段階の準備を頼む。『ユインシス』にも、そう伝えてやってくれ。」

ユナイマ「分かりました。まあ、聞いていると思いますがね…。」

（天満は）

天満「くそ…『地球』が枯渴していく…。」

ゼロ「ユエさんの目的は『地球』との『融合』…。」

サイガ「そないなこと、絶対させへん！」

アイズ「そのためにも、早く『コズミックブリッジ』を探して、『天球』に行かなければならない！」

サリーオ「安心しな！これから会う奴は、かなり気難しい奴だが、『力』になってくれると心強いぞ！」

真雪「それは頼もしいですね！」

ゼロ「見えてきましたよ！あそこが『ハデス峡谷』の入口みたいですね。」

サリーオ「…心強いと言ったものの……。」

天満「どうかしたんですか、サリーオさん？」

サリーオ「え、いや、何でもないさ。」

シャウト「ところで、『ジウ・ワイコーカ』は、『峡谷』のどこの辺にいるんだ？」

サリーオ「奴は変わり者でね、常に危険と隣り合わせの人生が信条らしいんだよ。」

シャウト「…だから？」

サリーオ「崖のギリギリの所に、小屋を建てて住んでるのさ。な、意味分らないだろ？」

真雪「ほ、本当に変わってますね…。」

にゅ「危ないにゅー！地震が起きたら……にゅー……！危ないにゅー！」

シャウト「おかしい奴だな…。」

アイズ「変人だな。」

サイガ「バカやな。」

ゼロ「皆さん、なかなかの毒舌ですねえ！」

サリーオ「ま、アタシ達とは、考えがズレてんだろうね。長く生きているせいなのか、それとも天然で変人なのか…。」

？「久方ぶりに会いに来たかと思えば、他人の悪口か…サリーオ？」

皆「！」

サリーオ「本当のことじゃないのかい、『ジウ』？」

天満「あの人が？」

アイズ「『孤高の頂き』か！」

ジウ「サリーオ…言っただけ…ここに他人を連れて来るなとな。」

サリーオ「アンタにちょっと用があつてね。」

ジウ「……面倒事か……。」

サリーオ「そう言わずに聞いてやってくれよ。アンタの孫みたいな奴もいるんだよ?」

ジウ「孫?」

サリーオ「…天満。」

天満「え?」

ジウ「天満だと?」

サリーオ「懐かしいだろ?」

アイズ「どういうことだ?」

真雪「天くん、どういうことなの?」

天満「お、俺だって、何が何だか……?」

サリーオ「言っただろ?天満に関係があるって。」

ジウ「成程な……もうそんなに月日が流れたか……。」

天満「あの……。」

サリーオ「ジウはな、お前の父親代わりだった、『星のダイン』の生みの親さ。」

皆「！」

天満「父さんの！」

ジウ「『ダイン』は……そうか……アイツは逝ったか……」

天満「…。」

サリーオ「なあ、頼む……！」

シャウト「しっ！」

サリーオ「え？」

シャウト「何か来る！………空だ！」

真雪「な、何あれ？」

ジウ「ん？あれは……。」

アイズ「霊神？いや……そんな感じじゃないな……。」

サイガ「なんやねんアレ！ごつつおるやんけ！」

ゼロ「……十匹以上はいますね。」

サリーオ「あれは確か……。」

？「ギギイ……。」

天満「俺達に何か用か？」

？「ギギイ！」

サイガ「うわ！攻撃してきよった！」

？「ギギイイ！」

真雪「きゃあああ！」

天満「真雪！このっ！」

ジウ「よせ！」

天満「え？」

ジウ「素手で触れるな……生命力を刈り取られ……下手すりゃ死ぬぜ……。」

天満「…。」

ジウ「サリーオ、どういうことだ？何故コイツラが襲ってきやがる？」

サリーオ「詳しい話はあとですよ！というか…アンタなら察しはついてんだろ？」

ジウ「…ユエか…。」

サリーオ「分かってんじゃないか！」

ジウ「奴の『黙示録』には、オレの存在も刻まれていると？」

サリーオ「みたいだな。じゃなければ、アンタの所に『水使』ミズノツカイを送ってくるわけがない！見なよ、奴らの殺気…全部アンタに向いてるよ！『ユエ』はアンタに、コイツラを送ったんだよ！」

ジウ「ちつ、『黙示録』に刻まれている限り、どれだけ拒否しようが、否応無く巻き込まれる…か。」

サリーオ「分かってんなら、さっさと手を貸しな！」

ジウ「断る。」

サリーオ「ジウ！」

ジウ「オレを巻き込むな。オレは手を貸すつもりは無い。」

サリーオ「頼むよ！アンタの『力』が必要なんだ！」

ジウ「くだいな…やらんものはやらん。『黙示録』いときで、このオレの意思は動かん。」

水使「ギギッ！」

天満「危ないっ！」

ジウ「む…！」

サリーオ「ジウッ！…………ジウ…………。」

アイズ「『水使』って奴の攻撃をモロに…………。」

サイガ「あのオッサン…………大丈夫かいな…………。」

ジウ「当たり前だ。」

サイガ「おわあ！いつのまにワイの後ろに…………！」

サリーオ「ジウ…………無事…………に決まってるよな…………アンタなら…………。」

ジウ「サリーオ、少し前言撤回だ。」

サリーオ「え…………？」

ジウ「アイツラ…………オレの酒を駄目にしやがった…………。」

サリーオ「酒…………？ああ、そっぴや持つてた…………。」

ジウ「どうやら、思い知らせてやるしかないな。オレの酒を奪うとどうなるかを…………お前達ヒヨツ子は下がってろ…………コイツラはオレが消そう…………。」

アイズ「ヒヨツ子だと…………！」

天満「危険だ！この数を一人でなんて…………しかもアイツラ、強さも半端じゃ…………！」

サリーオ「黙って見てな…………。」

天満「サリーオさん…。」

サリーオ「ジウが『流星』と呼ばれる所以……伊達じゃないよ!」

ジウ「あまりいい気になるなよ…ユエの玩具ども…。少しばかり、このオレが相手をしてやる…。」

次回に続く

## 第七劇『強星』

天満「本当に大丈夫かな…？」

アイズ「ほつとけばいいだろ？一人でやると言っただから。」

サイガ「アイズ……ヒヨツ子言われたん…根に持っとな…。」

サリーオ「見てれば分かるさ。」

ジウ「どうした？ほら、さっさとかかってこい。それともビビっちゃまったか？」

水使「ギギイ！」

ジウ「どこを攻撃してやがる？オレはここだぜ。」

水使「ギギ？」

天満「速い！」

サイガ「見えたか、アイズ？」

アイズ「ちっ…。」

ゼロ「これは予想以上ですね…。」

ジウ「一匹一匹で来るな。それじゃあ…このオレは生涯捕まらないぜ。」

水使「ギギッ！」

ジウ「こつちだ……背後から攻撃するのは構わないが、その殺気を消さなきゃ、目の前から馬鹿正直にかかって来るのと、差ほど変わらんぞ。」

真雪「凄い……後ろから攻撃されたのに……。」

にゆう「かすりもしないにゅー！強い強いにゅー！」

ジウ「さてと……早いとこ全員で来な。こちら、あまり気の長い方じゃないんでな……。お前らもせっかく生まれたんだ……どうせなら傷の一つもつけて消えたいだろ？」

天満「……かつこいい……。」

アイズ「ただのナルシストで自信過剰なだけじゃないのか？」

サリーオ「お、アイズ！そのナルシストっていうのは、抜群な表現だな！ただ……自信過剰なのかどうかは……分からないぞ。」

アイズ「……。」

ジウ「来い！」

水使「ギギイイッ！」

ジウ「ふ……。」

アイズ「とてつもない威力だな…。」

ゼロ「もし…まともに受けたら…。」

サイガ「粉々やな…。」

真雪「大丈夫でしょうか？」

天満「確かに…『超霊化』以上の威力じゃないか…？」

サリーオ「ふ…攻撃の中心を見てみな。」

天満「え？…あ……う…受け止めてる！」

アイズ「馬鹿な！あの威力だぞ！」

ゼロ「こ、これは…いよいよもって予想外ですね…。」

ジウ「ふむ…残念だったな。お前らの渾身の一撃、オレの服にすら、汚れをつけることが出来なかったようだ。」

サイガ「何てやつちゃ…。」

にゅう「すすすすごいにゅゅゅー！」

ジウ「思い出の一つとして持って行きな。ぬうんっ！」

水使「ギギ！」

サリーオ「ヤバイね…あのバカ…。アンタ達、巻き込まれたくなけ

れば、もつと離れな。」

天満「あ、はい！」

ジウ「行くぜ……『セイオウザン星凰斬』！」

水使「ギイイイイ！」

サリーオ「高速の剣撃の塊……それを上空から、敵に向け放つ。威力は……。」

ジウ「ふう……。」

サリーオ「見てのとおりだ。」

天満「あ、跡形も無い……。」

サイガ「じ、十匹以上いたんやで！」

ゼロ「……まさに剣撃の極め……ですね。」

サリーオ「まるで本当に星が落ちてきたかのような威力……まともに受ければ……ああなる。」

アイズ「……。」

(『叢雲』は)

？「ん？」

？「どうした…『フェイ』…。」

フェイ「…マジかよ…。」

？「…ん？『ユエ』さん…。」

ユエ「どうした？」

フェイ「ユエ…マジやられちゃったよ…。」

ユエ「『流星』に全滅か？」

フェイ「マジ信じらんねえ！俺の『レベル2』をマジあつさりや  
つちまいやがった…。」

ユエ「さすがは『流星』だな。」

フェイ「く…くそっ！ユエ、マジ俺を行かせてくれっ！こうなっ  
たらマジ直接潰してやるよ！」

ユエ「落ち着けフェイ、大丈夫だ。フェイのお陰で、寸分の狂いも  
生じていない。感謝している。」

フェイ「え？そ、そうか？だったらマジいいんだけどよ！」

？「ところで…ユエさん…二段階の…準備は…？」

ユエ「滞りなく進んでいる。」

？「二段階は…我々は…必要…無いのですか…？」

ユエ「ああ…皆には、一段階で消耗した『フォンス』の『力』を回復してもらいたい。二段階は『ユインシス』と『ユナイマ』だけでいい。」

？「今…彼等は…どこに…？」

ユエ「『天核<sup>テンカク</sup>』だ。私も今から向かうところだ。君達はしばらく休息を取っていてくれ。」

？「了解…しました…。」

（ユエは『天核』へ）

ユエ「どうだ？『エリア』の拡大は進んでいるか、『ユインシス』？」

ユインシス「ユエか…。」

ユエ「疲れてないか？」

ユインシス「ふ…俺は一段階では出番無しだったからな。『ユナイマ』程疲れてはいないさ。」

ユエ「そうか…。」

ユインシス「ところでユエ、そろそろ『時』が動き出すぞ。」

ユエ「新たな『金刻示<sup>キンコクシ</sup>』の導きか？」

ユインシス「ああ、刻み込んでおいた。後で『ユナイマ』に見せてもらってくれ。」

ユエ「すまないな。だが、お前の『金刻示』の『力』には、いつも助かっている。」

ユインシス「何を今更…俺の想いはお前の想い、お前の想いは俺の想いだよ。」

ユエ「ふ…。」

ユインシス「ん？」

ユエ「どうした？」

ユインシス「来たな…。」

ユエ「『時』か？」

ユインシス「ああ…。」

（『地球』に謎の人物）

？「…『地球』……かすかだが感じる。ここにいるのか…歪んだ『

時』を正してくれる者が……。……あつちか。」

（その時、剣斗と琴花は）

剣斗「く……。体が動かねえ……。くそ、あれからどれだけ時間経ったんだ？」

琴花「真雪……。扇くん……。二人とも大丈夫かな……？」

剣斗「何とかなんねえのかよ！天満……。アイツなら何とかしてくれ……。違う！頼ってどうすんだ！あの旅で何を学んだ！しっかりしやがれ新垣剣斗！諦めんなっ！俺なら出来るっ！」

琴花「この感じ……。剣斗？そう……。だね……。諦めちゃダメだね……。私達なら出来る！あの旅で学んだのは無意味じゃない！そうだね、剣斗！」

剣斗「『法術』だ！」

琴花「『法術』なら！」

剣斗「この『地球』で『法術』が使えるかどうか分かんねえけど、やってやる！はああああ……。」

琴花「剣斗も気付いたみたい。それじゃ私も！はああああ……。」

（謎の人物は）

？「……これは『法術』！いけないな…生命力を奪われている状態で使用すれば…死ぬ。……近い…あそこか！」

（剣斗は）

剣斗「ぐ…ぐう……な…何だ…『力』が抜け…て…。」

琴花「あ…ああ…何…『力』が入ら…ない…。」

剣斗「く…そ……本気出しやがれ剣斗お！お前はこんなもんなのかよっ！爆発させろっ！」

琴花「負け…るか…。このおおっ！」

？「止めなさい！」

二人「！」

？「今すぐ『法術』を解きなさい！」

剣斗「だ…誰だ？」

琴花「誰…？」

？「良かった…間に合った…。…ボクは『クロノ』、君達を縛っている『時』を解放しに来ました。」

剣斗「え？」

琴花「何言ってるの…？」

クロノ「まあ、そう言われて信じることは難しいでしょう。まずボクの話を通じてもらうために、これからあなた達の石化を解除します。」

剣斗「そんなことできるのか！」

琴花「だったら頼むわ！」

クロノの心「あれ？随分素直だな……もう少し警戒すると思ったんだけどな…。」

剣斗「おいっ！どうした！早く解いてくれよ！」

クロノ「あ、分かりました。ですが一つ条件があります。」

琴花「条件？」

剣斗「何だよ…条件って…。」

クロノ「石化を解除したら、ボクと共に来てもらいたい所があるんです。」

琴花「来てもらいたい所？」

クロノ「ええ…まあ、正しくは会って頂きたい方がいらっしゃるんです。我が主に…。」

剣斗「…悪いけどな、俺達は一刻も早く天満のトコに行きてえんだ。」

琴花「私達は行かなければならない所があるんだけど…」

クロノ「……残念だ。だったら解除の話は無しだ。君達は永遠にそのままだ。」

琴花「そんな！」

剣斗「汚ねえぞ！」

クロノ「ではこれで…」

琴花「…待って！」

剣斗「…待ってくれ！」

クロノ「…何？」

琴花「分かったよ…。」

剣斗「分かった……その代わり……用事が済んだら、早く天満のトコに連れてってくれよ！」

クロノ「ふ…分かりました。では解除します。」

剣斗「こ、こいつ…口調がコロコロと…。」

琴花「何か上手く乗せられた感じ…。」

クロノ「何か言いました？」

剣斗「何でもねえ…。」

琴花「そ、そんなことより早く！」

クロノ「分かりました。では今からあなた達の『時』を動かします。ボクが合図したら『法術』を最大に。」

二人「よしっ！」

クロノ「我らが時の神よ、縛られし者に、御身の尊きご助力により、正しき針の導きを与え、かの呪縛を解きたまへ…再び光り輝く時を！『レイズデッド』！」

剣斗「……力が…流れて来る…。」

琴花「……これなら…『法術』が…。」

二人「いけるっ！」

クロノ「今です！」

二人「『法術』最大！うおおおおー！ー！ー！っ！」

剣斗「はあはあはあ…。」

琴花「はあはあはあ…。」

クロノ「気分はどうです？」

剣斗「へ…へへ…最悪…いや…最高…かな…う。」

琴花「はは…私…もだ…う。」

クロノ「今は体を休めるといい。君達の戦いは目覚めてからのだから…。あとは…急いで『オルテナ』に行かなきゃな…。」

（天満は）

天満「本当に凄い！」

サリーオ「相変わらずだね。あの反則じみた強さ…。」

ジウ「さてと、新しい酒瓶でも取ってくるか。」

サリーオ「待てジウ！」

ジウ「あ？」

サリーオ「『力』を貸してくれるんじゃないのかい？さっき前言撤回って…。」

ジウ「オレの言ったことを聞いて無かったのか？」

サリーオ「え？」

ジウ「オレは少しだけ前言を撤回すると言ったんだぜ。他人の話は聞くもんだぜ。なあ、サリーオ？」

サリーオ「駄目だ…何を言っても聞かないか…どうすれば…。」

天満「俺と勝負して下さい！」

皆「！」

サリーオ「て、天満、アンタ何言って…！」

ジウ「…勝負？」

天満「はい！俺が勝負に勝ったら、俺達に『力』を貸して下さい！」

ジウ「…。」

真雪「無茶だよ天くん！」

シャウト「天満…何を考えているんだ？」

ゼロ「…勝負というのは…天満くん？」

天満「もちろん、一対一のタイマンだ！」

サリーオ「バカ！アンタじゃジウには！…今のアンタじゃ傷一つ付けられないよ！」

ジウ「…小僧…本気か？」

天満「約束して下さい！俺が勝つたら、『力』を貸して下さい！」

ジウ「ふむ…。」

アイズ「く…。」

サイガ「アイズ？」

アイズ「悔しいが奴の『力』は本物だ。今の天満じゃ……………絶対勝てない。」

サイガ「せやな……………天満…ヤバイで…。」

ジウ「オレは無器用なんぞ……………加減等厳しいぞ。……………死ぬ覚悟はあるのか？」

天満「そんなもの無いです！」

ジウ「む…。」

サリーオ「何言つて…。」

天満「俺は勝ちます！だから死ぬ覚悟なんて無いですよ！それに、まだ死にたく無いですからね！」

シャウト「何を…。」

アイズ「天満らしい答えだな。」

真雪「天くん！」

天満「大丈夫だって！見ててくれ、真雪！」

真雪「天くん…。」

ジウ「ふ…いいいぜ小僧、暇潰しに付き合ってやる。だが後悔するぜ……勝負の言葉をこのオレに発したことをな！」

天満「ぐっ！す、凄いや……台風みたいな力を感じる…。」

シャウト「まるで、象対蟻だな……くっ！」

ゼロ「どうするんですか…天満くん…。」

サリーオ「本当にバカだよ天満は…。」

サイガ「なんちゅう力の波動や！」

アイズ「天満…。」

にゅう「危ないにゅ…天満……にゅ…。」

真雪「天くんっ！」

ジウ「来てみる。」

天満「必ず…必ず勝っ！行くぞっ！」

次回に続く

## 第八劇『時人』

アイズ「天満、この剣を使え。」

天満「ありがとう！よし…行くぞっ！はあああ！『飛燕斬』！」

ジウ「ふ…。」

天満「どうだ？………はっ！」

ジウ「それだけか？」

天満「くっ！なら、『爆燕斬』！」

ジウ「ほう…『飛燕斬』を進化させた技か………だが…。」

天満「………これでも…。」

ジウ「…終わりか？」

天満「駄目か…。」

シャウト「強い…天満の攻撃を受けても、傷…いや…汚れ一つ付けられないのか…。」

サリーオ「『星の纏い』………ジウの周囲は常に『星の力』で覆われている。生半可な攻撃力じゃ、その防御壁を突き破れない。」

アイズ「何て奴だ…。」

サイガ「そいつで、『水使』の攻撃も防いだつちゆうことやな…。」

真雪「天くん…頑張って…。」

ゼロ「今のままでは無理ですね…。」

真雪「え？…じゃあどうすればいいんですか？」

ゼロ「可能性があるとすれば…。」

シャウト「『フォンス』か？」

ゼロ「ええ…ですがたとえ『フォンス』を覚醒させたとしても、可能性は薄いですね。」

真雪「どうしてですか？」

サリオオ「ジウの『星の纏い』は生半可な『力』じゃ破れない。な  
んせ、『叢雲』の一人、フェイの『レベル2』でも無傷なんだから  
ね。」

真雪「あ…。」

シャウト「天満…。」

天満「はあはあはあ…く…てやあっ！」

ジウ「ふ…どうした？もう技すら出せない程、消耗したか？」

天満「く、くそっ！」

ジウ「そら、今までの釣りだ！まだ死ぬんじゃねえぞ？」  
『星較斬』  
！」

天満「ぐわああーっ！」

真雪「天くんっ！」

アイズ「…強い。」

ジウ「小僧、生きてるか？」

天満「く…。」

ジウ「この程度か？お前の『力』では、もう無理だな。さて…。」

天満「はあはあはあ…どうする？このままじゃ…。」

ジウ「…『ダイン』は馬鹿だな…。」

天満「！」

ジウ「在りもしない希望にすがって命を落としやがった。全く…愚かな男だな。犬死にみたいなものだ。」

天満「……するな…。」

ジウ「ん？」

天満「馬鹿にするなっ！」

ジウ「む！」

真雪「天くん？」

ゼロ「この感じは！」

ジウ「…ふ。」

天満「父さんを馬鹿にするなっ！」

サリーオ「この光は！何て奴だ…怒りで『フォンス』を目覚めさせたのか！」

ジウ「よし…これで面白くなったな…。」

アイズ「天満…。」

サイガ「ごっつい『力』感じるで！」

ジウ「馬鹿にされなくなったら、否定してみな。他ならぬ自らの『力』を持つてな。」

天満「これは…『力』が湧いてくる……今までとは違う『力』…。」

ゼロ「天満くんの『エリア』…見物ですね…。」

ジウ「小僧、このオレに傷一つでも付けることができれば、及第点をやるぜ。」

天満「その言葉、忘れるなよ！父さんを馬鹿にしたこと、後悔させてやる！」

ジウ「口を動かす暇があったら、さっさと来な。」

天満「俺のこの『力』…まだ上手く制御出来ない…。けどいいんだ！一撃…一撃だけでいいから爆発してくれ！俺の『力』あつ！」

ジウ「それじゃ行くぜ！てめえの『力』で打ち消してみろ！『星凰斬』！」

アイズ「あの技は！」

サイガ「あ、あかん！」

真雪「天くんっ！」

天満「うおおおっつ！」

シャウト「天満の体が光って！」

サリオ「いや、光ってるのは剣だ！」

天満「くらえええーっつっ！」

（両者の力がぶつかり大爆発が起こり、皆爆風で吹き飛ばす）

サイガ「うわああっ！」

アイズ「くっ……ふ……ふんばれない……うわぁっ！」

シャウト「くっ……天満は！」

サリーオ「……あそこだ！」

真雪「天くんっ！大丈夫！しっかりして、天くんっ！」

天満「う……。」

シャウト「天満……無事か……。」

サイガ「あ、奴は？」

アイズ「後ろだ！」

ジウ「ふ……。」

ゼロ「あれだけの爆発でも無傷……ですか。」

ジウ「……最後の一撃……なかなか良かったぜ小僧……。」

アイズ「化け物め……。」

サリーオ「……はっ！ジウ、その顔！」

ゼロ「天満くんの一撃が入ってたのか……？」

ジウ「傷じゃない。」

アイズ「…ただの汚れか……くそ…。」

ジウ「…。」

サリーオ「ジウ？」

ジウ「ふ…全く…面倒な小僧を連れて来たもんだな、サリーオ。」

サリーオ「ジウ…。」

ジウ「小僧…お前の一撃…確かに届いてたぜ。及第点には程遠いがな。」

サリーオ「ジウ…アンタ…腕に…。」

ジウ「傷とまではいかないがな。…剣に『力』を集約し、衝撃の塊を放つ。『月の咆哮』……未熟だが最後の「一撃はまさしくそれだった。」

サリーオ「ユエと同じ『月』の『エリア』…それが天満の『力』なんだね。」

ジウ「…話を聞こうか…。」

サリーオ「ジウ！」

ジウ「オレの家で話を聞かせろ。」

サリーオ「ああ！」

アイズ「天満…やったな。」

真雪「天くん…良かったね……でもあまり無茶しないで…。」

ジウ「『ダイン』の奴、在りもしない希望…いや、在りもしないはずだった希望をキッチリ育ててやる。あの小僧……面白い。」

（ジウの家に行き説明。その頃剣斗達は）

剣斗「う……ここは？…琴花？琴花！」

琴花「うっ……剣斗？…私達……ここどこ？」

剣斗「分かんねえ…どこなんだ？」

？「ですよ！」

剣斗「ん？」

？「目が覚めたんですの？」

琴花「な、何？う…可愛い……霊神なのかな？」

？「ボクは『トト』って言いますですよ。それに、ボクは霊神じゃありませんですよ。」

剣斗「じゃあ何だ？」

トト「ボクは…。」

？「どうかしたかい、トト？」

トト「あ、ご主人様！帰ってきたんですの？おかえりなさいですの！」

？「ああ、ただいま。ん？あ、起きたんですね。」

剣斗「お前は！」

？「改めて自己紹介しますね。ボクは『時の神』の側近、『時人ク  
ロノ』と言います。この子は『時人形』のトトです。」

琴花「『時人形』？」

クロノ「はい。元はただの人形だったんですが、ボクのために『時の神』が命を吹き込んで下さったんです。」

トト「ですの！」

クロノ「トトはボクのかげがえのない友達です。」

トト「ご主人様…。」

剣斗「な、何かスゲエんだな…。と、ところでさ、ここはどこなんだ？」

クロノ「ああ、そうでしたね。どうぞ、ボクについてきて下さい。」

剣斗「あ、ああ。」

琴花「う、うん。」

クロノ「……いかがです？」

剣斗「な、何かスゲエんだな……。」

琴花「そのセリフ、さっきも言ったよ剣斗。」

剣斗「ほつとけ！」

琴花「でも確かに不思議なところだあ……。」

剣斗「人形が動き回ってやがるし……。」

クロノ「ここが我ら『時人』の国『アリスシティ』です。」

剣斗「へえ……『オルテナ』にこんなトコがあつたんだな。」

クロノ「違いますよ。」

剣斗「え？」

クロノ「ここは『地球』ではありません。」

剣斗「はい？」

琴花「じ、じゃあ…どこなのさ？」

クロノ「正確には、あなた達が住んでいる『地球』では無いということですよ。」

琴花「どういうこと？」

クロノ「トト。」

トト「はいですよ！ここは、遥か未来の『地球』と呼ばれていた星の一部なんですの！」

剣斗「一部？意味がさっぱり。。。」

トト「つまり、未来の『地球』の残骸ですよ！」

琴花「ち、ちよつと待った！…ていうことは…。」

クロノ「はい…そう遠くない未来…あなた達の『地球』が滅びます。」

二人「！」

クロノ「…それはある一人の者により起こされる事実なんです。」

剣斗「ま、まさか…そんなわけ…。」

琴花「そ…うだよ！何言ってるのさ！」

クロノ「信じられないのも無理ありません。ですからあなた達に来

て頂いたんです。知ってもらったために。」

二人「…。」

クロノ「まずは、ボクの主『時の神』に会って下さい。全てはそれからです。」

剣斗「…ああ。」

琴花「…うん。」

剣斗「天満……一体何が起こってんだよ……。」

クロノ「……ここです。この『時の座』に我らが『時の女神アリス』様がいらつしやいます。あ、そうそう、『アリス』様は人の心を見抜く『力』をお持ちです。気を付けて下さいね。」

二人「マジ!」

クロノ「大マジです。」

剣斗の心「気を付けろって言われてもなあ……。おっかねえババアが出てきたらどうしよう?。」

琴花の心「女神っていうんだから、綺麗な人なんだろうなあ。ま、私も負けてはいないけどね。」

クロノの心「あの顔、何考えてんだか……。」

剣斗「……へえ。」

琴花「……広い。」

クロノ「『アリス』様、お二人をお連れしました。」

剣斗「わあ…めっちゃ美人…スタイルもいいし…。良かったあ…おつかねえババアが出てこなくて。」

琴花「く、悔しいけど負けたわ…何食べたらあんなボインに…。」

アリスの心「ふふ、面白い人達。」

クロノ「アリス様。」

アリス「ええ、剣斗さん、琴花さん、遥々ご足労頂き、本当に感謝しています。ありがとうございます。」

剣斗「え？ああ、そんなのいいんですよ！気にしないで下さい！アハハ！」

琴花「何鼻の下伸ばしてんだ！」

剣斗「んぐっ！」

アリス「ふふ、本当に面白い人達。」

剣斗「いやあ〜そうっすか〜。」

琴花「懲りないのか！」

剣斗「あうつ！」

クロノ「二人とも、いいかげんにしなさい！」

トト「面白いですよ！」

クロノ「トトまで……はあ……。アリス様……。」

アリス「ええ、私の名前はアリスと申します。ここ『アリスシティ』を統括している者です。」

剣斗「あ、そうだ！あの……『地球』が滅ぶって……本当なんですか？」

アリス「残念ですが事実なのです。今のままでは『地球』の時間は破壊されてしまいます。」

琴花「でも急にそんなこと言われても信じることなんて！」

アリス「出来ないでしょう。ですが事実なのです。こちらを御覧下さい。」

剣斗「こ、この映像って……。」

琴花「何なのコレ……。」

アリス「驚かれたことでしょう。これが今の『地球』なのです。」

剣斗「これが『地球』……。」

アリス「そして…この未来は、すぐそこまで来ています。」

琴花「で、でもやっぱ信じられないよ!」

剣斗「石……俺達は石になってたよな?まさかそれって…。」

アリス「石化自体は関係ありません。ですが、全てが無関係というわけではないのです。いわば、『地球』破滅への序曲なのです。」

剣斗「誰…だよ……一体誰がそんなこと!」

アリス「実は…。」

琴花「実は?」

アリス「『時人』なのです。」

剣斗「それって!」

クロノ「そう、ボク達のことです。」

琴花「じゃあアンタ達が『地球』を!」

クロノ「勘違いするな!」

二人「!」

クロノ「『時人』といっても、ここで生まれたというだけで、ボク達とは関係ないんだ!」

アリス「クロノ。」

クロノ「はっ……す、すみません。」

アリス「確かに『地球』を手にかけたのは『時人』です。」

剣斗「一体どんな奴なんだ……？」

アリス「時空の彼方……時の狭間<sup>ハザマ</sup>」から『黒の波紋』が現れました。  
」

琴花「『黒の波紋』？」

アリス「銀河に漂う『負のエネルギー』のことです。それがここ『アリスシティ』に流れ着きました。この国は時間の流れが早いのです。そのせいで『黒の波紋』は凄まじい早さで成長していき、ある時それは形を保つようになりました。」

剣斗「形？」

アリス「あそこに見える『時計塔』で、それは完全な人の形を持って、存在しました。その者の名前は『アイオーン』、『暗黒の時』を統べる者です。」

次回に続く

## 第九劇『時代』

剣斗「『アイオーン』…そいつが『地球』を…。」

アリス「はい。その者は私達の前で『アイオーン』と名乗りました。『アイオーン』は『黒の波紋』より生まれた『無』として存在する者なんです。そして…。」

琴花「そして？」

クロノ「奴は言った…『手始めに銀河の光を奪う』と…。」

剣斗「『光』？」

クロノ「自分が存在する空間に光はいらない。美しいモノも、輝いているモノも、何もいらぬ。全てを無のままに…。」と。」

剣斗「で、でも『地球』は関係なくないか？というかそもそも『アイオーン』で奴は、この時代の奴なんだろ？それが何で！」

アリス「あの者は言いました、『過去も未来もない……白は黒に、光は闇に、全ての明るさは暗さに包まれ…最後には無が全てを支配する』と…。『地球』は本当に美しい惑星です。またそこに生きづいている者達も、愛を育み、働き汗を流し、『光』ある日々を生きています。」

クロノ「愛情、友情、努力、必死、人が放つ命の輝き……そんな『光』は奴にとって、苦痛でしかないみたいなんです。そして奴は、銀河の中で最も美しい惑星『地球』に目をつけました。…奴は『地

球』が一番輝きを失いつつある時代を狙い、『光』を消し去るために、あなた達のもとに行くんです。時を渡つてです…。」

剣斗「そ、それじゃ今が…『地球』が一番弱つてゐることなのか？」

クロノ「弱つてゐる……違います。今あなた達の時代の『地球』は、進化しようとしているんです。」

琴花「もう！全然意味が分からないんですけど！」

クロノ「『ある者』が、この未来を知り、変えるために行動しているんです。ですが、今『地球』が一番無防備な状態であることには変わりはありません。そしてその時を狙い、奴が現れるんです。」

琴花「ちよつと待って！『ある者』って誰？」

アリス「あなた方を石化させた者です。」

二人「！」

剣斗「どういうことだ？『地球』破滅を阻止するために行動してんじゃないのか？」

琴花「そうだよ！何のために石化する必要があるのさ？」

トト「全ては『地球』のためですの！」

二人「え？」

トト「少しでも『アイオーン』に『地球』の存在を気付かれないためですの！」

剣斗「それと石化に何の関係があんだよ？」

トト「『アイオーン』は今『地球』を探してるのですの！ですから『地球』の存在を隠すために、生きている人達を石化したのですの！」

クロノ「そうです。『アイオーン』は『光』に敏感です。より強い『光』を滅することが奴の目的です。ですから少しでも『地球』から『光』を隠す必要があつたんです。『アイオーン』に気付かれないために。」

剣斗「じ、じゃあ『地球』は大丈夫なんだな？」

クロノ「いいえ、奴は必ず近いうちに『地球』に辿り着きます。『地球』が『光』を失わない限りは…。今は『ある者』が『強い力』で、『光』を抑えているに過ぎないですから。…まあ、抑えているというより、皆から『生氣』という『光』を奪っていると言った方が正しいですね。」

剣斗「う…味方なのか敵なのか分かんねえな…。」

琴花「あのさあ、さつきから出てくる『ある者』って、一体全体、どんな奴なの？」

クロノ「…アリス様。」

アリス「構いません。」

クロノ「分かりました。……名前は『ユインシス』、この『アリス  
シティ』から、あなた達の時代に行き、石化をさせた張本人です。」

剣斗「つーことは…そいつも？」

クロノ「はい…『時人』です。」

剣斗「やっぱり…。」

クロノ「それに…。」

剣斗「ん？」

クロノ「…。」

剣斗「クロノ？」

クロノ「あ…。」

アリス「私の兄です。」

二人「！」

琴花「お兄さん！」

アリス「そうです…。」

（アリスの過去）

アリス「お兄様！過去にお渡りになられるというのは本当なのですか？」

ユインシス「ああ…本当だよ。」

アリス「何故なのです？…はっ！……お兄様…。」

ユインシス「アリス…心を見通すお前に隠し事は出来ないな。そうだよ、過去に行き…奴を消す。」

アリス「いけません！」

ユインシス「アリス…。」

アリス「過去や未来に干渉することは禁じ手とされているはずですよ！私達『時人』は、『時』を静かに見守ることを義務とされているはずです！」

ユインシス「そんなことは百も承知だよ。」

アリス「お兄様！」

ユインシス「…俺の未来が見えたんだよ。」

アリス「…『エリア』…ですか？」

ユインシス「ああ…俺の未来は…『エリア』の生みの親を助けることなんだよ。」

アリス「ま、まさか…。」

ユインシス「そうだよ…。これから行く時代は…。俺達の祖先…俺達を命を懸け、生み出してくれた者の時代だよ…。」

アリス「『地球』が破壊され…それでもお諦めにならず、『地球』を救われるために、ご研究なされた…。」

ユインシス「そう…ユエだよ。」

アリス「お兄様は…『アイオーン』を討つおつもりなのですね？」

ユインシス「…ああ。」

アリス「お兄様のお気持ちは分かります。ですが…それでも！」

ユインシス「この未来は変えられないかもしれない。」

アリス「悲しいことですが、『アイオーン』は絶対的です。たとえば『時の神』であるお兄様でも…。」

ユインシス「ああ…無理かもしれない。ユエでも、手も足も出なかった相手だ。俺が過去に行き、あがいたところで、未来を変えるなんて出来ないかもしれない。だけど…『地球』……本当はもっと美しいはずなんだ。この広大な銀河の中でも、眩し過ぎるくらい輝いている惑星のほずなんだ。俺達の生みの親が愛した『地球』……俺はそれを守りたいんだよ…アリス…。」

アリス「お兄様…。」

ユインシス「この未来も悪くはないよ……。だけど、どうせなら、もっと美しい未来を望みたいんだよ。」

アリス「…ですが、お兄様がいらっしやなければ『時の国』は、どうなるのですか？」

ユインシス「お前がいる。それにクロノもいる。お前達がいてくれれば、『時の国』は揺るがない。」

アリス「…ユナイマはご存じなのですか？」

ユインシス「もちろんだよ。二人で決めたことだよ。」

アリス「どうしても、行かれるのですね？」

ユインシス「すまない。俺は最後まで、勝手な兄だったよな。」

アリス「最後だなんておっしゃらないで下さい！」

ユインシス「アリス…。」

アリス「必ず…必ず帰って来て下さると約束なさって下さい！」

ユインシス「……ありがとう。」

アリス「違います！」

ユインシス「ああ、分かってるよ。最後じゃない。必ずまた、新たな『時』のもとで、会おう。」

アリス「ユナイマにも…お伝え下さい。お待ちしておりますと…」

ユインシス「…ああ。アリス……また会おうな…」

アリス「はい、必ず…」

（現代へ）

剣斗「ユインシス…」

アリス「今兄は、あなた方の時代で、ユエ様とともに、『地球』をお救いになるべく、行動を起こしてらっしゃると思います。」

琴花「ユエって、どんな人なの？『オルテナ』にいるの？」

クロノ「違います。」

琴花「じゃあどこにいるの？」

クロノ「『月』です。」

琴花「はあ？『月』って…あの『月』？」

クロノ「それでは説明しましょうか。」

（ユエの説明）

剣斗「もう一人のディークがユエ？」

琴花「信じられないけど……扇くんは知ってるのかな？」

剣斗「そうだ！早く天満に知らせてやんねえと！」

クロノ「『ディーノ』さんですね。大丈夫ですよ。どうやら新たな力を得て、『月』への道を探して動いているみたいですから。」

剣斗「そうか……。それで、俺達はこれからどうすればいいんだ？」

クロノ「ボク達を信じて頂けますか？」

剣斗「まだ実感が無いから、全部は厳しいけどな、今『地球』に何かが起こってるのは確かみたいだ。」

琴花「うん。それに真雪達も頑張ってるみたいだし、私達だけのんびりしてらんないよ！」

剣斗「ああ、そのとおりだぜ！」

アリス「お二人はお強いんですね……。」

剣斗「いやあ、あ、そうだ！確かここって未来の『地球』なんだよな？」

クロノ「そうですが、それが何か？」

剣斗「クロノ達の時代の過去も、『アイオーン』に『地球』が破壊

されたんだよな？」

クロノ「そうなりますね……。」

剣斗「俺達は……『アイオーン』に勝てなかった……ていうことなんだな？」

クロノ「ボク達の過去では、あなた達は『アイオーン』と戦ってさえいないんです。」

琴花「な、何で？」

クロノ「何も知らず、何も気付かず、一瞬で『地球』は『アイオーン』の『無』に飲み込まれました。」

剣斗「そうか……。」

アリス「唯一『無』から逃れることが出来たのが、ユエ様だったのです。そこでユエ様は、長年を懸け、私達『時人』をお創りになられました。ご自身のお命をお懸けになって……。」

琴花「だったら今はもう、あなた達の知ってる過去じゃないんだね？」

アリス「……はい。」

琴花「それじゃ、未来は変わるかもしれないんだね。」

剣斗「ああ、絶対変わる！いや、天満と俺達なら、絶対変えられるぜ！」

クロノ「そう思ったから、あなた達を選んだんです。新たな未来を創る者達として…。」

剣斗「よし！クロノ、俺達を天満のトコに連れてってくれ！」

クロノ「その前に、あなた達には『力』を身に付けて欲しいんです。今のままじゃ、『アイオーン』どころか、奴が生み出す『無の破片』にも手が出ません。」

剣斗「何かよく分かんねえけど、強くならなきゃいけないんだな？」

クロノ「はい。」

剣斗「分かった！」

琴花「早く『力』を身に付けて、真雪達を手助けに行かなきゃ！」

クロノ「それじゃトト、後は頼むよ。」

トト「任されたですよ！」

クロノ「ではアリス様。」

アリス「…お気を付けて。」

剣斗「どっか行くのか？」

クロノ「新たな戦力をね…。」

トト「さあ、行くですよ！こつちですよ！」

剣斗「あ、ああ…。行くぞ琴花。」

琴花「うん。」

アリス「…お兄様………どうかご無事で…。」

（天満は）

ジウ「成程な。それで『月』への道を探してると。」

サリーオ「ああ。アンタなら発動させられるだろう？」

ジウ「…。」

天満「う…。」

真雪「天くん！」

天満「ま…真雪…。…ここは…？」

ジウ「目が覚めたか小僧？」

天満「…俺は…負けたんだよな…。」

ジウ「…ああ、負けだな。」

天満「…。」

ジウ「まあ、いい負けっぷりだったかな。」

天満「え？」

アイズ「お前は確かに負けた。だが、奴の心を動かす負けっぷりだったということだ。」

サイガ「そういうこっちゃ！」

シャウト「…ここはジウの家だ。ジウに話を聞いてもらっているんだ。」

天満「そ、それじゃ！」

ジウ「力を貸すかどうかは、話を聞いてからだかな。」

ゼロ「天満くんのお陰ですよ。」

サリーオ「それで、どうなんだいジウ？」

ジウ「……少し小僧と話したいが…いいか？」

サリーオ「え？…ああ…分かった。アタシ達は外に出てるよ。」

真雪「天くん…。」

天満「大丈夫だよ。待っててくれ。」

真雪「…うん。」

（二人を残し、皆家から出る）

天満「…。」

ジウ「…。」

天満「…あ、あの…。」

ジウ「何だ？」

天満「は、話って…。」

ジウ「…。」

天満「……。」

ジウ「…お前に話しておかなければならないことがある。頼まれたことがな…。」

天満「え？頼まれたこと？」

ジウ「お前の父親…『ダイン』にだ。」

天満「父さんに？」

次回に続く

## 第十劇『記憶』

天満「父さんに頼まれたって…。」

ジウ「お前は先の戦いで、自分の生い立ちを理解したんだろ？」

天満「あ、はい…。俺がデイクの後継者だとか、ジアスのこととか…。」

ジウ「そうか…。やはりまだ肝心な部分は教えて貰ってないようだな。」

天満「え？肝心な部分？」

ジウ「…もう受けとめる器はしっかり出来てるだろうからな。そろそろ教えておこうか。」

天満「…。」

ジウ「ついて来い。」

天満「あの…どこに？」

ジウ「いいからついて来い。お前に渡すモノがある。」

天満「…はい。」

（家の裏口から出て、ある洞窟に到着）

天満「ここは…?」

ジウ「『黄泉玉』<sup>ヨミタマ</sup>が安置されているところだ。」

天満「『黄泉玉』?それって…。」

ジウ「行きや分かる。行つて来い。」

天満「え?行つて来いつて…。」

ジウ「中でお前を待っている奴がいる。」

天満「俺を?」

ジウ「いいか?中に入ったら、『黄泉玉』がある。それに触れるんだ。」

天満「あ…。」

ジウ「さっさと行つて来い。時間が無いんだろ?」

天満「……分かりました。」

(天満は洞窟に入る)

ジウ「…オレにこんな面倒な事させやがって……お前は死んでも迷

惑かけやがる。だが最後のわがまま……だったな。……これでいいな……『ダイン』……。」

（天満は）

天満「暗い……… けど何だろう……… 初めて来たはずなのに……… 何だか懐かしい感じがする……… ン？ 行き止まりじゃないか！……… どうすれば………」

（その時、足下が崩れる）

天満「な！ うわああーっ！……… いてて……… どこだよここ？……… あれは……… 『玉』？……… もしかして、これが『黄泉玉』かな？……… さ……… 触ればいいんだよな……… よしっ！」

（『玉』から光が放たれる）

天満「うわっ！ ぐっ……… 頭に……… 何かが！」

（天満の頭に過去の記憶が流し込まれる）

？「オレは君と離れたくない！ たとえハンターに狙われたとしても

！  
」

？「『ダイン』さん…。」

ダイン「オレは君と…そして…『ディーノ』と暮らしたい！このオレには、責が重いのは十分理解している！だけど、この子を…二人で育てていきたいんだ！」

？「…なら…私を拐ってくれますか？この偽りの王国から。」

ダイン「一緒に暮らそう、『マーティア』…。」

マーティア「ダインさん！」

（天満は）

天満「ぐっ…今…のは…父さんと…母…さん…これは…ぐうっ！」

（再び天満の頭に過去の記憶が流し込まれる）

ダイン「もう少しだ！もう少しでディーク達が、アオスを倒してくれるはずだ！だから最後まで諦めるな！決して邪霊を人間界には入れるな！行くぞ、『八闘士』達！」

八闘士「おう！」

（天満は）

天満「今の……は……ぐうつ！」

（再び過去の記憶）

ダイン「頼む、オレが死んだら、あの子に……オレの息子に渡して欲しいんだ。『黄泉玉』に遺した……このオレの全てを……。」

ジウ「ふざけるな！まだ戦うつつもりか！そうやって、傷付けて傷付けられて、テメエはいつまで、そんなくだらない事を続けるつもりだ！」

ダイン「オレは……勝つ為に戦ってるわけじゃない……。大切な人を守るために……負けない為に戦うんだ！」

ジウ「……話にならん。もういい、お前のような馬鹿は、もうオレの息子でも何でもねえ。勝手にしやがれ！」

ダイン「……悪い。……オレの最後のわがまま……お願いします。……それじゃ……お元気で……。」

ジウ「……大馬鹿が……。」

（天満は）

天満「そ…そうか…これは…父さん…の…記憶か…ぐう  
っ！」

（再び過去の記憶）

ダイン「はあはあはあ…どうやら…ディークの奴…やったみたい  
だな…。」

？「ダイン…。」

ダイン「ん？『ディーク』？お前、何故ここに？」

ディーク「すまない…。今は時間が無い…詳しい話はシャウトに聞  
いてくれ。」

ダイン「…ディーク…この感じ…お前まさか！」

ディーク「すまない…。」

ダイン「ディーク…。」

ディーク「だからこそ、お前に…希望を託したいんだ。」

ダイン「希望？」

ディーク「これを…。」

ダイン「…これは？」

ディーク「私の『力』の源…『翡翠魂』<sup>ヒスイコン</sup>だ。これをお前に託したい。」

ダイン「お前っ！」

ディーク「希望を…育ててくれ。ダインなら、安心して私の『力』を託せる。」

ダイン「これは…だがこのままでは…。」

ディーク「ああ…そのままでは、ただの『力の塊』だ。だからお前の『星の力』を使って、新たな命として……た……のむ……本当に……す……まな……い…。」

ダイン「ディーク！」

ディーク「希望…を…。」

ダイン「…希望…。」

（天満は）

天満「も…もしかして……あ…あれが……ぐうつ！」

（再び過去の記憶）

ダイン「…デイク……希望……オレ達の希望…オレが…オレ達が育ててみせるぜ！」

マーティア「ダインさん…。」

ダイン「この子は…強く育ってくれるだろうか？」

マーティア「当たり前ですよ。私達の子供なのですから。」

ダイン「そうだな…。」

マーティア「そういえば、この子の名前は決めているのですか？」

ダイン「ああ…。」

マーティア「教えてくださいませんか？」

ダイン「『ディーノ』だ…。」

マーティア「『ディーノ』ですか…。」

ダイン「『天を満たす者』…それがこの子の名前。」

マーティア「素晴らしい名前ですね。」

ダイン「この子の中には、『月』の意味、『星』の意味、そして…

…この子自身の意思が脈打ってる。夜空に見える数多くの星々……空一杯に満たす、あの輝く世界のように、でかく育って欲しい。」

マーティア「そうですね…。」

ダイン「近いうち、この子は自分の運命を知ることになる。そして、戦う時も来るはずだ。だがそんな時が来ようと、この子には…『デイーノ』には、大切な人を守る為に戦う意思を、貫いてもらいたい。」

マーティア「でも本当は…普通の子供のように、普通の人生を歩んでもらいたいのですね？」

ダイン「もちろんだ。だが運命の螺旋は、否応無く、この子を巻き込み、苦しめるだろうな。」

マーティア「…。」

ダイン「だがこの子なら、真っ直ぐに、強く育ってくれるはずだ。オレはそう信じてる。」

マーティア「私達も一緒ですからね。」

ダイン「……ああ…そうだな…。」

（天満は）

天満「父…さん……母…さん……俺は…ぐうっ！」

(再び過去の記憶)

ダイン「くそっ！」

マーティア「ダインさん！」

ダイン「このままでは……くそっ！ハンターどもが！」

マーティア「やはりこの『レアブレード』を盗んだことが原因でしようか？」

ダイン「それもあるが、狙いは…『ディーノ』だろうな。」

マーティア「え？」

ダイン「この子は希望だ！それを気に入らないヤツがいる…いや、存在しては邪魔だと思うヤツがいるんだ。」

マーティア「お父様…ですか？」

ダイン「…それは…。」

マーティア「いいんです。私にも、もう全て分かっています。あの人にとって…子供…いえ、自分以外の者はただの操り人形です。それにあの人は私の名前をろくに呼んでくれたことなんてありません…。自分の子供を作っては、何人も人体実験に使用している人です……『ディーノ』も捕まれば、散々実験されたあげく、必ず殺さ

れます。」

ダイン「…君の母親も…そうだったな…。」

マーティア「はい…あの人に殺されました。あんなことは王の……いえ、人がすることでは無いです！王というシステムを利用した悪魔です！この王国は、偽りの王国です！」

ダイン「必ず守るぞ！オレ達の子供を！行くぞ！」

マーティア「はい！行きましょ、『ディーノ』！」

ディーノ「うん…。」

（天満は）

天満「俺が……王に……何のために……ぐうっ！」

（再び過去の記憶）

？「終わりだなっ！全ての元凶である、『星』のダイン、キサマを殺すっ！いや、キサマも希望も殺せば、全てが終わる！」

ダイン「くっ、『ハンター』か！」

マーティア「ダインさん！」

ディーノ「お父さん……。」

ダイン「ディーノ……ふふ……そうだな……。」

マーティア「ダインさん?。」

ダイン「マーティア……ディーノを頼む!。」

マーティア「え?どういう……まさか!。」

ダインの心「オレの『力』は全てディーノに渡した……。今のオレに出来る事があるとしたら……そうだな……。」

ハンター「さあ、覚悟してもらっぜ!王に逆らう愚者どもが!。」

ダイン「ディーノ!。」

ディーノ「え?何……?。」

ダイン「悪いな……お前を育ててやる事が出来なかった……。」

マーティア「ダインさん!。」

ダイン「マーティア……オレはお前達を守る!人間界への扉を開き、お前達を送る!……安心しろ!オレの心はいつもお前達の側にある!。」

マーティア「そんなっ!。」

ディーノ「だ…駄目だよお！」

ダイン「ディーノ……男ならでかくなれ！大切な人を守る意思を強く育てろ！そして……母さんを…守ってくれ…。」

ディーノ「お父さんっ！」

マーティア「嫌っ！ダインさん！」

ダイン「忘れるなよ！オレの背中を越えろっ！空を……お前の『力』で天を満たしてやれっ！」

ハンター「コイツ、まさかつ！自爆する気が！」

ダインの心「マーティア……ディーノ……また会えたらいいな…。」

マーティア「ダインさあああ……んつつっ！」

ディーノ「お父さあああ……んつつっ！」

（天満は）

天満「はあはあはあ……と…父さん…。な…何でだよ…何で今更こんなもんを…。」

？「お前は全てを理解しなければならぬからだ。」

天満「誰？」

？「私は『黄泉玉の使者』。触れた者に、在りし日の記憶を読ませし者。」

天満「『使者』？」

使者「この『黄泉玉』は、全ての歴史を綴る曆。そして、お前に見せたのは、試練とも言える過去。思い出さたくない過去。知り得たくない過去。また、知らなければならぬ過去。」

天満「な、何で父さんの記憶を見せたんだ！」

使者「言っただけだ。お前は全てを知らなければならないと。」

天満「何で…。」

使者「お前の生まれた意味。託された希望……それを教えて貰いたいと、『ある者』に頼まれたからだ。」

天満「だ、誰に？」

使者「『星の者』にだ。」

天満「父さんに！そうか…ジウさんが言ってた、渡したいモノって記憶なのか！」

使者「『星の者』が遺したメッセージがある。伝えるぞ？」

天満「父さんの……頼む！」

使者「承知した。では再び『黄泉玉』に触れるがいい。」

天満「ああ……。」

（頭に直接言葉が流れてくる）

ダイン「デイーノ……久しぶりだな……。」

天満「父さん……。」

ダイン「お前がこのメッセージを聞いてるってことは……オレはもうお前の側に居ないってことだな……。本当にすまないな、お前をオレの手で育ててやることが出来なかった。」

天満「……。」

ダイン「これからお前に話すことがある。だが聞くか聞かないかは、お前の自由だ。嫌ならこのまま『黄泉玉』から手を放し、洞窟から出て行けばいい。少し待ってやる……決めな。オレは……絶対に聞けとは言わない……これから話すことは、お前にとつての真実であり、最も辛い真実だろう。お前の真実は……お前を裏切るかもしれない。それでも、聞く覚悟があるなら、再び触れ。」

天満「……俺の真実……。」

使者「お前の望む通りにすればいい。私はただそれを見守るだけだ。運命を受け入れるか、背を向けるか……。決めるのはお前だ……天満とやら……。」

天満「…俺は……俺は……」

次回に続く

## 第十一劇『真情』

天満「…俺は…。」

使者「怖いかな？」

天満「そ…そりや…。」

使者「先程も言ったが、これは試練みたいなものだ。ここで試練を放棄することも出来るぞ。」

天満「…。」

使者「試練は過酷…真実はお前の身を滅ぼすかもしれない。生半かな意思と覚悟で臨めば、自らの精神を崩壊することもある。それほどこの真実を知り、受け入れることは難しい。だから…。」

天満「俺さ…。」

使者「ん？」

天満「俺…あなたの声…嫌いじゃないよ…。何かさ、聞いてると勇気が湧いてくる。」

使者「…。」

天満「へへ…確かに怖いさ。でもさ…約束したんだよ。大切な人を守るって！でかくなるってさ！」

使者「……ふ。」

天満「さあ、『黄泉玉』よ、俺に真実を教えてくれ！」

（天満は『黄泉玉』を触る）

ダイン「そうか……強くなったんだな……。今のオレにはお前の姿を見ることはできないが、きっとオレの想像以上に成長したんだろうな……心も体も……。オレは嬉しく思うぜ！」

天満「父さん……。」

ダイン「なら話そう。お前の真実を。」

天満「……。」

（その頃真雪達は）

真雪「天くん……。」

サリーオ「心配かい？」

真雪「サリーオさん！……はい。」

サリーオ「心配無しさ。ジウは天満の祖父にあたる奴だ。悪いようにはしないよ。」

真雪「そうだといいんですけど…」

にゆう「大丈夫にゅー！ジウ、悪い人じゃないにゅー！だからだから、大丈夫にゅー！」

真雪「ありがとう、にゆう。」

アイズ「それにしても、長いな…。」

サイガ「せやな…もうかれこれ一時間くらいや…。」

ゼロ「少し家の中を見てみましょうか…。」

サイガ「だったらワイが見たる！……………な、なんやて！」

アイズ「どうした！」

サイガ「……天満がおらへん…。」

シャウト「何だって！」

サリーオ「ちよつとときな！ジウツ！」

ジウ「ん？何か用か？」

サリーオ「何か用かって……話は？天満はどこなんだ？」

ジウ「…さあな…。」

アイズ「キサマ、ふざけるな！天満をどこへやった！」

サイガ「せやで！話があるっちゅうから、ワイ達は外に出たんやで！」

サリーオ「ジウ、何をしたんだ？」

ジウ「やれやれ…やかましい連中だな。」

アイズ「何だと！」

ジウ「小僧を信じろ。」

アイズ「な…何を…。」

ジウ「オレが言えるのはこれだけだ。今小僧は『虚無の世界』にいるだろう。果てのない絶望を感じているかもしれん。だが本当に小僧を信じてるなら、待ってやれ。」

アイズ「キサマ…さつきから何を…。」

真雪「…天くんは戻ってくるんですね？」

ジウ「小僧次第だな。」

真雪「分かりました。私は天くんを信じます！」

シャウト「そうだな…。天満なら、たとえどんなことがあるって、くじけはしないな。」

（天満は）

天満「くっ……そうか……だから俺はエルフでも人間でもないって  
いうのか……。それに……俺にそんな使命があつたなんて……くそ  
……」

使者「勘違いするな。使命なんかではない。どうするかは、お前自身  
が決めることができる。」

天満「……」

使者「ハッキリ言つて、私はお前が『どちら』を選ぼうと、どうでも  
いい。」

天満「何だよそれっ！あんたもここに住んでるんだろ？だったら……  
！」

使者「私はここに有つて無い存在だ。」

天満「く……だから俺がどっちを選んでも関係無いっていうのか？」

使者「私はただ真実を管理し、時に伝え、見守る存在だ。お前が『  
どちら』を選ぼうと、私はただそれを見守るだけだ。」

天満「俺の選択に……世界の運命が……関係しててもか？」

使者「そつだ……」

天満「そうか…。」

使者「だが…。」

天満「ん？」

使者「お前を信じよう…。」

天満「え？」

使者「お前が『どちら』を選ぶかは分からない。だがお前が悩み…見出した答えなら、それがお前にとって、かけがえのない真実なのだろう。私はただ、お前の答えを待つとしよう。」

天満「……へへ……卑怯だよなあ…俺はっか苦しませてさ。」

使者「そうか…。」

天満「でも…ありがとう。…うん、俺には仲間がいる。信じあえる仲間が。だから大丈夫さ……『その時』が来ても……俺の答えは一つだよ。」

使者「急いで結論を出す必要はないのだぞ。」

天満「いいや…俺にとって真実がいくつもあつたとしても、俺が選ぶ真実はいつも一つだよ。たとえ間違っていようと、俺は自分で信じた道を進む！」

使者「…そうか。」

天満「色々ありがと。俺がこれからどうするか、見て欲しい。」

使者「無論だ。」

天満「また…会えるかな？」

使者「どうだろうな…だがお前が試練とも言える真実を知った…。私の役目は終わった。あとは見守るだけだ。また会えるかどうかは分からない。」

天満「残念だな…。」

使者「そうだな…。」

天満「……じゃあ俺行くよ。仲間が待ってる。」

使者「ああ…。」

天満「それじゃ…。」

使者「あ…。」

天満「何？」

使者「……自分を信じる…。」

天満「……へへ……少しはでかくなっただろ！」

使者「！」

天満「じゃあまた！」

使者「……本当にでかくなった……。オレはいつもお前の側にいるからな……。仲間を……。自分を信じる……。ディーノ……。」

（真雪達は）

真雪「……はっ！」

サリーオ「どうした？」

真雪「天くんが！」

アイズ「天満が戻って来たのか？」

ジウ「どうやら終わったみたいだな。」

シャウト「天満！」

天満「やあ、待たせてごめん。」

真雪「天くん……。」

天満「ごめん真雪……心配させたみたいだ。」

真雪「ううん、天くんが無事で良かった。」

天満「ありがとう。」

アイズ「天満、お前一体……」

ジウ「ほう……答えは決めたみたいだな……いや、まだ少し……戸惑ってるな……」

天満「……」

サイガ「答え？」

ゼロ「何をしてたんでしょうねえ……」

サリーオ「天満、何をしてたか聞いてもいいか？」

天満「……自分の『力』の使い方を教えてもらっていたんです。」

サリーオ「『力』の使い方？誰に？」

天満「試練を受けたんですよ……」

サリーオ「……」

ジウ「小僧、一つ聞く。」

天満「あ、はい。」

ジウ「お前は試練を受け、様々な事を知っただろう。理不尽な運命に翻弄され、己れを信じることにすら厳しいだろう。それでもお前は、戦うつもりなのか？」

天満「俺の気持ちは一つですよ。」

ジウ「他を傷付け、己れを傷付け、それでも戦い血を流すのか？」

天満「そりゃ…戦うのは怖いです。でも、俺が必死で戦うのは、相手に勝つ為だけじゃないんです。俺は大切な…。」

真雪「…。」

天満「大切な人を守る為に…絶対負けない為に戦うんです。奪わせない為に…。」

ジウ「…ふう。お前もアイツ同様、大馬鹿だな…。本当に大馬鹿だ…。」

天満「これが俺の答えなんです。」

ジウ「…負けない為の戦い…か…。だがオレは、お前達みたいな大馬鹿にはなれん。」

天満「ジウさん…。」

ジウ「だがお前を否定する理由も、もうオレには見当たらんないだろう、『力』を貸してやる。」

天満「ホントですか！」

ジウ「『月』への道に案内してやる。」

サリーオ「ジウ！」

サイガ「やったな！」

アイズ「ああ。」

シャウト「これでようやく『月』に行けるな。」

ゼロ「ええ、いよいよですね。」

にゅう「頑張るにゆ〜！」

アイズ「それで、『銀河の架け橋』<sup>コスミックブリッジ</sup>は何処にあるんだ？」

ジウ「…海の中だ。」

真雪「海…ですか…。」

ジウ「サリーオ、お前のことだ、船の用意は出来てるんだろ？」

サリーオ「ああ、抜かりは無いよ。」

ジウ「よし、では行こうか。」

天満「はい！」

（その頃ユエは）

ユエ「『フェイ』。」

フェイ「あいよ。」

ユエ「『リアリィ』。」

リアリィ「はあゝい。」

ユエ「『イオキス』。」

イオキス「はい…。」

ユエ「三人とも、聞いてくれ。もうすぐ『地球』から、ある者達がここへ来る。」

フェイ「マジでか?」

ユエ「その者達の中には、サリーオもいる。」

リアリィ「サリちゃんがいるの!」

イオキス「さすがは…『万薬の師』…石化を…免れたか…。」

ユエ「そうだフェイ、ゼロもいるみたいだぞ。」

フェイ「な、何だって!アイツ…マジ俺らを裏切りやがって!いいぜえ…この俺がマジ制裁してやるぜ!」

リアリィ「やめといた方がいいんじゃないのおゝ。」

フェイ「何でだよ!」

リアリィ「だってさあ、フェイってば、一度でもゼロに勝ったことあったっけ？」

フェイ「う……うるさいっ！マジまだガチンコでは戦ってないぜ！」

リアリィ「確かにそうだけどさあ、何をするにもゼロに先を越されてたじゃんか！」

フェイ「ア、アイツはマジただの頭でつかちなだけなんだよ！」

イオキス「もうよせ…悔しいなら…戦えばいい…。どうせ…ここへ…来るんだ…。」

ユエ「……。」

リアリィ「ん…どうしたのユエ？」

ユエ「いや…三人に頼みがある。」

リアリィ「頼み？」

ユエ「恐らく彼らは『月の三爪<sup>サンソウ</sup>』に来るだろう。お前達はそれぞれの場所で待機していてくれ。」

リアリィ「待機？」

ユエ「恐らく彼らは三方に別れるだろう。」

フェイ「じゃあ、マジ来た奴を倒せばいいってのか？」

ユエ「…頼む。」

イオキス「……………」

リアリイ「ユエやユナとかは？」

ユエ「私はやらなければいけないことがある。ユナイマとユインシスも、二段階の最中だ。時間が無いからな。」

フェイ「ま、マジ安心しろよ！俺が奴らをマジ片付けてやるよ！」

イオキス「では…行こうか…。」

ユエ「三人とも、頼むな。」

リアリイ「まっかせなさい！」

フェイ「マジでボコボコにしてやらあ！」

イオキス「…。」

（三人が出て行く）

ユエ「…みんな…すまない……っ！げほっ、げほっ、げほっ……  
残された時間は…少ない…か……。早く……早く来い……デーノ……」

（天満は）

天満「確か海の中って言いましたよね？」

ジウ「ああ。」

天満「でも、今は海は渴れてますけど、大丈夫なんですか？」

ジウ「ふ…行ったら分かるぜ。」

天満「はあ…。」

サリーオ「さあ、もうすぐで着くよ！」

天満「こ、これは！」

真雪「す、凄い！」

にゆう「水に囲まれてるにゅ〜！」

アイズ「一体…。」

ジウ「ここは『天地海』の中心だ。『オルテナ』の中心とも言われているな。」

シャウト「この水に囲まれてる中にあるのか？」

ジウ「そうだ、『オルテナの箱庭』と呼ばれてる場所だ。気脈が一

番安定している場所だ。」

天満「この中に『コスミックブリッジ』が…。」

アイズの心「…だが妙だな…。何故ユエはこんなものを、まだ残しておいたんだ？…僕達に邪魔されなくなったら、再起不能になればいいものを…何故だ？」

サイガ「行くで、アイズ！」

アイズ「ふう…考えても仕方ないか…。罠ならそれ相応に対峙すればいいか…。」

ジウ「行くぞ。」

天満「……………何か『不思議な力』を感じる…。」

ジウ「ここに来るのも久しぶりだな…。」

天満「この『力』……………どこかで感じたことが…。」

ゼロ「この感じは…。」

シャウト「…………『レストピア』…。」

天満「そ、そうだよ！にゆうから感じる『力』と同じだよ！」

にゆう「にゆう？」

次回に続く

## 第十二劇『定理』

アイズ「何故にゆうの『レストピア』と同じ『力』を感じるんだ？」

ジウ「理由は簡単だ。」

サリーオ「……。」

ジウ「これを作った奴が、そのチビコロと同じ『妖精』だからだ。」

にゆう「にゅっ！にゅうはチビコロじゃないにゅー！『ポンコロ』にゅー！」

シャウト「だが、これはユエが作ったのではないのか？」

ジウ「まあ、そのへんはオレより、もっと詳しい奴がいるぜ。なあ、サリーオ？」

サリーオ「…。」

ゼロ「…ふむ。」

天満「サリーオさん？」

サリーオ「天満…。」

天満「ジウさん、どうしてサリーオさんが詳しいんですか？」

ジウ「この『オルテナの箱庭』を作ったのがサリーオだからだ。」

皆「！」

ゼロ「なるほど…。」

天満「サリーオさんが『妖精ポンコロ』！」

真雪「にゆうと同じ…。」

ジウ「『月』の抵抗力が高くないのに、石化を免れた理由は『レス  
トピア』で、『鍊』を変化させたからだ。」

天満「ほ…本当なんですか？」

サリーオ「……ああ、そうだよ。」

アイズ「しかし、サリーオはどうみてもエルフだろ？にゆうとは、  
全然違うぞ。」

サリーオ「アタシは…。」

ゼロ「…もしかして…『フュージョン』……つまり『融合』…です  
か？」

アイズ「『融合』！そうか、ユエの！」

天満「サリーオさん…。」

サリーオ「…ああ、ゼロの言う通りだ。アタシは…『ポンコロ』と

エルフの『融合体』さ。」

ゼロ「やはり…。」

ジウ「この『オルテナ』には様々な種類の生物がいる。『エルフ』、『人間』、『霊神』、『妖精』など、他にも『希種』と呼ばれる種もいる。その中でも『妖精』ってやつは、種類も豊富で、『ポンコロ』はその一つだ。」

天満「へえ〜。」

サイガ「さすがは年の功やな…。」

アイズ「この際だ、ジウに色々聞いたらどうだ、天満？」

天満「うん、そうだね。ジウさん、それで、『ポンコロ』について知ってることを教えてくださいませんか？」

ジウ「…面倒だが、まあいいか…よく聞けよ。『妖精』の中でも、数が少なく、『幻の生物』と呼ばれているのが『ポンコロ』だ。『妖精』つつうのは、『力』は弱いが、それに変わって『特別な能力』が備わっている。」

天満「そうか、『レストピア』だね！」

ジウ「『レストピア』はな、別名『聖鍊金』と呼ばれているもので、古代に失われた技術の一つなんだ。」

真雪「何か凄いなだね…。」

にゆう「にゆう！」

ジウ「『レストピア』は、大まかに分けて、二つの性能を持っている。一つは体内で『鍊』を変化させて、物質を作り出すこと。つまり『具現化能力』だ。」

シャウト「にゆうが、針を作ったり、サリーオがこの建物を作った能力だな。」

ジウ「もう一つは、『鍊』を様々な属性に変化させることだ。」

真雪「どういことですか？」

ジウ「属性つてのは、個人それぞれが持つ『潜在特性』みたいなものだ。」

天満「『潜在特性』…。」

ジウ「たとえば、オレの『星』の属性、天満の『月』といった具合に、『鍊』つてのは、そいつに合った属性が必ずある。」

ゼロ「『フォンス』で覚醒されるのが、その『潜在特性』ですね。」

アイズ「なるほどな…にゆうが石化を免れたのも、『レストピア』で『鍊』を『月』の属性にして、抵抗力を高めたからなのか…。」

ジウ「普通は、持って生まれた資質だから、変えるなんて出来ないが、『ポンコロ』にはそれができるんだ。」

ゼロ「やはり、そうだったんですね。」

天満「じゃあサリーオさんも、『鍊』を『月』の属性に？」

サリーオ「そのとおりだよ。」

真雪「にゅうも凄いよね…。」

にゅう「にゅー！にゅーは凄いにゅー！」

天満「もしかしてサリーオさん…サリーオさんがユエから離れた理由はそれなんですか？」

サリーオ「いいや…。『ボンコロ』との『融合』はアタシが望んだことだよ。…アタシはね…元はただのエルフだったんだよ。あの日…ユエと出会ったあの日に全てが変わった…。」

（サリーオの過去）

サリーオ「…………。」

？「…絶望。」

サリーオ「え…？」

？「君の目には絶望しか写っていないな。」

サリーオ「…今のアタシは機嫌が悪いんだ。ケガしたくなきゃ、とつとと去りな！」

？「私なら、君の絶望を取り除く機会を与えることができる。」

サリーオ「何を言ってる！アンタにアタシの何を救えるってんだ！」

？「君は自分の無力さに絶望している。」

サリーオ「う…。」

？「だが私なら、君に『力』を与えてあげることが出来る。」

サリーオ「『力』を…。」

？「今の自分を捨てる覚悟があればな。」

サリーオ「…何だってするさ……『あの子』を救えるなら、何にだってなってる！」

？「では来るといい。君が必要としている『力』を与えてあげよう。」

サリーオ「…でも、何でアタシに？」

？「…運命を変えたいからさ。」

サリーオ「運命？」

？「定められた運命に抗ってみたいんだ。」

サリーオ「…アタシも……『あの子』を救いたい。『あの子』が死

ぬ運命を変えたい！」

？「では行こうか。」

サリーオ「ああ……。……。アンタは一体……。」

？「私は『ユエ』……。運命を知る者さ。」

（ユエの研究所）

サリーオ「なあ、ユエって言ったな、アンタはアタシに『力』をくれると言った。本当にそんなことが出来るのか？」

ユエ「いきなりは無理だな。しばらくはココでゆっくりしててくれ。」

サリーオ「何だって！馬鹿言っんじゃないよ！アタシにはのんびりしている暇なんか無いんだよ！」

ユエ「焦っても仕方ない。それより、今自分に出来ることをしたらどうだ？」

サリーオ「く……。ユエ……。アンタ……。運命を知ってるって言ったな……。」

ユエ「ああ。」

サリーオ「アンタが知ってる運命では……。『あの子』は……。『キイル』は死ぬのかい？」

ユエ「……ああ。」

サリーオ「く……くそっ！」

ユエ「だがその運命を変える為に、ここへ来たのだろう？」

サリーオ「本当に……本当に変えることが出来るのか？」

ユエ「分からない……。だが、運命は人の手で変えられるモノである  
と、私は信じている。」

サリーオ「……分かった。アタシも信じる！『キイル』は死なない  
！必ずアタシより長生きしてもらうんだ！」

ユエ「よし、決まりだな。」

サリーオ「ところで『力』って……。」

サリーオの語り「半信半疑だったが、何故かこの男なら、アタシの  
弟を……不治の病に伏せてる弟を救ってくれるんじゃないかと……  
ふとそんな感じがした。数週間後、アタシはユエとともに、アタシ  
の弟『キイル』の病を治すために、『キイル』のもとに急いだ。」

サリーオ「……ル……イル……『キイル』！」

キイル「……あ……お姉……ちゃん……。」

サリーオ「キイル！」

キイル「お姉ちゃん！」

サリーオ「良かった……本当に……。助かったんだよ！キイル……本当に良かった！」

キイル「僕……」

サリーオ「ユエ、アンタのお陰だ！本当にありがとう！」

ユエ「私は何もしていないよ。その子を救ったのはサリーオ、君だ。」

サリーオ「ユエ……ありがとう。」

サリーオの語り「キイルは助かった。アタシが手に入れた『力』で、キイルの体内の『錬属性』に合わせて、アタシの『錬属性』を変化させて、キイルの体内に送り込み、抵抗力を高め病を治すことが出来た。それがアタシが手に入れた『力』……『レストピア』と呼ばれる、『ポンコロ』だけの、失われた技術だった……そう……『力』だ……」

サリーオ「『融合』……だと……馬鹿な！出来る訳がない！」

ユエ「……」

サリーオ「その理論はアタシも考えたことがある……。だが、拒絶反応が必ず出る！」

ユエ「それを防ぐ方法があるとすれば？」

サリーオ「何だって！本当にそんなことが出来るのか？」

ユエ「ああ…そのためにはサリーオ、君が開発した理論…『クロー  
ン理論』が必要なんだ。」

サリーオ「…。」

ユエ「どうだ？『融合』するか？弟を救うために、今の自分を捨てる覚悟があるか？」

サリーオ「今更何言ってるんだい！願ってもないことだよ！たとえそれが…自然を裏切る『禁忌』だとしても！」

ユエ「…分かった。」

サリーオ「でも一体何と『融合』するんだい？で…できればブサイクな奴とは止めてほしいんだが…。」

ユエ「アハハ、大丈夫だ。『融合』といっても、違う意識同士で行うわけじゃない。」

サリーオ「あ、そうか…普通なら二つの意識がぶつかり合って、精神崩壊を起こしてしまうよな…。だったら何と…。」

ユエ「まず『クローン』を作る、その過程で意識を殺し、ただの『力』を持つ存在を作る。」

サリーオ「はは…まさに『禁忌』だな…。」

ユエ「だったら止めるか？」

サリーオ「言っただろ？たとえそれが『禁忌』でも、それしかないなら血を吐いてでも、実行してやるさ！」

ユエ「覚悟は…あるみたいだな…よし！」

サリーオの語り「そうやって、アタシは『ポンコロ』の『クローン』を作りだした。まだ完全な『クローン』は作れなかったが、『力』だけを持つ物体としてなら、何とか作ることが出来た。そして、アタシはユエの『力』で、『ポンコロ』の『特性』と『力』を持つ物体と『融合』した。不思議な感覚だった…。確かに自分なんだが、自分ではないような…。まるで今、誕生したという感じだった。そして、アタシは新たに得た『ポンコロ』の『レストピア』でキールの病を治すことが出来た。」

サリーオ「本当に感謝してるよユエ。何か…アタシに出来ることがあったら言ってくれ。」

ユエ「そうか…なら私の研究を手伝ってくれないか？」

サリーオ「研究？」

ユエ「ああ…運命を変える研究さ…。」

サリーオ「アンタには大きな借りがある。アタシで良かったら『力』になるよ。」

ユエ「ありがとう。」

サリーオ「ところでさ…。」

ユエ「何だ？」

サリーオ「アタの…その…『黙示録』だっけ……未来が分かるって凄いやな…。」

ユエ「分かってても変えることが出来ないのなら、意味の無いモノだ…。」

サリーオ「……でもさ、それって本当はユインシスの『力』なんだろう？」

ユエ「ああ…ユインシスが感じ、ユナイマが興し、私が刻む。それが『黙示録』だからな。」

サリーオ「何か面倒な能力だな。」

ユエ「そう…だな…。」

サリーオの語り「それからアタシはユエと、その仲間とともに研究に没頭した。」

ユエ「サリーオ…。」

？「言わなくていいのか？」

ユエ「『ユインシス』…。」

ユインシス「で、どうするんだ？サリーオに真実を話さないのか？」

ユエ「…運命は…変えられないのか？」

ユインシス「ユエ…。」

ユエ「残酷な道をようやく避けられたと思ったら、また別の残酷な道が現れる。」

ユインシス「…俺達『時人』はお前に創られた。俺はその理由がやっと分かったよ。」

ユエ「ユインシス…。」

ユインシス「それは…新しい未来を…正しい未来を守るために、お前は俺達を創った。俺は…そう思う。運命は決まってる…必ず変えることができる。」

ユエ「だが、サリーオの弟は…。」

ユインシス「…『黙示録』には、キイルの死が刻まれている。確かに一度は取り除けた…だが、また死が刻まれた…。」

ユエ「やはり運命は…。」

ユインシス「…くそ…どうにかならないのか…。」

サリーオの語り「『銀河の架け橋』が完成してすぐだった。キイルが…倒れた。」

サリーオ「な…何でまた病気が…。」

キイル「お姉…ちゃん…。」

サリーオ「どういことだよ、ユエッ！」

ユエ「……キイルは……もう長くない…。」

サリーオ「う…そ…。」

次回に続く

### 第十三劇『悲運』

サリーオ「長くないって…どういふことなんだ！」

ユエ「実は…。」

（ユエは眞実を話す）

サリーオ「…何故だ…何故黙ってた…。」

ユエ「…すまない。」

サリーオ「お前はそれを知ってて、アタシを利用してたのかつ！キイルは助からないのに、自分の研究のためにアタシを…違つかつ！」

ユエ「…。」

サリーオ「何とか言えよっ！」

ユエ「すまない…。」

サリーオ「くっ、出てってくれ！」

ユエ「サリーオ…。」

サリーオ「アタシはアンタを許せない…。アンタはアタシに『力』

をくれた……そのお陰でキイルは病気を治すことが出来た……すごく感謝してる。でも……それでもアンタを許すことができないっ！」

ユエ「私は……。」

サリーオ「頼む……。」

ユエ「え？」

サリーオ「出てってくれ……。」

ユエ「サリーオ………すまない……。」

サリーオ「……運命は……アンタの『黙示録』は……越えられなかったんだな……。」

ユエ「………すまない。」

サリーオの語り「アタシは絶望した。もうアタシの『力』でも、キイルの病気を治すことが出来なかった。アタシは、もう一時もキイルの側を離れなかった。そして……それきりユエとも会わなくなった。」

キイル「お姉ちゃん……。」

サリーオ「ん？寒いかな、キイル？」

キイル「大丈夫だよ……。」

サリーオ「そうか、ならいいよ。」

キイル「……どうしたのかな？」

サリーオ「ん？何がだい？」

キイル「ユエさん……最近来ないね。」

サリーオ「……ああ……そうだな……。」

キイル「……もしかして、ケンカでもしたの？」

サリーオ「え？いいや、ただアイツは研究が忙しくて来れないだけだよ、はは！」

キイル「……ダメだよ、お姉ちゃん。」

サリーオ「え？」

キイル「ウソ……でしょ？」

サリーオ「違……。」

キイル「バレバレだよ……だってお姉ちゃん、僕にウソつく時、絶対僕と目合わないもん！」

サリーオ「あ……。」

キイル「もしかして……僕のことでもケンカしたの？」

サリーオ「違うよ！キイルは関係ない！ただ……。」

キイル「ただ？」

サリーオ「く……。」「

キイル「お姉ちゃん？」

サリーオ「キイル……。」「

キイル「どうしたの？」「

サリーオ「キイルは……。運命って…変えられると思う？」「

キイル「運命？……。どうなんだろうね……。よく分かんないや！」「

サリーオ「そうか……。そうだね……。」「

キイル「でもね。」「

サリーオ「ん？」「

キイル「僕は変えられたらいいなって思うな！」「

サリーオ「キイル……。」「

キイル「だってさ、もし神様がね、君はもうすぐ死にます！って僕に言ったとしたら、やっぱり死にたくないし、無理矢理にでも、運命変えたいと思うもん！だから必死で動くんだ！」「

サリーオ「必死で…動く…か…。」「

キイル「えへへ、もうすぐ死ぬって言われてもね……たえ死ぬ運命でもね……簡単には死んでやらないもん！僕の……この手や足、体が動かなくても、最後の最後まで、僕らしく生きてやるんだ！そして、少しでも神様の言ったことをウソにしてやるんだ！必死にさがいて、もがいて、僕はこんなにも生きてるってね！」

サリーオ「キイル！」

キイル「く、苦しいよお姉ちゃん……。」

サリーオ「キイル！」

キイル「えへへ、僕は死なないよ！だって、お姉ちゃん一人じゃ、危なっかしくて、ほっとけないんだもん！ご飯だって、ほとんど作れないしね！」

サリーオ「バカ……。」

キイル「だから少し待っててね……絶対病氣治すからさ……。」

サリーオ「うん……。」

サリーオの語り「多分キイルは、自分の病気の重さや、自分に残された時間が僅かということも知っていたんだと思う。体に走る激痛にも耐え、それでもアタシを想い、気丈にアタシを慰めてくれてさえた。慰めてあげなくてはならないのは、アタシの方だということに……。そして、アタシが食事の用意をしていた時、それは起きた。」

サリーオ「もうすぐで出来るからね！今日はねえ、アンタの好きな

『アツアツグラタン』だよ！今度こそは上手く出来たと……キイル？キイル！キイル、どこっ！キイルッ！」

サリーオの語り「アタシが目を離れた隙に、キイルがベッドから抜け出した。行き先は机の上に置いてあった紙に書かれてた。そう……『アステカの丘』に行く……」

サリーオ「バカキイル！何であんな所に！まだ体が治ってないのにっ！」

サリーオの語り「嫌な予感がした。アタシは必死で追い掛けた……キイルの無事だけを祈って……。だけど……不安は的中した。キイルが……丘の上で倒れていた。」

サリーオ「キイルッ！」

キイル「お……姉……ちゃん……」

サリーオ「バカッ！何でこんな無茶をするんだ！」

キイル「えへへ……ほら……」

サリーオ「これは……『虹色蝶』？キイル……お前……」

キイル「前に……話してくれたよね……。この『虹色蝶』は……願いを運んでくれるって……。だから……」

サリーオ「バカッ！それならアタシが捕ってきてあげたのに！バカキイル！」

キイル「ち…違っんだ…。これは…お姉ちゃんに…あげるために…だよ…。」

サリーオ「アタシに？な、何で…？」

キイル「…お誕生日…おめでとう…お姉ちゃん…。」

サリーオ「え？」

キイル「えへへ…忘れてたでしょ？」

サリーオ「キイル…何さ…こんな無茶して…。アタシは…アンタに何もしてあげられてないのに…。」

キイル「そんなこと…げほっ、げほっ、げほっ！」

サリーオ「キイルッ！早く帰ろう！」

キイル「お姉ちゃん…。」

サリーオの心「くそっ！どうすれば…はっ！そうだ、ユエ！…アイツなら…何かキイルを治す方法を知ってるかもしれない！…勝手な奴と思われるだろうが…キイルを救うためなら！」

キイル「お姉ちゃん…。」

サリーオ「キイル！大丈夫か？」

キイル「…『虹色蝶』は願いを…運んでくれる…。きっとね…お姉ちゃんの願いも…運んで…くれるよ…。」

サリーオ「いいからもう喋るな！」

キイル「……きつと運命…変えられるよ…。『虹色蝶』が……お姉ちゃんの願いを…。」

サリーオ「キイル！」

キイル「誕生日……おめでとう……お姉ちゃん……大好き……。」

サリーオ「キイルッ！」

キイル「えへへ……何か…疲れた……。」

サリーオ「大丈夫だ！お姉ちゃんが助けてやるから！それにアンタの好きな『アツアツグラタン』を作ったんだからね！しっかり食べてもらわなきゃ！」

キイル「美味しいのかなそれ…へへ…。僕…必死で動けた…かな…？」

サリーオ「キイル…お前…。」

キイル「必死で…あげた…よね…。」

サリーオ「お前は強いよ…。」

キイル「…少し…休む…ね…。」

サリーオ「ああ、そうしな！もうすぐで家だからね！」

キイル「……………今までありがとう……………」

サリーオ「え？キ…キイル……………」

キイル「……………」

サリーオ「そんな……………こらっ！アタシは……………くそっ！目開けるっ！開けるって！なあ……………開ける……………開けて……………お願い……………だよ……………キイル……………」  
……………これが運命か……………何が『虹色蝶』だよ……………アタシの願いなんて……………キイルは……………ちくしょおおー……………つつっ！」

（現代へ）

天満「そんなことがあったんですか……………」

サリーオ「だからアタシは運命を恨んだ。そして、運命は絶対的で、どうしても変えることが出来ないものなんだと、心底思わされたよ。ユエのことも、行いも……………無意味に思えてね……………。度々アタシを誘いに来るんだけどね……………もう信じることなんて出来なかったから……………」

天満「そうか……………刺客っていうのは……………」

サリーオ「そう、ユエがアタシに向けた奴らのことだ……………」

天満「やっぱり……………」

ゼロ「ふむ……………ですが今は僕達とともに行動しています。確か言って

ましたよね？もう一度運命を変えられることを信じてみるって…。  
どうしてですか？」

サリーオ「…。」

天満「サリーオさん？」

サリーオ「天満…ふ…。さあね…そんな理由…とづくに忘れたよ…。  
でもまあ、天満…アンタのせいかも…ね？」

天満「え？」

ジウ「ふ…。」

サリーオの心「アンタが無理矢理アタシを引っ張り出したんだよ。  
そう、あの子と…キイルと同じ目で、同じことを言うアンタがアタシを…。」

天満「…。」

アイズ「だがサリーオ、アンタは『アストラル号』を進化させてた。  
運命を変えられないって信じてたアンタが、何故そんなことを？」

サリーオ「そうだね…何故だろうね…。」

サイガ「確かに不思議だな。」

サリーオの心「もしかしたら、まだ心の底では信じてたのかもね。  
あの子の…キイルの言ったことを…無意識に体が動いてたのかも…。」

アイズ「何故って、分からないのか？」

サリーオ「ふ…そうだな、キイルの奴が、アタシを動かしていたんじゃないか。」

真雪「サリーオさん…そうですね。きっとそうですよ！」

シャウト「何はともあれ、こうして次に進めるんだ！」

天満「うん！」

サリーオ「よし！ついておいで！『月』への道へ案内してやるよ！」

天満「はい！必死で動きましょう！」

サリーオの心「…キイル…お前なんだろう…天満とアタシを引き合わせたのは…。お前の意思を継ぐこの子…いや、この子達となら…出来るかもしれないよ。必死であがいて、もがいて、運命を変えられることが…。」

シャウト「……ここは？」

アイズ「この機械は？」

ゼロ「もしかしてこれが…。」

サリーオ「そう、これが『銀河の架け橋』「スミックブリッジ」の発生装置だ。」

天満「これが！」

にゆう「サリーオ凄いにゆう！これ作ったにゆう！天才にゆう！にゆうには無理にゆう！………がつくしにゆう。」

シャウト「……しかし動くのか？」

サリーオ「今のアタシは動かせないな。これを作動させるには『鍊』が必要なんだよ。」

アイズ「な、じゃあどうするんだ？」

サイガ「ちゅうかアンタが作ったんちゃうんか？」

サリーオ「落ち着け。ここにいるだろ？唯一『鍊』を吸い取られていなくて、『鍊』を自由自在に扱えるデタラメな奴が。」

天満「それって……。」

サリーオ「なあ、ジウ。」

アイズ「そうか、だから連れてきたんだな！」

サイガ「……ん？ちよい待ってや。何でジウは動けんねや？」

ゼロ「そうですね、霊神であるジウさんが石化を免れた理由……それはもしかしたら……。」

サリーオ「さすがゼロだね。アタシもそう思う。『星の纏い』だろ、ジウ？」

ジウ「違うな。」

サリーオ「え！」

ゼロ「…。」

ジウ「別に『星の纏い』なんて関係無いぜ。」

サリーオ「…じゃあ…。」

ジウ「簡単だぜ。オレが無敵だからだ。」

皆「…。」

ジウ「ふ…オレを誰だと思ってやがる。ジウ・ワイコーカだぜ。」

天満「…えと…それで理由は？」

ジウ「あん？だから言ってるだろ。オレが無敵だからだ。」

天満「…。」

サリーオ「はあ…無駄だよ天満、奴はこういう奴だから。」

天満「はあ…。」

ゼロの心「おそらくは、ジウさんの『鍊』が膨大過ぎて、吸収しきれないのかもしれない…何て霊神なんだ…。」

サリーオ「ま、ともかく頼むよジウ。コイツを発動させてくれ。」

ジウ「そのために来たからな…ではやるか。」

サリーオ「ああ、ここに『鍊』を注いでくれ。」

ジウ「……………っ！」

天満「『光』が！」

真雪「上に昇っていく！」

サリーオ「さあ、この中に入りな！」

ゼロ「いよいよですね。」

シャウト「ああ。」

アイズ「よし！」

サイガ「うつしやつ！」

にゆう「頑張るにゆ〜！」

ジウ「さて…。」

サリーオ「ユエ…。」

真雪「天くん。」

天満「ああ、行こう！『月』へ！」

次回に続く

#### 第十四劇『月中』

天満「……………っ！……………ここは？」

サリーオ「着いたよ。」

天満「じゃあここが？」

サリーオ「ああ、『月』だ。」

アイズ「こんな短時間で…。」

サイガ「ああっ！」

アイズ「どうした！」

サイガ「息は出来るんか？もしかしたら……………あ……………あかん……………死ぬ……………」

天満「アハハ、大丈夫だよサイガ。」

シャウト「話せてるってことは、しっかり空気があるってことだろ？」

サイガ「え…そうなん？」

アイズ「…は…恥ずかしい…。」

サイガ「いやあ、アハハ！スマンスマン！」

ゼロ「ところでサリーオさん、ユエさんの所へはどのようにして行くんですか？」

サリーオ「ああ、ここを出たら、『月の三爪』って場所がある。その先に、ユエの本拠地がある。まあ、研究所だな。」

ジウ「素直に行かせてくれればいいがな。奴のことだ、また何かを企ててやがるに違いなからな。」

サリーオ「ああ、心してかかるんだ。」

（天満達は『月の三爪』へ向かう）

天満「へえ、『月』ってこんななんだ。そうだ…ディークが作った『月』なんだよな…。」

真雪「うん、凄く神秘的…。でも、何だか寂しい感じがするわ…。」

天満「…上は星一杯で凄く綺麗なんだけどなあ。ここには、何も無いもんな…。」

サリーオ「…着いたよ。ここが『月の三爪』の入口だよ。」

アイズ「入口が三つあるぞ。」

サイガ「まさか一つだけ正解で、間違ったら永久に出られへん迷路に迷い込むとかちゃうやろな。」

真雪「嫌なこと言わないで下さいよ!」

サリーオの心「いや…ユエのことだ、おそらくは三つとも行くように…アタシ達がバラバラになるよう仕向けてるだろうね。そしてその先には…。」

シャウト「とりあえずどちらに行くか決める前に、ここに来たことがあるサリーオに聞いてみたらどうだ?」

天満「そうだね、サイガじゃないけど、俺達には迷ってる時間なんてないしね。」

真雪「うん!」

サリーオ「さて…。」

天満「サリーオさん、どこが正解なんですか?」

サリーオ「…。」

天満「サリーオさん?」

サリーオ「ん?ああ…この『月の三爪』はね、入る度に姿を変えるんだよ。」

アイズ「どういうことだ?」

サリーオ「正解の道なんて分からないさ。入る度に変わるんだからね。まあ、正解の道なんて、ユエしか分からないだろうね。」

ゼロ「なるほど、ということは、三つの道全てに行かなければならないというわけですか。ですが一つ一つ、全員で行ってる時間があるかどうか…。」

サリーオ「……天満。」

天満「はい？」

サリーオ「アンタが決めな。全員で行くか、それとも三方向に分かれて行くか…。」

天満「俺が！でも…。」

真雪「いいじゃない天くん！決めて！」

天満「…いいのか、みんな？」

アイズ「ネオスの城に攻める時もお前が決めたんだ。僕はお前の判断に従う。」

サイガ「ワイもや！」

シャウト「うむ。」

ゼロ「任せましたよ。」

にゅう「天満はリーダーにゆ〜！」

ジウ「ふ…。」

天満「みんな…分かった。それじゃ……三方向に分かれよう！俺達には時間が無いしな！それに…たとえバラバラになっても、俺は皆を信じてるから！」

アイズ「天満。」

真雪「うん！」

天満「それじゃ、アイズとサイガとサリーオさんは左の道、シャウトとゼロは右の道、俺と真雪とにゆうとジウさんは真ん中に！」

ジウ「成程な。」

ゼロ「『フォンス』を覚醒させ、『エリア』を使いこなせる者をそれぞれに分けた。」

アイズ「よし！」

サイガ「行くで！」

サリーオ「待ってなよ、ユエ！」

にゆう「気合いにゆう！」

真雪「天くん！」

天満「ああ！じゃあ皆、気を付けて！ユエの所で会おう！」

皆「おうっ！」

（アイズ達）

アイズ「ところでサリーオ、アンタはユエと戦うのか？」

サリーオ「…。」

アイズ「アンタがユエと戦う理由なんて無いんじゃないのか？」

サイガ「サリーオ…。」

サリーオ「…戦う理由ならあるさ。」

アイズ「…。」

サリーオ「アンタ達が気に入った。それじゃ、ダメかい？」

アイズ「…いいのか？そんな理由で…。」

サリーオ「ふふ、それにユエには借りがあるからね。それを返さなきゃ、アタシの気がすまないよ。」

アイズ「覚悟はあるんだな？」

サリーオ「何だい？生意気だね。アタシより遥かに年下のガキのくせに。」

アイズ「む…。」

サイガ「アハハ！まあ、ホンマにまだまだガキやからな、アイズは！」

アイズ「年齢なんか関係ないだろ！大体年齢なんてのは不確定なものだ！実際に評価されるべきは…！」

サイガ「はいはい、そやってムキになるとこがガキなんやで？」

アイズ「……知らん！」

サリーオ「…ふふ。」

サイガ「ん？どないしたん？」

サリーオ「いやいや、アンタ達は何の為に戦うのかと思ってな。」

サイガ「戦う理由か？せやな…。」

サリーオ「アイズは？」

アイズ「…昔は……仇を討つ為だった。」

サリーオ「仇？」

サイガ「アイズ…。」

アイズ「だけど今は……生きたいからさ。」

サイガ「…。」

アイズ「僕の体の為に必死で戦ってくれる奴がいる。そいつの想いに答えるためにも、そして…自分のためにも生きたいから戦うんだ。」

サイガ「へへ…。」

サリーオ「さっき言ったこと、取り消すよ。」

アイズ「え？」

サリーオ「アンタは生意気だが、ただのガキじゃないよ、大したガキだよ。」

アイズ「な、結局ガキじゃないか！」

サリーオ「ハハ！そうだったね！」

サイガの心「せや…アイズはホンマに大した奴なんや…。」

サリーオ「そういや、サイガはどうなんだい？」

サイガ「ワイか？ワイは…。」

アイズ「…。」

サイガ「…死なせたない奴がおるからや…。」

サリーオ「なるほどね…。ふ…ますます気に入ったよ！さあ、もうすぐで着くはずだ！」

アイズ「…ん？……ここがそうか？行き止まりだぞ？」

サイガ「ハズレっちゅうことかいな。」

サリーオ「いや…どの道もハズレじゃないさ。」

アイズ「一体どういうこと…。」

？「パンパカパーン！三名様ご到着〜！」

サイガ「何や？」

サリーオ「この声は…。」

？「ああ！サリちゃんじゃん！やつほー、サリちゃん！元気してたあ！」

サリーオ「…はあ。」

アイズ「知ってるのか、サリーオ？」

サリーオ「また煩い奴に出迎えられたもんだねえ。…アタシにとつてはハズレだねこりゃ…。」

？「アレアレ？むゝ聞こえてないのかなあ…よし！」

アイズ「何！消えた！」

サイガ「後ろや！」

？「お久しぶりぶりだね、サリちゃん！」

サリーオ「アンタも相変わらずのようだね、『リアリイ』？」

リアリイ「まっかせてよお！元気元気のリアリイちゃんだよ！」

アイズ「あの一瞬で僕の後ろにいたサリーオの目の前に…。」

サイガ「サリーオの後ろにいたワイでも、見えへんかったで…。」

リアリイ「ほえ〜。」

アイズ「な、何だ！」

アイズの心「また一瞬で僕の目の前に…。」

リアリイ「キレイな顔してるんだね！ちょっとタイプかも！」

アイズ「は？」

リアリイ「何歳？」

アイズ「答える義務はない！」

サイガ「十五歳やで。」

アイズ「答えるなっ！」

リアリイ「そっか…リアリイより五個も年下なんだあ。」

アイズ「はあ？」

サイガ「ちゅうことは…二十歳！」

アイズ「嘘だ！」

サイガの心「あの姿で二十歳……どう見たって十歳くらいやで…。」

リアリイ「こう見えてもリアリイは大人なんだよお！胸だって少しはおつきくなつたし！サリちゃんのメロンには負けるけどね。でもね、リアリイだっていつかはムチュムプリンになる日が来るはずなんだよね！そのために毎日毎日、女を磨いて努力してるんだよお！キャハ！」

アイズ「一体何なんだコイツ…。」

サイガ「よう喋るやつचना…。」

サリーオ「はあ…やっぱハズレだわ…。」

リアリイ「ところでサリちゃん！」

サリーオ「ん？」

リアリイ「何しに来たの？」

サリーオ「……ユエに会いに来た。」

リアリイ「ふう〜ん…何で？」

サリーオ「奴のしてることを止めるためだよ！」

リアリイ「…そっか……じゃあ……敵ってことだね！」

アイズ「ぐっ！何だコイツいきなり！雰囲気が変わったぞ！」

サイガ「空気が痛い！」

サリーオ「当たり前だよ。」

アイズ「え？」

サリーオ「リアリイは『叢雲』の一人なんだ。最高レベルの『エリア使い』さ。」

サイガ「せやったな…戦闘モードはケタがちゃうってことやな！」

リアリイ「サリちゃんには悪いけど、ユエの邪魔はさせないよ。」

サリーオ「来るよ！」

リアリイ「『叢雲』が一人、『木』のリアリイ、行つくよお！」

（その頃『オルテナ』では）

？「今の『光』は何だったんだろ？『月』に向かって伸びていったけど…。はあ…これからどうすればいいんだ？先生達は石になっち

やつし、変な所には来るし……。何であんなことに……。『おじさん』……。」

（皆が石化になる前、『地球』では）

？「『北川先生』、この本はどこに運ぶんですか？」

北川「その本は園長室にお願いするわ。」

？「おじ……いや、園長室ですね。」

北川「お願いね。」

？「はい。……失礼します。あ、『おじさん』！」

おじさん「ん？何だ『聖地<sup>セイジ</sup>』か、どうした？」

聖地「この本、届けて欲しいって北川先生が。」

おじさん「おお、そうか。ありがとう聖地。」

聖地「何の本なんですか？……『記憶と体』……『脳の役割』……」  
れって……。」

おじさん「……勝手なことをしてすまないな。」

聖地「勝手なことなんて！」

おじさん「まだ記憶が戻らないんだろう？」

聖地「…はい。」

おじさん「私はな聖地…記憶というのは素晴らしいものだと思っておる。言い換えれば思い出だからな。私は思い出が人をつくり、人が思い出をつくると思っておる。だが今のお前はそれを忘れている。自分をつくりあげてきたものを覚えていないのはな、苦しいものだ…悲しいものだ。」

聖地「おじさん…。」

おじさん「だから私は取り戻させてやりたい。聖地という人間をつくった、素晴らしいものをな。」

聖地「…おじさんには、いつも感謝しています。一年前…僕を引き取って頂いた時からずっとです…。何も覚えていない僕に…この『ひいらぎ幼稚園』の前で倒れていた僕に…優しく微笑んで、抱きしめてくれました。とても嬉しかった…。」

おじさん「聖地…。」

聖地「確かに記憶が無いのは寂しいです。でも、僕にはおじさんや先生達、ここに通ってる子供達がいてくれます。それが今の僕の…全てです！」

おじさん「聖地…。」

聖地「だから、これからよろしくお願いします！」

おじさん「…何を言う…当然だ。お前はもう、私の家族なんだから。」

聖地「おじさん…。」

おじさん「……ん？外が騒がしいな。」

聖地「そうですね…。僕ちよつと見てきます！………何だ？暗い……太陽が欠けていく！」

北川「きゃあああつ！」

聖地「北川先生っ！はっ！子供達が！」

子供達「お母さ〜ん！うわ〜ん！」

聖地「何だ…みんなっ！」

子供「聖…地…お兄…ちゃ……ん…。」

北川「聖地…く…ん…。」

聖地「北川先生っ！みんなっ！何だよこれ………みんなが石に……おじさんっ！………はあはあはあ…おじさんっ！」

おじさん「聖地…逃げ……。」

聖地「何なんだよ………何なんだよおおーっ！っ！」

次回に続く

## 第十五劇『懷友』

聖地「何で皆が……くそっ！誰かつ、ねえ、誰かいませんかっ！返事して下さいっ！無事な人はいないんですかっ！……はあはあはあ……駄目だ……。幼稚園だけじゃなく、街中の人全てが石に……。おじさん……僕どうしたらいいのかな……。一人は嫌だよ……。おじさん……」

？「こつちだよ……。」

聖地「え？だ、誰？誰かいるの？」

？「こつちだよ……。」

聖地「こつちって……右の方から声が聞こえる……よし！」

？「そっだよ……こつちだよ……。」

聖地「この声……どこかで聞いたことが……。何でだろう……声だけじゃない。僕は……知ってる……この人を……。」

？「さあ……。」

聖地「ここは……何だろ……穴？何でこんな所に？」

？「こつちだよ……。」

聖地「この穴の中から聞こえる……。もしかして僕のことを知ってる人なのかな？……よし！」

（聖地は穴に入る）

聖地「…っ！………ここは？…どこなんだ？…ぐっ！頭が！うつつ！何だ……僕は…ここを知ってる…。オ…ルテ…ナ……そうだ、『オルテナ』だ…。……行かなきゃ……あそこに…。」

（聖地は何かに導かれているかのように歩く）

聖地「……行かなきゃ……行かなきゃ………はっ！『光』が…『光』が上に…。何だろあれ？ぐっ……頭が……そうだ…城に…『黒皇城』に…。僕を…呼んでる…。」

（聖地は、かつて天満とネオスが戦いを繰り広げた地へ、今では廃墟と化した『黒皇城』に向かった）

聖地「今の『光』は何だったんだろ？『月』に向かって伸びていったけど…。はあ……これからどうすればいいんだ？先生達は石になっちゃうし、変な所には来るし…。何であんなことに……『おじさん』…。……とにかく今は『黒皇城』に行かなきゃ…。」

（聖地が『黒皇城』に到着）

聖地「…ここだ。」

？「待ってたよ…。」

聖地「あの声だ！この城の中か…。」

聖地の語り「不思議な感覚だった。初めて来たはずの『オルテナ』と呼ばれる場所。そして、この城の名前が『黒皇城』だということも、一步も迷わずに城を歩けたことも、全てが不思議だった。まるで、僕自身がこの城に住んでいたかのように、城の何処に、何があるのか、全て把握していた。」

聖地「…ここだ。ぐっ…戦い…この奥で戦いが…あった…。そうだ…ちょうど一年前に…一年前！僕がおじさんに拾われた時だ！記憶が無いのも…一年前以降…。」

聖地の語り「薄々は気付いていた。僕はここ『オルテナ』で、この『黒皇城』で、何かをしていた。とても大変なことを…。それが…許されない大罪だという感じが、僕を支配していた。僕は怖くなった。この奥には間違いなく、僕の真実があることが分かった。全身が震えだし、涙まで流れてきた。」

聖地「何で涙なんて…いや…分かっているはずなんだ…。僕は…この世界の住人なんだ！」

（聖地は奥へと進む）

聖地「体が震える…。涙が止まらない…」

？「泣いているのかい？」

聖地「！」

？「そうか……。良かった。君には僕が失ったはずの、優しい心があるんだね。」

聖地「…僕と…同じ顔…。」

？「やっと会えたね。」

聖地「君が僕を呼んだの？」

？「そうだよ。」

聖地「だったら教えてほしんだ！何故僕を呼んだのか！いや、僕は一体何者なのか！」

？「もう理解しているはずだよ。」

聖地「え？」

？「静かに…目を閉じ…感じてごらん。怖がらず、ありのままの自分を求めるんだよ。」

聖地「ありのままの自分……。君は一体…。」

？「僕は君自身であり、君は僕自身だよ。答えは既に君の中にある。」

さあ、感じてごらん……君の中の真実を……。」

聖地「……僕の中の真実……ぐっ……頭に何かが！」

（聖地に記憶が蘇ってくる）

聖地「ぐわあああっ！はあはあはあ……。」

？「……。」

聖地「はあはあはあ……。」

？「思い出したかい？」

聖地「……僕は……君の……。」

（その頃剣斗は）

剣斗「なあトト、『力』って何だ？」

トト「『エリア』と呼ばれる、自らの意思で『錬術』を使うための『力』ですよ！」

琴花「私達霊神じゃないのに、そんなこと出来るわけ？」

トト「コレをつけて下さいですよ！」

剣斗「何だ？このビー玉みたいなヤツは…。」

トト「コレをつけると、自らを『靈神化』することができ、『錬術』を扱うことが出来ますですよ！」

琴花「へえ、便利なもんがあるじゃない！」

剣斗「『法術』も使えるのか？」

トト「もちろんですよ！剣斗達を連れて来たのは、『法術』を使えるからですの！そうじゃなかったら、『エリア』の強さに体がついていかず、逆に『エリア』に体をやられてしまうですよ！」

剣斗「そっか……あゝあ、その点エルフはいいよなあ。持って生まれた身体能力で十分なんだもんなあ。」

トト「そつでもないですよ！」

剣斗「え？どういうことだ？」

トト「『エリア』は『錬術』の何倍も強力ですよ！ですから自然と使える者は限られてくるですよ！」

琴花「私達大丈夫かな？」

トト「『エリア』は自らの意思を『力』に変えるモノですよ！思いが『力』を生み、思いが『力』を強くするですよ！」

剣斗「なるほどな。」

琴花「『地球』を救いたって想いだけは負けないもんね！」

トト「…ご主人様が言っていましたの。」

剣斗「クロノが？」

トト「あの者達なら、必ずエリアを使いこなせる。あの者達の瞳に宿る強い意思の力なら必ず…」と言ってたですの！」

剣斗「へへ、分かってんじゃない！」

琴花「ホントホント！」

トト「じゃあコレを手の甲に押し当てて下さいですの！」

剣斗「分かった！…で、コレってどういう仕組みなんだ？」

トト「さっきも言ったとおり、『エリア』を生み出す要、『フォンス』ですの！この『フォンス』が、装備者の想いを『力』にするですの！…」

琴花「ふう〜ん、コレをつければいいんだね？よし！」

剣斗「…うわっ！めり込んだぜ！」

琴花「痛くはないな…：良かった。」

トト「これで『エリア』を使う準備が整ったですの！」

剣斗「よっしゃっ！じゃあさっそく！」

トト「休憩にしますですよ！」

剣斗「でえっ！」

琴花「…何で？」

トト「気付いてないかもしれないですけど、今剣斗達の体は凄く不安定ですよ！」

剣斗「不安定？」

トト「そうですよ！ですから休養を取り、『フォンス』を体に馴染ませることが必要ですよ！無理矢理使おうとすると、体が壊れますですよ！」

剣斗「そっか…。」

琴花「仕方ないね。」

トト「今日一日十分に休養を取って、『エリア』の修行は明後日から行いますですよ！」

剣斗「明日じゃダメなのか？」

トト「ちょっと事情がありますですよ！ですから、少し待って下さいですよ！」

剣斗「…分かった。」

トト「良かったら、この『アリスシティ』を観光するですよ！珍しいモノもたくさんありますですよ！」

剣斗「ああ、そうさせてもらっぜ。」

琴花「未来の国、タップリ堪能させてもらっよ！」

トト「案内はボクがさせてもらいますですよ！」

剣斗「頼むぜトト！」

（明日になる）

剣斗「さて、どこ案内してくれんだ？」

トト「まずは、ボク達『時人形』が暮らしている家に案内しますですよ！」

琴花「家って…一つの家に住んでんの？」

トト「そうですよ！」

剣斗「でも『時人形』って、かなりいるんじゃないか？よく一つの家で足りるよなあ。」

トト「大丈夫ですよ！おっきい一軒家ですよ！」

（トト達の家に着く）

剣斗「……。」

琴花「……。」

トト「ね、おっきいのですの!」

剣斗「…おい。」

トト「何のですの?」

剣斗「お前さっき何だった?」

トト「?」

剣斗「おっきいの後だよ後!」

トト「のですの!おっきいー軒家ですの!」

剣斗「ちょっと待ってくれな?」

トト「…はい…のですの…。」

剣斗「なあ、琴花?俺の常識合ってるよな?」

琴花「まあ…今思ってることは同じだよ…。」

剣斗「そうか、良かった。では遠慮なく……すう……どこが  
一軒家だああー……っつっ！」

トト「ですの……！」

剣斗「はあはあ……。」

琴花「よく言った剣斗！」

トト「どうしたんですの！」

剣斗「あんなトト……コレは一軒家じゃないぞ。」

トト「？」

剣斗「コレはな宮殿ていうんだよ。」

トト「ですの！そんなんですの？」

琴花「まあ、住んでるんだから家には違いなんでしょうけどさ、  
軒家……ではなくれないよね……。」

トト「宮殿……何か響きがカッコイイですの！これからそう呼ぶで  
すの！ありがとうございます！」

剣斗「はは……喜んでもらって良かったよ……。しかし、それにしても  
でええよなあ……。俺ん家の何倍だコレ……。」

琴花「掃除とか大変だろうけどね……。」

？「トト？」

トト「あ、ご主人様！」

剣斗「『クロノ』！」

クロノ「ここで何してるんです？」

剣斗「トトに『アリスシティ』を案内してもらってたよ。」

クロノ「そうでしたか。ちょうど良かった。」

琴花「何かあった？」

クロノ「ふふ…。」

？「やつほー！久しぶりだね、剣斗、琴花！」

二人「『ミリア』！」

ミリア「えへへ！」

剣斗「どうしたんだよミリア！無事だったのか？」

琴花「ホントに良かったあ！」

ミリア「実はね…アタシも石化してたんだけどね、クロノが助けてくれたんだよ！」

琴花「そっか！新たな戦力って！」

クロノ「はい。『エリア』を使える者、戦える者は、一人でも多くいた方がいいですからね。」

剣斗「それにしても久しぶりだなあ。でも…お前一年前と全然変わってねえのな…。」

ミリア「ほつといて！」

琴花「アハハ！でも良かった！また会えて！」

ミリア「うん！」

クロノ「さてと、皆さん、立ち話もなんですし、トト達の家で茶菓子でも頂きながら、話しましょう。あまゝいの出しますよ。」

琴花とミリア「賛成！」

剣斗「はは…。」

（家に入る）

？「おかえりなさいですわ、トト！」

トト「ネム！ただいまですの！」

ネム「この方達は？…あら、クロノ様！お久しぶりですわ！」

クロノ「うん、久しぶりだね、ネム。」

ネム「ところでクロノ様、この方達は？」

クロノ「ボクの友達だよ。大広間に通してあげて。」

ネム「まあ！クロノ様のお友達ですのね！分かりましたわ！どうぞ皆さん、こちらへ。」

剣斗「へえ、やっぱクロノって偉いんだな。」

クロノ「そうでもないですよ。」

？「勝負だ、クロノ！」

クロノ「やはり来ましたか…。」

？「ここで会ったが百年目！今日こそはオイラと勝負だ！」

剣斗「何だ？」

ネム「コラア！お止めなさい『ヨキ』！」

ヨキ「ゲッ！ネムッ！」

ネム「全く…毎度毎度クロノ様につつかかって！立場をわきまえない！」

ヨキ「う、うるせえ！オイラは…オイラはクロノに勝つんだ！」

クロノ「ふう…。」

ミリア「あんな『時人形』もいるんだ…。」

琴花「クロノ、どういうこと?。」

クロノ「いや…それが…。」

?「クロノ様…。」

クロノ「ん…『ヒナ』!。」

ヒナ「お会いしたかったです…クロノ様。」

クロノ「体は大丈夫なのかい?。」

ヒナ「はい、今日はとても調子がいいんです。きっと……クロノ様が来て下さったからです。」

クロノ「ヒナ…。」

ヨキ「こ、こここらあっ!ヒ、ヒナから離れやがれ!。」

ヒナ「ヨキくん…。」

ヨキ「ダメだつてヒナ!そんな性悪と一緒にいちゃ!。」

ヒナ「ヒナ、クロノ様を悪く言う人、大嫌い…。」

ヨキ「なっ!だ…大嫌い…。」

琴花「はは〜ん、なるほどねえ〜。」

ミリア「クロノも隅に置けないよねえ〜。」

ヨキ「ヒナア…。」

次回に続く

## 第十六劇『危競』

ミリア「モテモテだよねえ！」

剣斗「何だ何だ？どゆこと？」

琴花「あの子、ヨキっていったっけ、あの子、ヒナって子のが好きなんだよ！まあ…だけど、ヒナって子はクロノが好きみたい。んゝ面白いな！」

剣斗「そ、そうなのか？」

ヨキ「ヒナ！オイラはヒナのことを思っ言ってんだよ！」

ネム「いい加減になさい！ヨキ、クロノ様はワタクシ達の長ですよ！」

ヨキ「うるせえ！オイラは認めてねえ！」

ネム「まだそんなことを！」

クロノ「ネム。」

ネム「クロノ様…。」

クロノ「ヨキ。」

ヨキ「な、何だよ？」

クロノ「君がボクを毛嫌いしているのは分かっている。」

ネム「クロノ…！」

トト「しつ、ですの。」

ネム「トト！」

トト「ご主人様に任せておけば、大丈夫ですの。」

ネム「…。」

クロノ「ヨキ、ボクと勝負しよう！」

ヨキ「え？」

クロノ「君が勝ったら、ボクは二度とここへは来ない。」

ヒナ「そんな…。」

ネム「トト！」

トト「大丈夫ですの。」

ヨキ「な…何考えてやがる！」

クロノ「もちろん、君にもそれ相応のリスクは負ってもらっけどね。」

ヨキ「…な…何だ？」

クロノ「ボクが勝つたら、君は元の人形に戻ってもらふ。そして二度と、今のように動いたり出来ない。」

ヨキ「な！」

ヒナ「クロノ様…。」

剣斗「何かすげえことになってきたな…。」

琴花「まあ、私達が口出すことじゃなさそうだし、クロノにも考えがあるみたいだし…。」

ミリア「そうだね！何かワクワクしてきたよ！」

剣斗「ワクワクって…。」

クロノ「どうだヨキ！条件を飲むか？」

ヨキ「く……最初に勝負を挑んだのはオイラだ！引き下がるかよ！受けてやるよ！」

クロノ「よし！ついて来なさい！」

ヨキ「命令すんな！」

トト「さあ、行くですよ！」

ネム「ちょっと、本当に大丈夫ですよ？」

ヒナ「どうしてこんなことに…。クロノ様…ヨキくん…。」

クロノ「さて…。」

ヨキ「勝負の方法は？」

クロノ「『デッド・オア・アライブレース』だ。」

ヨキ「…なるほどな。」

ネム「駄目ですわ！危険ですわよ！」

剣斗「何だ何だ？どんな勝負なんだ？」

トト「『デッド・オア・アライブレース』…その名の通り、生きるか死ぬかのレースですの！内容はここから、あの『針の塔』と呼ばれる岩山の頂上にある『羅針盤』に、先に触れた者が勝者ですの！」

剣斗「それで何で生きるか死ぬかなんだ？」

ネム「噂では、このレースは、勝った者の『究極の負の望み』を『羅針盤』が叶えてしまうらしいのですわ。」

ミリア「『究極の負の望み』？」

ネム「そうですね。誰だって、何かを争う時には、必ず相手がいなくなればと考えてしまう時があるはずですわ。『羅針盤』は、そんな負の想いを叶えてしまうらしいのですわ。」

剣斗「あつぶねえレースだなあ！」

ネム「だから言ったのですわ！クロノ様は何故このような危険な勝負方法をお選びなされたのでしょうか？」

琴花「負けたら死ぬってことは、クロノがさっき言った通りになるね。」

ミリア「そうだね…クロノが負けたら、ここへ来れなくなる。まあ、死ぬんだからね。そして、ヨキが負けたら、ただの人形に戻る。つまり、死ぬってことだね。」

ネム「本当に大丈夫ですよ、トト！」

トト「ご主人様は、考え無しに何かをする人じゃないですよ！きっと、ご主人様のこと、何かありますですよ！」

クロノ「さあ、やるよ！」

ヨキ「おう！」

ヒナ「止めて下さい！」

ヨキ「ヒナ…。」

クロノ「…。」

ヒナ「お願い…ヒナのためなら、もう止めて下さい…。」

クロノ「…どうするんだい、ヨキ？」

ヨキ「…。」

ヒナ「ヨキくん…。」

ヨキ「悪いなあヒナ。」

ヒナ「え？」

ヨキ「いくらヒナの頼みでも、こればかりは聞けねえ！」

ヒナ「どうして…？」

ヨキ「男が一度受けた勝負なんだ！背を向けるこたあ出来ねえ！ヒナのためにも、オイラは必ず勝つ！」

ヒナ「そんな……クロノ様！」

クロノ「彼が諦めないなら、勝負を止める理由は無いね。」

ヒナ「クロノ様…。」

クロノ「大丈夫だよ。（ボソ）」

ヒナ「え？」

クロノ「大丈夫だから、安心して見てて。（ボソ）」

ヒナ「クロノ様…。」

ヨキ「こらあっ！ヒナにくつつくなっ！」

クロノ「分かったよ。さあトト、始めの合図を頼むよ!」

トト「ですよ!」

剣斗「どっちが勝つんだろうな?」

琴花「やっぱクロノじゃないの?」

ミリア「そうだよねえ。クロノって絶対強いもんね。ヨキって子は弱そうじゃないけど、やっぱりクロノには負けんじゃないかな?クロノの方が偉いみたいだし...」

ヒナ「そんなことないです!」

ミリア「え?」

ヒナ「ヨキくんが一生懸命努力していること、ヒナ知ってます!弱くなんてないです!そんなこと言わないで下さい!」

ミリア「あ...ごめんね。そんなつもりじゃ...」

ヒナ「あ、いえ...ヒナこそ、大きな声を出してしまって...ごめんなさい...」

琴花の心「へえ...ヨキって子に無関心だと思ったら...なるほどね、だからクロノはこんな勝負を...」

トト「行くですよ!よい、スタートですよ!」

ヨキ「うおおおっ！」

剣斗「は、速えなあ！ん？クロノは？」

クロノ「…。」

剣斗「っておい！行かなくていいのかよ！」

クロノ「大丈夫ですよ。」

剣斗「けどさあ、アイツ速えぞ。」

クロノ「追いつけない速さじゃないですよ。それにこのレースは、速さだけで勝てるわけじゃないんです。まあ、見てれば分かりますよ。…ではぼちぼち、行きますか。」

トト「行つてらっしゃいですよ！」

クロノ「ああ！」

琴花「あゝあ、レースが終わるまで暇だなあ。」

トト「大丈夫ですよ！ネム！」

ネム「仕方ないですね。ではその噴水広場に行きますわよ！」

剣斗「噴水広場？」

トト「ネムは『透視能力』を持ってるんですの！」

剣斗「でも何で噴水広場なんだ？」

トト「ネムは自分が見てるモノを水に映し出すことが出来ますですの！」

剣斗「ほえ、便利な能力だなあ。そうかあ、『透視能力』かあ、えへへ……」

琴花「何を考えてんのか、丸分かりだ、このドスケベッ！」

剣斗「どわっ！」

ミリア「アハハ！その絡みも久しぶりだなあ、なっつかしい！」

ネム「……では映し出しますわよ！」

ミリア「あ、見えてきた！」

ヒナ「……」

（クロノ達へ）

ヨキ「ヒナのために、絶対勝あーっ！へ、このまま独走してほえ面かせてやるぜ！」

クロノ「そんなスピードじゃ、かせられないよ！」

ヨキ「何！どこだ！」

クロノ「上だよ。」

ヨキ「いつの間に!」

クロノ「ふふ。」

ヨキ「ちっ!オラアッ!」

クロノ「くっ!」

(剣斗達へ)

剣斗「何だ!ヨキって奴から何か出たぞ!」

ネム「ヨキは『発電能力』の持ち主なのですわ。」

剣斗「『電気使い』ってことか?」

ネム「そうですね。」

剣斗の心「『電気使い』かあ…へへ、そーいやあのヨキって奴、なんとなくギルティに似てやがんな…。喋り方も…負けず嫌いなトコもな…。」

琴花「でもさあ、レースじゃないの?攻撃なんかしていいわけ?」

トト「このレースは何でもありますの!」

剣斗「ホントにあつぶねえレース…。」

（クロノ達へ）

ヨキ「オラオラオラオラオラオラアッ！」

クロノ「くっ！」

ヨキ「『スパークエッジ』ッ！」

クロノ「ぐわっ！」

ヨキ「はあはあはあ……へ、ざまあみやがれ！しばらく寝てやがれ！今のうちに！」

（ヨキは『針の塔』に登る）

ヨキ「へへ、オイラの勝ちだ！………はあはあはあ………はあはあはあ………何だ…頂上が見えてんのに…全然近づかねえ………何でだ？」

（剣斗達へ）

剣斗「何だ？ヨキの奴、さっきから何してるんだ？」

ミリア「そうだよねえ…。木に登ったり、下りたり…何してんの？」

ヒナ「ヨキくん…。」

ネム「クロノ様の勝ちですわね。」

琴花「どういうこと？」

ネム「ヨキはクロノ様の『エリア』にかかっているのですわ。」

剣斗「でも一体どんな『力』なんだ？見たところ、ヨキは変な動きしてるだけだし…。」

ネム「クロノ様の『幻』の『エリア』、つまり相手の五感を征して自由自在に操作したり、惑わせる『力』ですわ。」

剣斗「おつかねえ『エリア』だな…。」

（クロノ達へ）

ヨキ「くそっ！全然頂上に着かねえじゃねえかよ！一体……まさか！」

クロノ「どうやら気付いたようだね。」

ヨキ「てめえクロノ、『エリア』を使いやがったな！」

クロノ「ふふ、それじゃボクは行くよ。どうやらこの勝負、ボクの勝ちのようだね。」

ヨキ「ぐっ……体がいうときかねえ……。」

クロノ「よし、後は塔に登るだけだな。」

（クロノは塔に登る）

クロノ「…ヨキ……ん？痛っ……ヨキ！」

ヨキ「へ、そう簡単にいくかったの！まだ勝負はついてねえっ！」

クロノ「そうか…自らを傷付け、その痛みでボクの『幻術』を解いたか……ふふ。」

ヨキ「行くぜ！『エネルギーボルト』ッ！」

クロノ「くっ！」

ヨキ「逃げても無駄だぜ！オイラの『エネルギーボルト』は、どこまでも追っていくんだ！」

クロノ「……仕方がないな。『レベル2』……。」

（剣斗達へ）

剣斗「どっちもスゲーな……。」

ミリア「特にクロノなんて、まだ実力の半分も出してない感じだもんね……。」

琴花「うん……ホントに強いぜい……。」

ネム「ヒナッ！」

剣斗「ん？どうした？」

ヒナ「う……。」

ネム「アナタ、また発作が！」

琴花「大丈夫なの？」

ヒナ「は……はい……うつ！」

トト「……ご主人様……。」

（クロノ達へ）

クロノの心「……はっ！トト、どうした？」

ヨキ「ん？」

クロノ「…。」

ヨキ「隙だらけじゃねえか…へ、もらったあっ！」

クロノ「ヒナッ！」

ヨキ「え？ヒナ？あ、おい、どこ行きやがる！」

クロノ「くっ…間に合え！」

ヨキ「…何だクロノの奴…。へ、まあいいか、これでオイラの勝ちだ！」

（ヨキは頂上に着く）

ヨキ「これで邪魔なクロノが…アイツ…何で戻ったんだ…。ヒナって叫んで…まさか！ヒナの奴、また発作が！こうしちゃ…今『羅針盤』に触ればクロノは…そうだ…邪魔なクロノが消えるんだ…。ヒナにはオイラが…でも…。ああっ、もうっ、ちきしょっ！こんなの納得いかねえっ！待ってるよ、ヒナアッ！」

（剣斗達へ）

ネム「ヒナ、しっかりなさい！」

ヒナ「はあはあはあ…。」

クロノ「ヒナッ!」

ネム「クロノ様!ヒナが!」

クロノ「分かってる!ヒナ、コレを飲むんだ!」

ヒナ「う…………あ…クロノ…様…。」

クロノ「良かった、間に合って。」

剣斗「アレは?」

トト「『湧錬丸』ですの!中に大量の『錬』が凝縮されていますの!」

剣斗「『湧錬丸』…どっかで聞いたことが…。」

ヨキ「ヒナアッ!」

ヒナ「ヨキくん…。」

ヨキ「大丈夫かヒナ?」

ヒナ「うん…クロノ様が助けて下さって…。」

ヨキ「…クロノが…………くっ!」

ヒナ「ヨキくん?」

ヨキ「……何だよ…?」

クロノ「…。」

ヨキ「何でアンタはいつも、オイラより先に……くそ…。」

ヒナ「…ヨキくん。」

ヨキ「ヒナ…。」

ヒナ「ありがとうね。」

ヨキ「え?」

ヒナ「だって、ヨキくん、いつもヒナのこと、心配してくれていたから。ヒナ…すごく嬉しいの…だから…ありがとう…ヨキくん…。」

ヨキ「ヒナ…オイラは………おい、クロノ。」

クロノ「何だい?」

ヨキ「オイラの……負けだ…。」

次回に続く

## 第十七劇『火者』

ヨキ「か、勘違いすんなよ！今日はだからなっ！」

ヒナ「ふふ…。」

クロノ「分かったよ。」

ヒナ「あ、ヨキくん…足…。」

ヨキ「え？ああ、帰って来る時にちょっとな！大丈夫だって、ただのかすり傷だし！」

ヒナ「…クロノ様もお手に…。」

クロノ「ボクも大丈夫だよ。」

ヒナ「でも…ヒナのせいで…。せめて、ヒナにお怪我を治させて下さい。」

ヨキ「で、でもよう…。」

クロノ「『力』を使って、また発作が出たら大変だよ。ボクもヨキも、ヒナが元気に笑っていてくれることが、一番望んでいることなんだから。」

ヒナ「だったら尚更です。」

クロノ「え？」

ヒナ「治させて下さい。それがヒナの一番望んでいることです。お二人が元気に笑っていて下さることが、ヒナの一番の笑顔の源なんです。」

クロノの心「……この程度の傷なら、大丈夫が…。」

ヨキ「うーん…。」

クロノ「分かったよ。じゃあ、頼んでもいいかな？」

ヒナ「はい!」

ヨキ「だけだよあ…。」

ヒナ「お願いヨキくん…。」

ヨキの心「う…可愛いなあもう…。」

ヒナ「駄目?」

ヨキ「わ、分かったよ分かった!」

ヒナ「ありがとう!」

ミリア「ヨキは尻に敷かれるタイプだね。」

剣斗「ふーん、何か男としてどーよそれ、アハハ!」

ミリア「剣斗と一緒に。」

剣斗「つておいっ！」

ヒナ「それでは…。」

琴花「ヒナちゃんの体が光ってる！」

ヒナ「……ラ〜ラララ〜ララ〜ラララ〜。」

琴花「キレイな歌声…。」

ミリア「ホントだね…。聞いていると落ち着くっていうか、癒される〜！」

剣斗「ん？ああ！クロノの手の傷が治っていくぞ！」

琴花「ホントだ！」

ミリア「もしかして…さっきの治すって…。」

トト「ですよ！ヒナの『力』ですよ！」

ミリア「やっぱし！」

トト「ヒナの『歌』には、『治癒能力』がありますですよ！」

ネム「ですが、『力』を使う度にヒナの体に、無理がかかってしま  
うのですわ。それにヒナは生まれつき体が弱く、病気がちなので、  
あまり『力』を使い過ぎると、命に関わるのですわ。」

剣斗「そうか…。」

ヒナ「……ふう…。」

クロノ「ありがとうヒナ。」

ヨキ「サンキュ…。」

ヒナ「あは…。」

琴花「でも、凄いなあ。」

剣斗「そつだよなあ…まるで霊神みてえだもんな。」

ネム「霊神…間違った言い方ではないですよ。」

琴花「え？」

ネム「ワタクシ達は、元々は人形でしたけど、『霊神の力』を注ぎ込まれた、いわば新しい霊神なのですね。」

剣斗「でもさ、トトは自分達のことを霊神じゃないって言ってたぜ。」

ネム「まあ、ワタクシ達『時人形』は、霊神であって霊神ではないのです。」

トト「ボク達の体の中には、『フォンス』が埋め込まれていますの。」

ミリア「それって確か…。」

クロノ「そう、『エリア』を使うためのモノです。」

剣斗「じゃあさ、『フォンス』を埋め込んだら、何でも『靈神の力』を扱えるようになるのか？」

クロノ「いいえ、『時人形』、特にこの子達は特別なんです。」

琴花「特別？」

クロノ「はい。この子達は、アリス様がお作りになられた人形達なんです。」

剣斗「あのキレイな人が？」

クロノ「アリス様がお作りになる人形には、必ず生命が宿るんです。」

琴花「す、凄いけど、何で？」

クロノ「アリス様は『心』の『エリア』をお持ちになれる方なんです。」

ミリア「アタシも会ったけど、その『力』で、他人の『心』を読むんだよね！」

クロノ「そのとおりです。そして、アリス様の『レベル2』は『心宿<sup>シユク</sup>』と呼ばれ、その『力』で人形達に命を吹き込むんです。」

剣斗「れべるっ？何それ？」

クロノ「ああ、そうでした！まだ『エリア』の修行してなかったんでしたね！」

琴花「何か事情があつたんじゃないの？明日つしょ？修行は…。」

クロノ「はい、実は今日はミリアに『フォンス』を装備してもらったんです。ですから、今日一日休息を取ってもらう必要があります。だから、修行は明日にします。どうせなら、三人一緒にした方がいいと思いましたんで。」

剣斗「そっか…まあ、その方がいいよな。」

ネム「ところでクロノ様？」

クロノ「何だい？」

ネム「どうして、あのような勝負をなさったのですか？今はこのように、丸く収まっています。が、一歩間違えば、どちらかが死んでいたかもしれないんですわよ？」

クロノ「え」と…。」

ヨキ「ま、オイラが勝ってたけどな！」

ネム「お黙りなさいヨキ！」

ヨキ「う…。」

ネム「クロノ様！」

クロノ「……死なないんだ。」

ネム「へ？あの…今何て…。」

クロノ「いや…だから死なないんだよ。あの勝負に勝っても負けても、何も起こらない、ただのレースなんだよ。」

ネム「何ですのそれっ！」

クロノ「アハハ！」

ネム「わ、笑ってる場合じゃないですわよ！え？でも噂では！」

クロノ「噂では、でしょ？」

ネム「あ…。」

クロノ「ボクが何で、あんな勝負をしたのか…。それは…確かめたかったんだ。」

剣斗「何をだ？」

クロノ「ヨキの…ヒナに対する想いが、どんなものをです。」

ヨキ「は？」

クロノ「ヒナのための想いが、正しく真っ直ぐかをね。」

ヨキ「何だそれ？」

クロノ「あの勝負の決まりは何だった？」

ネム「負けたら死んでしまうことですわ。」

クロノ「そう…そして、ボクはわざと負けるつもりだった。」

ヨキ「はあ？おい、どういうことだよ！」

クロノ「ヨキ、君には二つの選択肢があったはずだ。ボクを負かして命を奪う選択、そして奪わない選択。」

ヨキ「あ…。」

クロノ「君が迷わず『羅針盤』に触り、ボクを殺そうとしたなら仕方ない、その時は、本当に君を、ただの人形に戻すつもりだった。」

ヨキ「…。」

ヒナ「クロノ様…。」

クロノ「だが君は、それを選ばなかった。何故かな？」

ヨキ「そ、それは…。」

琴花「ヒナちゃんのためだろ？」

ヨキ「えっ！」

ヒナ「ヨキくん…。」

ヨキ「いや…それは…。」

琴花「クロノが死ねば、ヒナちゃんが悲しむ。いくら自分にとって邪魔なクロノでも、ヒナちゃんのことを考えると、とてもそんなことは出来なかった。違う？」

ヨキ「う…。」

クロノ「極限に迫られた選択で、それでもなお、大切な者のために考え、行動出来る。それを確かめるためには、あの勝負がもってこいだっただよ。そして見事、正しい答えを選んだ。安心したよ！」

ヨキ「…オイラはまんまと乗せられたってわけかよ…。」

ヒナ「ふふ、でもありがとうヨキくん。」

ヨキ「え？ いやあ、アイツはさ、こんなくだらねえ勝負しなくても、オイラなら勝てるからさ、今日は勝ちを譲ってやったんだよ！ アハハ！」

ヒナ「ふふ。」

琴花「ところでクロノ？」

クロノ「何です？」

琴花「もう一つ、確かめたかったことあるでしょ？」

クロノ「さすがは琴花、気付いてましたか？」

琴花「もちろんだよ！あの子の、ヒナちゃんの気持ちも確かめたかったんでしょ？」

クロノ「ふ…。」

琴花「自分では気付いてないみたいだけど、ヒナちゃんはヨキのこ  
とを…。」

剣斗「なあ、ところでさ、これからどうすんだ？」

クロノ「え？あ…そうですね…修行は明日からですし、今日はゆっくりしてて下さい。トト、後は頼むね？」

トト「任されたですよー！」

クロノ「じゃあ、ヒナ、ネム、ヨキ、また今度ね。」

ネム「はい、お待ち申し上げておりますわ。」

ヒナ「ヒナも…早く体を治しますね。」

クロノ「うん、無理はしないようにね。」

ヒナ「はい。」

ヨキ「次はオイラが勝つからな！覚悟してろよ！」

クロノ「はは…肝に銘じておくよ。それじゃ…。」

剣斗「よっしゃ！トト、次はどこに連れて行ってくれんだ？」

トト「うゝん……考えてなかったですよ！」

剣斗「おいおい……」

（その頃天満は）

天満「……」

真雪「どうかした、天くん？」

天満「あ、いや……何でもないよ……」

真雪「そう……何か元気ないみたいだけど。」

天満「大丈夫だって！ただちょっと『月』にビックリしてるだけだから！だって『月』だよ！アハハ！」

真雪「そう……」

ジウの心「……小僧の奴……」

にゆう「あ！あそこが出口にゆ？」

天満「……広いな。」

ジウ「さて…何が出てくるか…ん？」

？「『火の連弾』…。」

皆「！」

天満「危ないっ！……大丈夫か、真雪！」

真雪「うん、ありがとう。」

天満「誰だ！」

？「『戦闘錬値』…362…。」

天満「お前か！急に攻撃したのは！」

？「我は…『叢雲』が一人…『イオキス』…『火』を司る者だ…。」

天満「ユエの仲間か！」

ジウ「……ふむ。」

イオキス「お前達を…通すわけには…いかない…。」

天満「そうはいかない！絶対に通してもらっ！」

イオキス「ならば…『力』で…押し通してみよ…。」

天満「ああ！」

イオキス「だが…その前に…。」

皆「！」

天満「何っ！」

真雪「天くん！」

にゆう「閉じ込められたにゅ〜！」

ジウ「これは…ただの檻じゃねえな。」

イオキス「その檻は…ユエさんが作った…『鍊』を反射させる…檻だ…。むやみに…攻撃すれば…それが返ってくる…。」

天満「くっ！」

真雪「でも、どうして私達だけ…。」

ジウ「奴は天満と二人で戦いたいんだろう。」

真雪「そんなっ！」

天満「イオキス！」

イオキス「皆を…救いたくば…我と戦い…勝つことだ…。」

天満「望むところだ！」

ジウ「…小僧。」

天満「武器…何か無いか…。」

イオキス「行くぞ…『火の連弾』…。」

天満「うわっ！熱っ！」

イオキス「…『戦闘錬値』…362…変わらず…か…。」

天満「くそ…丸腰で戦える相手じゃないぞ…どうする…。」

イオキス「少し…強い…行くぞ…。」

天満「え？」

イオキス「『火の<sup>ダイキユウ</sup>大球』…。」

天満「な…！」

真雪「天くんっ！」

ジウ「大丈夫だ。辛うじて直撃は避けた。」

天満「くうっ！」

イオキス「『戦闘錬値』…374…少し…上がったか…。」

天満「はあはあはあ…。」

真雪「良かった…。」

ジウ「だがこのままじゃ、勝ち目なんてないな。」

真雪「え？」

ジウ「イオキスはまだ実力の半分も出してない。奴は天満の『力』を観察してやがるんだ。」

真雪「どうしたらいいんですか？」

ジウ「まあ、小僧の成長に任せるしかないだろうな。今のままじゃ、確実に殺られるしかない。」

真雪「そんなつ！天くん…。」

イオキス「あの瞳…ユエさんに…似ている…。」

天満「くそ！何も出来ないのか！」

イオキス「試して…みるか…『レベル2』…『火泉<sup>カセン</sup>』…。」

天満「何だ？」

イオキス「この泉は…我の源…。」

天満「『火の泉』？」

イオキス「来たれ…。」

天満「泉の中の『火』が、奴の体に纏わりついていく！」

イオキス「……。」

ジウ「あれは、このオレの『星の纏い』と同じようなもんだな。言ってみれば、『火の纏い』だな。アレで攻撃力と防御力をあげてやる。」

天満「ジウさんと同じ!」

イオキス「この姿に…になると…手加減…出来ないぞ…」

天満「くっ!」

イオキス「『火の連弾』…。」

天満「なっ! さっきと威力が全然っ! うわあああっ!」

イオキス「体力…残少…この程度か…」

天満「はあはあはあ……くっ! うわあああっ!」

イオキス「ん?」

次回に続く

## 第十八劇『鏡力』

イオキス「この『光』…ユエさんと…同じ。」

真雪「天くん？」

にゅう「あの時と同じ『光』にゆ〜！」

ジウ「やっと『エリア』を発動出来たか。」

天満「行くぞっ！」

イオキス「『火の連弾』…。」

天満「はっ！」

イオキス「ん…『戦闘錬値』…405…さらに…上がった…。」

天満「くっ……けどどうすれば…武器も何もないのに…。」

ジウ「あの馬鹿野郎、まだ武器に頼ろうとしてやがる。小僧っ！」

天満「え？」

ジウ「いつまで武器に頼ってやがる！お前は今霊神と同じ状態なんだぞ！」

天満「霊神！」

ジウ「武器がなけりや、それに変わるモノで戦えばいいだろうが！  
自分で考えやがれ！」

天満「…そうか…：霊神は武器なんか持ってない…。何故なら『力』  
を具現化して戦えるからだ！よしっ！」

イオキス「…空気が…変わった…。」

天満「……………」

イオキス「隙だらけだ…『火の大球』…。」

真雪「天くん危ないっ！」

にゆう「にゅ〜っ！」

ジウ「小僧…。」

イオキス「終了…ん？」

天満「で…出来た！」

イオキス「どういう…ことだ…。」

天満「ふう、悪いけど相殺させてもらったぞ！」

イオキス「相殺…。」

天満「さあ、今度はそっちがくらっ番だ！はあっ！」

イオキス「これは…。」

天満「くそ…外れた！まだ完全にコントロール出来てないな。」

イオキス「『月の咆哮』…。」

真雪「アレはジウさんと戦った時の…。あの時は剣が光っていたけど、今は手が光っている…。でも、アレって剣が無くても出来るんですか？」

ジウ「ああ、『月の咆哮』は、衝撃を飛ばす技だ。剣では剣撃の塊を、拳では拳撃の塊を飛ばす。つまり、体内に溜めた『力』を、放出する技だ。」

イオキス「しかし…大した…威力だ…。『レベル1』で…私の『レベル2』の…攻撃を…相殺するとは…。」

天満「はあっ！」

イオキス「む…『戦闘錬値』…533…。」

天満「よし、当たった！」

イオキス「…まさか…。」

天満「何っ！」

イオキス「まさか…『レベル3』を…使うことに…なるとは…。」

(その頃シャウト達は)

シャウト「天満達は大丈夫だろうか？」

ゼロ「どうですかね。」

シャウト「しかし…本当にユエは『地球』を滅ぼすことが目的なのだろうか？」

ゼロ「というと？」

シャウト「何だか、私達は試されている気がしてならない。」

ゼロ「…。」

シャウト「ユエの目的は『地球』と『月』の融合だ。だが何故そんなことをする必要がある？『月』はディークが創ったモノだ。そしてユエがその『月』を保護している。ユエがその気になれば、『月』を『地球』のような、緑豊かな美しい惑星にすることだって出来るはずだ。ユエの頭脳ならばな。それなのに…。」

ゼロ「まあ、会えば分かるでしょうね。ユエさんが一体何の為に、こんな事をしているのか。ほら、お逃え向きに馬鹿がいそうですよ？その馬鹿から情報を手にいれましょう！」

シャウト「馬鹿？」

？「よっしゃあっ！マジついてらっ！」

シャウト「何だ？」

？「てめえがマジこの道に来るなんてな！望んでたが、叶ってマジ良かったぜ！」

シャウト「誰だ？」

ゼロ「マジ馬鹿です。」

？「誰がマジ馬鹿だ！てめえこそ、オツムがマジおかしくなっちまったんじゃないか？」

ゼロ「いえいえ、あなた程じゃありませんよ。」

？「ぐ…相変わらずマジム力つく野郎だなオイ！」

シャウト「もしかして…。」

ゼロ「ええ、『叢雲』の一人、『水』の………はて？何て名前でしたっけ？」

？「『フェイ』だこの野郎っ！」

ゼロ「ああ、そうでしたそうでした！」

シャウト「奴がフェイ…。」

フェイ「ゼロオ…俺はマジあれからさらに腕を上げたぜ…。もつてめえにはマジ負けねえ！」

ゼロ「おやおや、どのくらい進歩したんですか？」

フェイ「マジあの時の倍は強いぜ！」

ゼロ「倍ですか……くく。」

フェイ「マジ何がおかしいんだよ！」

ゼロ「すみません……ですが、あまりに自信満々なんでつい……。」

フェイ「はあ？」

ゼロ「だってそうでしょう？アリが2、3倍強くなったからといって、恐竜には勝てないでしょう？」

フェイ「こ、この野郎おゝっ！マジどこまで自信過剰なんだよ！」

ゼロ「はいはい、痛い目にあいたくなければ、さっさとここを通して下さい。僕達は馬鹿に時間をあげてる程、暇じゃないんですから。」

フェイ「ぬおおおっ！マジで殺しちゃうわいつ！」

ゼロ「さて……ではさっさと片付けますか。」

シャウト「待て。」

ゼロ「どうしました？」

シャウト「ここは私にやらせてくれ。」

ゼロ「…………別に構いませんが、フェイは僕より弱いといっても、『エリア』の使い手です。今のシャウトさんでは、どうにもなりませんよ?」

シャウト「あまり侮らないでもらいたいな。」

ゼロ「…。」

シャウト「私はディークの息子の一人、『三霊神』の一人だぞ。」

ゼロ「…分かりました。」

フェイ「んゝ何だ何だ?このオッサンがマジ俺と戦うつてのか?」

シャウト「そうだ。」

フェイ「マジ見たとこ、『フォンス』も覚醒出来てねえし。」

ゼロ「確かにシャウトさんは『エリア』をまだ使えない。」

フェイ「へ、そんな奴が、マジ俺と戦うつてか?マジ笑わせるぜ!俺はマジ、ゼロと戦いたいんだよ!マジでめえじゃねえ!」

ゼロ「マジマジ煩いですねえ。んゝそうですねえ、ではこうしましょう。あなたがシャウトさんを倒すことが出来れば、お相手致します。」

フェイ「…………マジ準備運動も必要だしな。いいぜ!マジ俺が相手してやるよ!」

シャウト「それは光栄だな。」

フェイ「マジ感動して、ポックリ行くなよ！」

シャウト「その心配はいらないっ！」

フェイ「ならマジ行くぜ！『レベル1』！『水の裂刺<sup>レツ</sup>』！」

シャウト「くっ……やはり『鍊』が…術が出せん！…さてよ？」

フェイ「はははは！ゼロオ、マジいいのか？あのオッサン死んじまうぜ！」

ゼロ「ご勝手に。」

フェイ「ちっ、マジ相変わらずのコウモリ野郎だな！仲間をマジ裏切ることが、てめえの取り柄だもんなあ！」

ゼロ「否定はしませんよ。ただし、僕がご勝手にと言ったのは、シャウトさんを見捨てて言っただけじゃないですよ。」

フェイ「あ？」

ゼロ「彼はあなたが思ってる程、弱くないからです。」

フェイ「マジ何言ってるやがる！現に奴はマジ手も足も……何っ！」

シャウト「成程な…『フォンス』に意識を集中し、『力』を込めることで、『エリア』が発動するのか…。」

フェイ「な、何だとお…っ！」

シャウト「『錬術』を使う時と、そう違わないモノだな。」

フェイ「マジ何で…っ！くっ、『水の裂刺』！」

シャウト「『鏡』よ…。」

フェイ「ふ…防ぎやがった…マジ…かよ…『エリア』をマジ使いこなしてやがる…。マジ何が起きたんだあ！」

ゼロ「あれ？言ってますでしたっけ？その方は…『鏡のシャウト』と呼ばれる、『三霊神』の一人ですよ。」

フェイ「霊…神…？マジかよ！マジ何で霊神がいんだよ！」

ゼロ「説明するのも面倒です。それに…あなたの頭じゃ、理解するのに時間がかかり過ぎる。」

フェイ「ゼロオオオっ！」

シャウト「お前の相手は私だ！『鏡』…『レベル1』…『鏡の螺旋<sup>ラセン</sup>』！」

フェイ「くそっ！」

ゼロ「シャウトさんは、我々人とは違い、自ら『錬術』を扱える霊神です。だから、コツさえ掴んでしまえば、『錬術』が『エリア』に変わるだけですから、シャウトさんにとっては、普段通りに『力』

を使うだけで、それが『エリア』になるんです。」

フェイ「くそおっ！だがな！『エリア』は『錬術』と違って、マジ奥が深えっ！たかだか『レベル1』をマジ使えるからといってな…  
…マジ調子に乗んじゃねえええっ！」

シャウト「む？」

フェイ「『レベル2』……『ミズノツカイ水使』！」

シャウト「アレは！」

フェイ「マジ行け！俺の『水使』どもよ！」

ゼロ「『水使』…『水』に己れの意味を送り込むことで、『スイシンタイ水身体』を作り出すことが出来るフェイの『レベル2』か…。さあ、どうしますかシャウトさん…。」

シャウト「く…コイツら、一匹一匹の『力』が強い！相手をしてたら、体力を消耗する！」

フェイ「へ、マジそいつらは、ただ強いだけじゃねえぜ！」

シャウト「何っ！くっ、放せっ！」

フェイ「マジ…掴まれたな…。」

シャウト「え？」

ゼロ「まずい！シャウトさん、早く『水使』から離れて下さいっ！」

フェイ「マジ遅い！」

シャウト「うわああー……っ！」

ゼロ「シャウトさん！」

フェイ「マジ残念だったな？俺の『水使』にマジ迂濶に触れると、生命力を吸い取られんだよ！」

シャウト「ぐううう……っ！」

フェイ「こんなオッサンにマジ手間どったが、これでマジ終わりだ！さあ、次はマジてめえだゼロオっ！」

ゼロ「シャウトさん……ん？」

フェイ「さあ、『水使』どもよ！ゼロにマジ攻撃しやがれ！……ん？マジどうした？行け！『水使』ども！」

ゼロ「ふふふ……残念でしたね？」

フェイ「マジ何がだ！」

ゼロ「シャウトさんを見てみなさい。」

フェイ「……何いっ！……いないっ！」

ゼロ「僕も驚かされましたよ。まさか、もう『レベル2』を覚醒させるなんて。」

フェイ「マジ何だと！一体奴はマジ何処に！」

シャウト「ここだ…。」

フェイ「なっ！」

シャウト「危機一髪だな。」

フェイ「マ…ジ…！何をしたあ！」

シャウト「あの時、私は生命力を吸い取られている時、私もお前のような能力があればと強く願った。すると『フォンス』が光った。見てみる！」

フェイ「『鏡像』…くっ！マジで『レベル2』を覚醒させてやがる！」

シャウト「それでは見せてやる。私の『レベル2』を！『鏡像』！」

フェイ「何っ！奴が分身！これじゃ、マジ俺と同じ…っ！」

ゼロ「さて…本当にただ分身するだけなのか…。」

フェイ「へ、本物はマジ一人だけだ！そいつをマジ見つけりゃ！」

シャウト「言っておくが、お前の『水使』とは違っぞ。」

フェイ「は？」

シャウト「全部が本物だ。」

フェイ「マジ何だと！……へへ…マジ馬鹿こいたな…。だったら一人を討ちや、マジ終わりだ！そおらあっ！」

シャウト「ぐわあっ！」

フェイ「へ、マジご愁傷様。」

シャウト「ふ…。」

フェイ「何っ！マジ蘇りやがった！」

シャウト「言っただけだ。皆本物だと。」

フェイ「マジ…何で？」

シャウト「私達は言わば、それぞれが手であり、足であり、心臓である。故に、私を討ちたければ、一度に全員を討つんだな。そうしなければ、私は何度でも蘇生する。」

フェイ「マ、マジそれがてめえの能力か…。」

ゼロ「さすがはシャウトさん！ここに来て、そんな能力を開花させるとは！」

シャウト「『フォンス』は便利なモノだな。強く想えば、それに答えてくれる。それが『力』になる！」

フェイ「くそっ！『水使』ども、やれっ！」

ゼロ「アレはジウさんにした攻撃と同じ！」

フェイ「マジ全員消えろおおーっ！」

ゼロ「……やりますね。なかなかの威力です。シャウトさんは…。」

フェイ「はははは！マジどうだあ！粉々にしてやったぜ！」

シャウト「誰を？」

フェイ「マジかよっ！」

ゼロ「ほっ。」

フェイ「てめえっ！」

シャウト「危なかったが、三番目が無事だったのでな。惜しかったな。」

フェイ「マジ…何者だてめえ…。」

シャウト「『鏡』のシャウトだ。」

次回に続く



## 第十九劇『新醒』

フェイ「ゼロはともかく…マジおまけみたいなオッサンにここまで…。」

シャウト「ただのオッサンではないのでな。」

フェイ「ふん、マジこんなオッサンに『水使』どもの攻撃が…。」

シャウト「初めてくらったのなら、ヤバかったがな。」

フェイ「マジどいう意味だ？」

シャウト「一回見たから何とかなったんだ。」

フェイ「そうか…てめえ、『流星』との戦いをマジ見てやがったのか！」

シャウト「そういうことだ。」

フェイ「……マジ認めてやるよ。」

ゼロ「おや、珍しいですねえ。あのフェイが敵を認めるなんて。」

フェイ「マジたった一回見ただけで、ここまで出来るなんてな…  
…マジいいだろう。」

シャウト「ん？」

フェイ「シャウトって言ったな……アンタがマジ知らねえ技……見せてやるよ。」

シャウト「何!」

ゼロ「まさか!『アレ』を完全に使いこなせたのか!」

フェイ「マジ後悔するぜ……。『レベル3』は『2』や『1』とはマジ比較になんねえぜ。」

シャウト「…『レベル3』?」

ゼロ「本当に出すつもりなのか!」

フェイ「『レベル3』…。」

(その頃アイズ達は)

アイズ「はあはあはあ…。」

サイガ「はあはあはあ…。」

サリーオ「腕を上げたね、『リアリィ』。」

リアリィ「へへ〜んっ!まだまだこれからだよお!」

サリーオ「さて…。」

アイズ「う、動きが速くて…。」

サイガ「サリーオには…見えとるみたいやけどな…。」

サリーオ「アイズ！サイガ！」

アイズ「な、何だ？」

サリーオ「二人で何とかしてみな！」

アイズ「え？」

サイガ「何とかって……二人で戦えっちゅうことかいな？」

サリーオ「そのとおりだ。」

リアリイ「サリちゃん、それは無茶だよお！まだ『フォンス』も覚醒してないのに、このリアリイちゃんに勝てるわけないじゃん！」

サリーオ「だからさ…。」

リアリイ「え？」

アイズ「何を考えてるんだ？」

サリーオ「アンタ達…弱いままでいいのかい？」

二人「！」

サリーオ「『力』ってのはね、誰かに守られてるだけじゃ、強くな

んてならないんだよ。それこそ必死で、自らを鍛えなきゃ、素質があっても、ただの飾り、宝の持ち腐れなんだよ。」

アイズ「…。」

サイガ「…。」

アイズ「サイガ。」

サイガ「アイズ。」

アイズ「やってやるか!」

サイガ「ワイらの強さ、見せたるわ!」

サリーオ「ふ…そういうことだ。」

リアリイ「ふ…変わってないね、サリちゃんは。」

サリーオ「そうかい?」

リアリイ「でも、リアリイだって、負けるわけにはいかないからね!ユエのためにも、ここを通すわけにはいかないよ!」

サリーオ「上等だよ。」

リアリイ「行つくよお!」

アイズ「くそっ!速いっ!」

サイガ「あかん…見えへん！」

リアリィ「捕まえられるもんなら、捕まえてみなっさいっ！それっ！」

サイガ「ぐはっ！」

アイズ「サイガッ！コイツッ！」

リアリィ「当たらないよおくだ！」

サリーオ「そうだ、必死で戦いな。戦いの中でしか、覚醒しない『力』がある。そして、アンタ達は『フォンス』に選ばれた『資格者』だ。さあ、見せてみる、アンタ達の想いの強さを！」

アイズ「はあはあはあ…」

サイガ「はあはあはあ…」

リアリィ「タフだねえ。でも、もう限界かな？」

アイズ「……おい女。」

リアリィ「え？」

アイズ「さっさと本気で来い。」

リアリィ「何言ってるの？」

サイガ「せやで、今の内にワイらを倒しとかな、えらいことになる

で…。」

リアリィ「まだリアリィは『エリア』すら使ってないんだよ？そんなリアリィに、手も足も出ない君達が、どうしたらえらいことが出来るのかなあ？」

アイズ「僕達を…。」

サイガ「ワイらを…。」

二人「なめるなっ！」

リアリィ「二人で来ても同じだよ！君達はリアリィに触ることも、出来ないんだから！」

アイズ「サイガ、耳を！」

サイガ「ん？………成程！」

アイズ「頼む、サイガ！」

サイガ「任せやあつ！はあつつつ！」

リアリィ「何を！」

サリーオ「地面を攻撃して、土煙をあげた…。何をするつもりなんだ…。」

リアリィ「この土煙じゃ、あの人達も、何も見えないんじゃない…。」

サリーオ「土煙が晴れていく……ん？」

リアリイ「アレ？二人がいないよぉ！」

サリーオ「さあて…隠れているだけじゃ、何も変わらない…どうする？」

リアリイ「む……どこ行つたのぉ！……は！危ない！何が飛んで…石？はくん……そこだね！それいっ！……アレ？」

サリーオ「成程ね。」

リアリイ「わあっ！また石？もう、いい加減出てきてよねえ！」

サリーオ「結構頭が切れるじゃないか。リアリイの弱点をつくなくて。」

リアリイ「わあっ！またあっ！ウツザアアイツ！」

サリーオ「リアリイの奴、どうやら気付いてないみたいだね。」

リアリイ「もう！イライラするっ！出て来おおいつ！」

アイズ「今だサイガ！」

サイガ「おう！」

リアリイ「うわぁ！」

アイズ「逃がさん！」

リアリィ「甘い甘い！」

サイガ「もらったあつ！」

リアリィ「前えっ！ヤ、ヤッバ〜イ……………なんちつて。」

サイガ「あれ？」

リアリィ「へへ〜んだ！」

サイガ「へ…チェックメイト。」

アイズ「はっ！」

リアリィ「え……………きゃあああつ！」

アイズ「捕まえたぞ！」

サリーオ「やるじゃないか二人とも。」

リアリィ「ど、どぼじでえ〜。」

アイズ「悪いが、お前みたいなの、速い奴と戦ったのは初めてじゃないんだ。」

サイガ「まあ、ワイはアイズの作戦に乗っただけやけどな。」

アイズ「そいつとも、こんな鬼ごっこをしたが、その時も、このやり方で捕まえたんだ。」

リアリィ「な、何でよお！どくしてよお！」

アイズ「お前の動きは確かに速いが、直線的だ。パターンを読めば、何とでもなる。」

リアリィ「パターンを読むって、読まれる動きなんかしてないもん！」

サリーオ「気付かなかったのかい？」

リアリィ「な、何を？」

サリーオ「あの隠れての石投げ、アレでアンタは知らず知らず、アイズの術中にハマっていったんだよ。」

リアリィ「どゆことよお？」

サリーオ「石投げには、二つの意味があった。一つは動きの範囲を狭くするために、岩場の多い場所に、誘い込む。そしてもう一つ……」

リアリィ「何なの？」

アイズ「お前を感情的にさせるためだ。」

リアリィ「感情的？」

サイガ「つまり、アンタを怒らせることや。」

リアリィ「…。」

サリーオ「アンタを怒らせ、冷静さを失わせ、直線的な動きを、より分かりやすくしたんだよ。」

リアリィ「ほえ〜。」

サリーオ「しかし、なかなか考えたもんだよ。」

アイズ「まあ、仲間の一人が考えた作戦だったんだがな。真似させてもらったんだ。」

リアリィ「いやあ〜一本取られちゃったよ!」

アイズ「あ、いつの間に!」

リアリィ「サリちゃんの見込んだ通りの人達のようにだね。いいねえ……じゃあ、第2ラウンド行つくよお!」

二人「!」

リアリィ「『レベル1』…『木の乱咲』っ!」

アイズ「『木』が下から!」

サイガ「飛ぶんやつ!」

リアリィ「飛んでも無駄だよ!絡みつけえ!『木の流縛』っ!」

アイズ「何っ!」

サイガ「う、動けへん！」

リアリイ「その『木』は次第に君達の全身を包んで、最終的には息も出来なくなるよ。どうする？ギブアップするう？」

アイズ「く……。」「

サイガ「こ…この…。」

リアリイ「サリちゃん、いいの？このままじゃ、この人達死んじやうよ？」

サリーオ「……仕方ないな！」

アイズ「待てえっ！」

サリーオ「え？」

アイズ「僕達は……負け……ない……。」

サイガ「せや……最後まで…諦めへん……。」

サリーオ「……ふ。」「

リアリイ「いいの？」

サリーオ「手を出すなって言ってるんだ。アタシはあの子達を信じるよ。」「

リアリィ「ふん…無駄だと思うけど。」

サリーオ「リアリィ、最後まで分からないよ。」

リアリィの心「…殺したくないんだけどな…。」

サリーオ「アイズ…サイガ…。」

アイズ「い…息が…。」

サイガ「ア…イズ…。」

アイズ「僕は…まだ…死ねない…。」

サイガ「ワイ…もや…やるで…アイズ…。」

アイズ「ああ！」

二人「強くなるっ！」

リアリィ「…本当にいいの、サリちゃん！あの人達！」

サリーオ「…。」

リアリィ「サリちゃんっ！」

サリーオ「…感じる。」

リアリィ「え？」

サリーオ「来たっ！」

（木が爆発する）

リアリイ「な、何なの？……まさか！」

サリーオ「随分ハラハラさせてくれたじゃないか、二人とも？」

サイガ「待たせてもうたな。」

アイズ「僕達はここからだ！」

リアリイ「…。」

サリーオ「言っただろ？あの子達がこれくらいで死ぬようなら、一年前の戦いで、とうにあの世に行ってるよ。」

リアリイ「…どうやら、ただ者じゃないみたいだね。」

サリーオ「さあ、アンタ達の『力』、見せてみな！」

リアリイ「どんな『エリア』なのか……ちょっとワクワクだね！行つくよあ！『木の乱咲』っ！」

アイズ「サイガ！」

サイガ「おう！はあっ！」

リアリィ「『フォンス』が光った！どんな『力』を！」

サイガ「行くで！」

リアリィ「おわっ！速さも上がってるじゃん！でも！へへん、まだリアリィの方が速いもんねえ！」

サイガ「へへ。」

リアリィ「…っ！」

サリーオ「ん？」

サイガ「再びチェックメイトや。」

リアリィ「う、動けない！むうう、何でよお！」

サリーオ「アレは…『糸』？」

リアリィ「む、油断したあ…。この『糸』…君の『エリア』なの？」

サイガ「ちゃうで。」

リアリィ「え？」

サイガ「後ろ見てみい。」

リアリィ「え……………ああ！」

アイズ「ふ…。」

サイガ「ワイは、ただ動き回ってたんやない。アイズが張り巡らせた『糸』に、アンタを追いつ込むために、動いてたんや。」

リアリイ「そんなあ、それじゃ…。」

アイズ「そう…僕が『糸』のエリアだ！」

サリーオ「ほう…繊細で理屈っぽい、アイズ向き…いや、アイズらしい『エリア』だね。」

リアリイ「じゃあ君の『エリア』はあ？」

サイガ「見たい？」

リアリイ「うんうん、ワクワク…。」

サイガ「『レベル1』…『刃』っ！」

リアリイ「きゃあああっ！」

サイガ「これがワイの『エリア』や。」

アイズ「『糸』を切ってどうする！」

サリーオ「アハハ！本当に面白いコンビだね！『糸』と『刃』、ハサミと紙みたいなコンビだね！」

アイズ「ふん、サイガがハサミ役っていうのは釈然としないがな。」

サイガ「まあ、ワイらは同じなんや。相性がええのは当たり前ちゃうか？」

リアリィ「同じ………そういえば、顔だけじゃなく、『フォンス』の感じも同じ……。そっかあ、君達双子なんだね！」

サイガ「ま、似たようなもんや。」

リアリィ「初めて見たよお！年の差が結構あるから、ちょっと気付かなかったよお！」

サイガ「んなことより、続きしよか……。」

アイズ「今度こそ、本気を出してもらっぞ。」

リアリィ「よーしっ！何かワクワクしてきたよお！」

サリーオ「気を付けなよ二人とも……。リアリィは、本当に強いんだからね。」

リアリィ「『レベル2』……。」

アイズ「……感じるか？」

サイガ「ああ、ごっつい『力』が、嬢ちゃんからほとばしとる！ホンマに強いわ、あの嬢ちゃん！」

リアリィ「『モクカワズ木蛙』……。」

次回に続く

## 第二十劇『謀月』

アイズ「『木』の…『蛙』？」

サイガ「確かゼロが、言つとつたな…。レベルが上がれば、付加能力が付くつて。」

アイズ「ああ…。」

サリーオ「あゝあ、出しちゃった…。アンタ達、耳をふさいだ方がいいよ。」

二人「え？」

リアリイ「よおしっ！歌えいっ！」

二人「歌あ？」

木蛙「ゲロゲロゲロオ〜！ゲ、ゲ、ゲ、ゲロロロオ〜！」

アイズ「な、何だ！」

サリーオ「…もう少し離れよう…。」

アイズ「か、体が重い！」

サイガ「どないなつとんねん！」

リアリイ「むふふ〜じゃあ説明してあげるね！リアリイの『レベル

2『はねえ、『木蛙』というんだけど、この子達の歌で、『重さ』を変化させることが出来るんだよね!」

アイズ「く…『重力変化』か…。」

サイガ「なんちゅう能力や!」

サリーオ「今頃リアリィから説明もらってるだろうけど、もう一つ能力があるんだよねえ。……うっとおしいんだよね…。」

アイズ「ぐっ…!」

サイガ「お、重たあ…!」

リアリィ「へへ〜ん、どうだあ!」

木蛙「ゲロゲロオ〜!ゲロ、ゲロ、ゲロオ〜!」

アイズ「な、何とかしなければ…。何か策はあるか?」

サイガ「…何か言ったか?」

木蛙「ゲロロロオ〜!」

アイズ「だから、何とかならないか?」

サイガ「え?」

木蛙「ゲロオ、ゲロオ、ゲコゲコゲ〜コ!」

アイズ「……。」

木蛙「ゲッコゲッコゲロロロオ〜！」

アイズ「……。」

木蛙「ゲロゲロゲロゲコゲコゲコ、ゲ、ゲ、ゲ、ゲロオ！」

アイズ「……。」

木蛙「ゲゲゲゲロオ〜！ゲゲゲゲコオ〜！ゲロツ、ゲコツ！ゲロロロオ〜！」

アイズ「だあーっ！煩いっ！黙れっ！頭が痛くなるっ！」

木蛙「ゲロオ、ゲコオ！ゲロツ、ゲロツ、ゲロツ！」

アイズ「イライラするう〜っ！」

サイガ「はは……アイズ……。」

サリーオ「今頃アイズあたりがイライラしてるだろうねえ。ま、気持ちは分かるんだよねえ。本当にあのゲロゲロ声はうっとおしいんだよねえ。あれがもう一つの能力……しかし何故にカエル？。」

リアリイ「それじゃ、行つくよお！えいっ！」

アイズ「ぐっ！」

サイガ「アイズ！うわっ！」

リアリィ「へへ〜ん！」

アイズ「くっ……僕が動けなくても、これなら！行けっ！」

リアリィ「『糸』！わおお！あつぶなあ〜い！」

アイズ「くそ！」

サイガの心「アイズ……ワイの『刃』なら、一発でも当たれば、大ダメージを与えんねんけど……女の子を傷付けんのは嫌やなあ……せやかてこのままやったら……せや！」

リアリィ「ん〜あの子の『糸』は危険だなあ。かなり速いし……  
よお〜しっ！カエルちゃん達、『タイプB』だよ！」

アイズ「『タイプB』？」

木蛙「ゲロ〜ゲロ〜ゲロ〜！ゲコ〜ゲコ〜ゲコ！ゲゲゲゲゲエ  
エエエ〜！」

アイズ「…あ、体が軽く…元に戻った？何故…。」

リアリィ「むふふ〜。」

アイズ「何だか分からないが、もう一度動きを止めてやる！『糸』  
よ！」

リアリィ「…。」

アイズ「捕えたっ！」

リアリィ「残念……。」

アイズ「何っ！い、いつの間に……捕まえたはずじゃ……。」

リアリィ「アレはリアリィの残像だよん。」

アイズ「何だって！み……見えなかった……馬鹿な……僕も『フォンス』のお陰で、スピードだって増してるはずなのに……。」

リアリィ「どうして、リアリィが急に速くなったのか教えてほしい？」

アイズ「……。」

リアリィ「むふふ」リアリィのカエルちゃん達能力は何かな？」

アイズ「……っ！まさか！あの能力で、自分の『重力』を軽くしたのか！」

リアリィ「アッタリィ！」

アイズ「成程な……本当に強いなお前。」

リアリィ「キャハ、褒められちゃったよお！」

アイズの心「しかしマズイな……ただでさえ速い奴の動きが、更に速くなる……どうする……。」

リアリィ「もう君の『糸』のスピードじゃ、リアリィは捕まらないよ。打つ手無しかな?」

アイズ「くっ…。」

サイガ「だったら、こんな手どうや?」

アイズ「え?」

リアリィ「ん?」

アイズ「サイガの声がしたが……そういえばさっきからアイツの姿が…。」

サイガ「ここやここや!」

リアリィ「ああ!」

アイズ「サイガ!」

サイガ「へへ、アイズ!もういつちよ、攻撃してみい!」

アイズ「はあ?」

サイガ「ええから!早お攻撃せえ!」

アイズ「……何だかよく分からないが…『糸』よ!」

リアリィ「無駄だよ!」

サイガ「そいつはどやるな？『レベル1』…『刃』…『刃の牙放』  
！」

リアリイ「およ？むふふ〜どこ狙ってんのお？」

サイガ「いや…狙いバツチリやで…。」

リアリイ「え？」

木蛙「ゲ、ゲコオオオオオオつつ！」

リアリイ「ああ！カエルちゃんを！」

サイガ「へへ、三度目のチェックメイトや！今やアイズ！」

リアリイ「しまっ……動きが元に！」

アイズ「でかしたサイガ！」

リアリイ「くう！」

アイズ「逃がさん！サイガがくれたチャンス、無駄にはしない！  
『レベル1』…『糸の封陣』っ！」

リアリイ「うつそおっ！キャワ〜ンッ！」

サイガ「ナイスや！」

アイズ「よし！」

リアリィ「むゝ！」

アイズ「さあ、打つ手無しか？」

リアリィ「ああ、それさっきリアリィが言ったことじゃん！」

アイズ「どうする？」

サリーオ「どうやら、リアリィの『レベル2』を破ったようだね。  
だが、リアリィにはまだ……。」

リアリィ「ホントにスゴいね君達。ここまでやられるなんて、思わ  
なかったよ！『フォンス』を覚醒させたばっかなのにね。」

アイズ「……。」

リアリィ「……だけどね。」

アイズ「ん？」

サイガ「何やこの感じ……。」

リアリィ「あまり使いたくは無いんだけどなあ……でも……リアリィ  
達の……ユエの邪魔をするんなら、しょうがないよね……。」

アイズ「何だ！僕の『糸』が勝手に解けた！」

サイガ「アイズ！」

アイズ「サイガ！」

サイガ「気いつけや。何か来るで…。」

アイズ「ああ…。」

リアリィ「『レベル3』…。」

（その頃ユエは）

ユエ「よし…『フルエリアオープン最高領域開放』！…………『ユインシス』！」

ユインシス「『錬収束』完了！『フュージョニックスシステム』作動、  
『全錬融合』！『エクスフォンス』発動！」

ユエ「これで二段階が終了する。…………皆…すまない…。」

（天満達は）

天満「ん？イオキスの様子が…。」

イオキス「これは…そうか…ユエさん…そういうこと…ですか…。」

天満「え…何だ…。」

真雪「イオキスさんが倒れましたけど、どうしたんでしょうか？」

ジウの心「この感じ…何かに『力』を吸い取られているかのような…。小僧達には影響は少ないみたいだが、より強い『力』を発しているモノ…それらに強く反応して、『力』を奪ってやがる。とうとう始めやがったか…ユエの野郎。」

天満「どうした、イオキス！」

イオキス「だから…我々は…二段階には…必要…なかったの…ですね…。」

天満「一体…あつ！イオキスが消えた！」

ジウ「はあっ！」

天満「ジウさん！檻を…。」

ジウ「この程度の檻、いつでも破壊出来たぜ。」

天満「えっ！」

真雪「ど、どうして最初からこわさなかったのですか？」

にゅう「そうにゅー！どうしてにゅー！」

ジウ「ふ…ユエの策に乗ってやっただけのことだ。」

天満「へ？」

ジウ「んなことより、さっさと行くぞ。時間が無えんだろ？」

天満「あ…はい、分かりました。」

(シャウトは)

シャウト「ゼロ、何か変だぞ。」

ゼロ「そうですね。あの馬鹿フェイの様子がおかしいですし…。」

フェイ「だ…誰が…マジ…馬鹿…だ…。」

ゼロ「この感じ…これはどうやら急がなければならないようですね。」

シャウト「まさか、ユエが何か!」

ゼロ「とにかく先に進みましょう!」

シャウト「分かった!…しかし、フェイはどうする?」

ゼロ「………骨の二、三本折つときますか?」

フェイ「マ…マジ冗談…だろ?」

ゼロ「おや?」冗談って何がですか?」

フェイ「」…この…マジ鬼…っ!」

ゼロ「!」

シャウト「フェイが消えたぞ！」

ゼロ「…恐らくこの先…ユエさんの所にでも転送されたのでしょうか。」

シャウト「これも『エリア』か？」

ゼロ「分かりません。とにかく、ユエさんに会えば分かるかもしれません。行きましょう！」

シャウト「ああ！」

(走り出口に出る)

シャウト「ここで『月の三爪』は終わりか？」

天満「シャウトーっ！」

シャウト「お、天満達だ。」

天満「無事だったんだな。」

シャウト「皆もな。良かった。」

ゼロ「成程、三つの道は最終的には、一つに繋がっていたんですね。ところで天満くん、そちらにもやりましたか？」

天満「ああ、だけど急に消えて…。」

ゼロ「やはりですか…。」

(アイズは)

アイズ「おい、どうした？」

リアリィ「分から…ない…。」

サリーオの心「まさかユエ、アンタ！」

サイガ「嬢ちゃん！」

リアリィ「『力』が……抜け…っ！」

サリーオ「リアリィ！」

アイズ「消え…た…。」

サイガ「意味が分からへん…。」

サリーオ「…………ユエ。」

アイズ「サリーオ…。」

サリーオ「急ぐよ！」

アイズ「え？」

サリーオ「早くユエの所に急ぐよ！」

アイズ「…分かった。」

サイガ「行くで！」

（アイズ達は天満達の所へ）

アイズ「天満！」

天満「アイズ！」

アイズ「無事のような。」

天満「そっちこそ！サイガもサリーオさんも、良かった。」

サイガ「ああ！」

サリーオ「天満…ユエの所に行くよ！」

天満「サリーオさん…はい！」

（皆、ユエの所に行く）

サリーオ「…久しぶりだねえ。あまり変わってないね…。」

天満「この先にもう一人のディーク…ユエがいるのか…。」

サリーオ「…。」

ジウ「ん……ふ、何を高みから見下ろしてんだ？」

天満「え…ジウさん？」

ジウ「上見てみる。」

天満「上……はっ！」

サリーオ「ユエ！」

ユエ「ようこそ…私の家へ。」

天満「ディーク…そっくりだ…。」

ユエ「ディーク…。」

天満「…。」

サリーオ「ユエ！」

ユエ「サリーオ…久しぶりだな…。」

サリーオ「アンタを止めに来た！」

ユエ「止められるわけにはいかない。」

サリーオ「くっ！」

ジウ「さあ、教えてやれよ！お前の掴んだ真実に対する答えをな、ユエ！」

ユエ「『流星』……いいだろう。中に入って来るといい。君達には信じ難い、重い役目を教えてあげよう。」

天満「ユエ！」

ユエ「デイナー……一つずつ、理解するんだ。お前に課せられた真実と、私の真実は同じだということを……。」

天満「同じ？……それじゃ……やっぱり……。」

真雪「天くん？」

ユエ「全ての答えは私が持っている。だから早く来い。」

天満「ああ、行つてやる！」

ユエ「……。」

天満「行こう！」

（天満達はユエの所に急ぐ）

サリーオ「アタシがいた時と変わってなきゃ、この先がユエの研究室だ。」

天満「入ろう…。」

ユエ「…来たか。」

天満「ユエ!」

ユエ「ふ…お互いディークには苦勞させられるな、ディーノ?」

天満「全てを聞きに来たぞ!」

ユエ「…お前はもう聞いたはずだろう?『星』からな…。」

次回に続く

## 第二十一劇『理解』

天満「…ああ聞いた。だけど、俺はお前自身の口から聞きたい!」

ユエ「……いいだろう。」

サリーオ「どういうことだい?」

アイズ「天満、お前は何を知ってるんだ?」

真雪「天くん…。」

ジウ「黙ってる。」

サリーオ「しかし…。」

ジウ「ユエ自ら真実を答えると言ってるんだ。黙って聞いてろ。」

ゼロの心「さて、これでユエさんの真実が明らかになる。色々疑問だったことが、解決するかもしれない。」

天満「ユエ、皆に話してほしい。何故こんなことをするのか……そして……ユエが見出した答えを!」

ユエ「…分かった。だが先程も言ったとおり、君達にとって、重責になる真実だぞ。」

サイガ「ここまで来て、尻込みするわけないやろ?」

シャウト「そうだな、私も自分の意思で、ここにいる。」

にゆう「みんな強いにゆう！負けないにゆう！」

ユエの心「これが…ディーノの仲間。成程…いい仲間達を持ったものだな。」

天満「ユエ。」

ユエ「……『ユインシス』。」

ユインシス「…ああ。」

サイガ「誰や？」

ユエ「彼が私の所へやって来てから、全ては加速した。」

（ユエの過去）

ユエ「よし、これなら上手くいく。完成するのもそう時間はかかるまい。」

ユエの語り「私はディークに託された『月』の保護と、『エリア』を完成させるために、『錬術』の研究に心血を注いでいた。そして…。」

ユエ「…君は誰だ？」

？「『ユインシス』という。あなたが、ユエだな。俺は未来から来た……『地球』を守るために。」

ユエ「…。」

ユエの語り「驚きを隠せなかった。このユインシスが、未来から来たということもそうだったが、『地球』が破滅するという事実には。」

ユエ「君には未来が見えるというのか？」

ユインシス「ああ、あなたが生み出した『エリア』が、俺に教えてくれた。」

ユエ「…。」

ユインシス「しかし、たとえ未来が分かったとしても、変えることが出来ないんだ。だからユエ、あなたの『力』が必要なんだ。」

ユエ「私の？」

ユインシス「そうだ、俺の感じた未来を『ある者』が記す。そして、あなたが新たな未来を刻むんだ。」

ユエ「…『ある者』というのは？」

？「僕です。」

ユエ「え？」

？「僕の名前は『ユナイマ』と言います。よろしくお願いします。」

ユエ「一体どういう…。」

ユナイマ「ユエさん、これを見て下さい。」

ユエ「え？あ、こ…これは？」

ユナイマ「この『石盤』<sup>セキバン</sup>は…『土録盤』<sup>ドロクバン</sup>。ユインシスが感じた未来が記してあるんです。」

ユエ「…。」

ユナイマ「これが僕の『エリア』、ユインシスが感じた未来を、この『石盤』に記すことが出来ます。」

ユエ「…驚きだな。」

ユナイマ「そして、あなたの『エリア』で、この『土録盤』に記された未来を変えてもらいたいんです。」

ユエ「そ、そんなことが出来るのか？」

ユナイマ「あなたなら…『アイオーン』の『力』を唯一防ぐことの出来たあなたなら、未来を変えることが出来るはずです。僕達はそう信じて、ここまで来たのです。」

ユエ「『アイオーン』……そいつが？」

ユナイマ「そう…『地球』を破滅に導く『無』……我らが討たなければならぬ、絶対の『恐怖』を司る者です。」

ユエ「…。」

ユナイマ「『力』を…あなたの『力』を貸して頂けますか？」

ユエ「……無理だ。」

ユナイマ「な！」

ユエ「私達だけでは無理だ。」

ユナイマ「あ、諦めるのですか！」

ユエ「勘違いしてもらっては困る。」

ユナイマ「え？」

ユエ「『地球』の問題は、そこに生きている者達の協力無しでは、解決なんてしない。」

ユナイマ「で、ですが…。」

ユエ「大丈夫さ。『地球』には、もう一人の私がいる。そして、その者を集った者達は、必ず『力』を扱えるはずだ。」

ユナイマ「ディークさん…ですか？」

ユエ「ああ。」

ユナイマ「では早速連絡を！」

ユエ「いや…今はデイクの邪魔はしたくない。」

ユナイマ「邪魔？…：…そうか、あなたが遺した文献に書いてあった、アオスとの戦いですね？」

ユエ「ああ、だから今は『力』を貯えることに専念したい。来るべき時に備えて…。」

ユナイマ「…分かりました。まずは『エリア』の完成、そしてそれを超える者を…。」

ユエ「そう…育てるんだ。かなり強引な手になるかもしれないが、場合によつては、悪と呼ばれる行為をしてでも…。」

ユナイマ「『地球』を守るため…いや、銀河を守るためです。」

ユエ「…：…運命を変える。言葉で表すのは容易だが、難しい響きだな。」

ユナイマ「僕達自身の『力』を信じるしかないですがね。」

ユエ「そうだな…。そうと決まれば、時間がものを言う！一刻も早く『エリア』を完成させるんだ！手伝つてくれ！」

ユナイマ「はい、やりましょう。」

ユインシス「やろっ、ユエ。」

ユエ「…：…ああ。」

（現実へ）

アイズ「ち、ちょっと待て！じゃあ何か？お前は『地球』を守るために、こんな事をしたと言うのか？」

サリーオ「アタシに『コズミックブリッジ』を造らせたのも全ては…。」

ユエ「ああ、このためだ。」

シャウト「だったら何故『地球』から生気を奪うんだ？」

ユエ「それは…。」

ユインシス「『アイオーン』が近付いているからだ。」

シャウト「『アイオーン』…。」

ユインシス「今はまだ『アイオーン』に見つかるわけにはいかない。だから一旦『地球』を殺し、気配を消し、『天球』…すなわち『月』と融合させ、『アイオーン』でさえ手が出せない程の、強い『光』を持つ惑星へと進化させる。」

シャウト「…。」

サリーオ「そうか…アンタが運命を変えると、あんなに必死になっていたのは…。」

ユエ「そうだ、私の『力』で、どれだけの運命を変えることが出来るか。何度も何度も試みて、私の『力』を少しずつでも、大きくするためにだっただ。この時のためにな…。」

サイガ「…アンタはどこまでやっとなんや？」

アイズ「サイガ？」

ユエ「どこまでとは？」

サイガ「エーテル王の暴君ぶり、アオスの二度目の復活、ワイらの戦い、全部アンタが書いたシナリオちゃうんか？」

ユエ「…。」

サイガ「どないや？」

ユエ「確かにアオス…いや、ネオスを復活させたのは私だ。」

サイガ「なんでや！なんでそないなことしたんや！」

ユエ「…。」

ユインシス「『無』に侵された者を葬るためだ。」

サイガ「はあ？」

ユインシス「王の酷烈な行い、ネオスの暴走、全ては『アイオーン』の『無』の影響がもたらした結果なんだ。」

真雪「じゃあ、アーミアにあんなことをしたのは…。」

ユインシス「いや、行ったのは、あくまでも王だ。『アイオーン』が銀河中に放った『黒の波紋』は銀河を漂い、それが微弱だが『地球』にも届いていた。そしてそれは、王に流れ込み、その者の『悪しき欲望』を増幅させてしまった。」

真雪「『悪しき欲望』…ですか…。」

ユインシス「そう、人間やエルフ、霊神や妖精、それだけではなく、草花や食物、『黒の波紋』はどんなものにも影響を与える。…それに、少なからずいたはずだ、『無』に負け、自分の『欲望』のためだけに行動を起こす者達が。」

アイズ「……邪霊。」

サイガ「ん？」

アイズ「一年前から…いや、それ以前から異常な程に邪霊が増え、その強さが増していた…あれは！」

ユインシス「そのとおりさ。まだ『アイオーン』は銀河の遙か彼方にいるはずなのに、『黒の波紋』は、もうすでにここまで影響を与えてしまっている。」

天満「そして、ネオスにも、その影響が出ていた。」

真雪「天くん…。」

天満「ユエ…。」

ユエ「かなり強引な手だったのは認める。アオスを使って『無』に侵された者達を排除し、最終的に、やはり『無』に侵されたアオスを、君達に倒させた。」

天満「…。」

アイズ「し、しかしそれならば言えば良かっただろう！何故教えなかったんだ？」

ユエ「それが、運命に抗うことだったからだよ。」

アイズ「ど、どういうことだ？」

ユエ「先程も話した通り、ユインシスが未来を感じ、ユナイマがそれを興し、私が刻む。つまり…。」

ジウ「天満達に教えることが、『土録盤』に刻まれていた本当の未来だったんだろう？だからテメエは…。」

アイズ「…。」

ユエ「その通りだ。だから私はその逆を望み、君達に教えなかった。少しでも、定められた運命の歯車をずらせるように。」

アイズ「馬鹿な！」

ユインシス「だが、ただ見ていただけというわけでもなかったんだぞ。」

アイズ「え？」

ユインシス「君達の命だけは守るように、俺達も行動していたんだ。」

アイズ「…。」

サイガ「何かしとつたんか？」

ユインシス「…これに見覚えはないかな？」

天満「……これは！剣斗が持ってた…！」

シャウト「『湧練丸』…やはりユエが関係してたのか。これはユエの作った物だと、昔デイクが言ってたからな。」

ユインシス「その通りさ。」

天満「そうか…邪霊の自爆から剣斗を助けてくれて、その『湧練丸』を渡したのは…。」

？「そう、僕です。」

皆「…！」

？「僕は『ユナイマ』です。」

天満「え…僕？…ユ…ユインシス？」

ユナイマ「ふふ…今は僕の中にいますよ。」

天満「ええっ！」

ゼロの心「二重人格？それとも、二人の人物が、一つの体を共有しているのか…。」

ユナイマ「ふふ…。」

アイズ「な、何か、かつての天満と地門のようだな…。」

天満「う、うん…。」

ゼロ「さて、ユエさん。」

ユエ「…ゼロ。」

ゼロ「あなたの計画通り、皆さん『フォンス』を覚醒させることが出来ました。」

サイガ「計画通りやって！」

ゼロ「ええ、ユエさんは、『叢雲』を僕達に仕向け、皆さんを強制的に戦わせ、『エリア』を使えるようにしたんです。違いますか、ユエさん？」

ユエ「…やり方には是非があるだろうがな。」

アイズ「当然だ！」

ユエ「だが、それしか方法は無かった。悠長に『エリア』の使用を指導している時間が無かったのだな。」

サリーオ「ユエ…。」

真雪「あ、ジウさんが、ユエさんの策に乗ってやると言ったのは！」

ジウ「ああ、天満を成長させるために、オレは見守っていたというわけだ。ユエの望み通りでもあったがな。」

ユエ「『流星』、あなたなら、全てに気付いていると思った。」

ジウ「ふ…。」

天満「ユエ、これが今の全てか？」

ユエ「…ああ、そうだ。」

天満「…なら聞く。」

ユエ「…。」

天満「お前の答えは！」

ユエ「お前と同じさ。」

天満「…………互いにしんどいな…。」

ユエ「そうだな…。」

真雪「天くん？」

ジウ「…。」

天満「なら、俺も迷わない！自分の信じた道を歩く！」

ユエ「ああ、互いにな。」

ジウ「それで？」

ユエ「ん？」

ジウ「今の話を信じるにたる証拠はあるのか？」

ユエ「…。」

天満「ジウさん。」

ジウ「小僧は納得しているみたいだが、他の者はお前のしてきたことを善とし、素直に受け止めることが出来るか？」

ユエ「善か……分かっている。私が行ってきた所業、決して善ではないだろう……皆、私について来てもらいたい。見せたいものがある。」

皆「…。」

ゼロ「皆さんの懸念は分かります。だから確かめましょう。自分達の目で見て。」

アイズ「ああ。」

サイガ「せやな。」

サリーオ「仕方ないな。」

シャウト「行けば分かるのだな。」

真雪「天くん。」

天満「大丈夫。ユエはディークと……俺と同じ意思だよ。」

にゅう「行くにゅー！真雪も行くにゅー！」

真雪「う、うん。」

ユエ「では行こう。」

（ユエについていく）

ユエ「ここは『天核』、見てもらいたいのには『コレ』だよ。」

次回に続く

## 第二十二劇『無影』

天満「『コレ』は！」

ユエ「そう…『黙示録』だ。」

サイガ「『本』…やんな…コレ…。でかいなあ…。」

アイズ「こんな大きなものだったのか…。」

ユエ「コレが私とユインシスとユナイマの『エリア』を結集させた『力』なのだよ。」

シャウト「だが、どうやって未来を刻むというんだ？」

ユエ「私の『エリア』でだよ。見てなさい。『レベル3』……『モク黙  
シンゲツ新月』…。」

天満「…『玉』？その『玉』がユエの『レベル3』なのか…。」

ユエ「ああ、私の『想い』を凝縮し、形と成したモノだ。」

アイズ「それをどうするんだ？」

ユエ「簡単だ、例えばこの白紙のページ…この『黙新月』を近付けると…。」

サイガ「めり込んだで！」

真雪「…あ、字が浮き出てきましたよ！」

シャウト「『刃持つ者、苦難に追いつめられ、聖なる獣と愛の証を交す』？」

天満「どういう事だい？」

ユエ「すぐ分かる。」

サイガ「一体どういう意味なんや？」

アイズ「さあな……ん？サイガ、肩に何をつけてる？」

サイガ「あ？肩？」

アイズ「コレは…『クモ』だな。」

サイガ「な、なななななんやて…？」

アイズ「いや、だから肩にクモが…ほら。」

サイガ「ひやああああー！ー！ー！ーっ！」

アイズ「え？」

天満「サイ…ガ？」

ゼロ「ああ、そういえばサイガさんて、クモがお嫌いでしたねえ。ネオス様の所にいた時も、一度ありましたっけね、クモ騒ぎが。」

サイガ「ちょ、ちょ、ちょちょちょ、近づけんといてえっ！」

アイズ「サイガ…お前…。」

シャウト「いい大人がクモごときで何を。」

サイガ「し、仕方あらへんやんかつ！そないな気持ち悪いもん、好きな奴おらへんよおっ！」

アイズ「馬鹿馬鹿しい。ん……あれ？クモがない。」

サイガ「へ？ちょ、何逃がしてんねん！」

（その時サイガの目の前にクモが上から現れる）

サイガ「にゃ……にゃんでは…。」

（サイガの顔にクモがつく）

サイガ「にゃああああー……っ！」

にゅう「サイガ、カツコ悪いにゅー！にゅー！にゅー！にゅー！にゅー！」

アイズ「おい、こんな狭い所で走り回ると。」

サイガ「んなこと言つてんと、ぶっっ！」

アイズ「言わんこつちやない。壁にぶつかって倒れるなんてギャグ、ベタ過ぎてそうそうウケるもんじゃないぞ。」

サイガ「ち…違う……わ…。」

にゆう「にゅ〜！面白いにゅ〜！」

真雪「にゅう、危ない！」

にゆう「にゅ？」

サイガ「ほへ？」

にゆう「…。」

サイガ「…。」

にゆう「……。」

サイガ「……。」

天満「に、にゅう…。」

アイズ「サ、サイガ…。」

真雪「…。」

ゼロ「おやおや。」

シャウト「はあ…。」

サリーオ「ユエ、アンタね…。」

ユエ「ふふ。」

にゅうとサイガ「んーーーーっ！」

にゅうとサイガ「ぷはっ！」

サイガ「な、な、何でお前ここにいんねんっ！」

にゅう「にゅ……にゅ……にゅ~~~~~！真雪~~~~~！」

真雪「はいはい、よしよし、怖かったねえ。」

にゅう「汚されたにゅーーーーっ！」

サイガ「よ、汚され……わざとやないやろっ！せやんな、アイズ！」

皆「…。」

サイガ「ちょ、ちょ待てや！何かワイだけが悪者みたいやんか！」

アイズ「はあ……成程な、これがユエの『力』か？」

ユエ「ふ…。」

天満「そうか、さっきの！」

シャウト「『刃持つ者』がサイガのことで、『聖なる獣』というのは、にゆうのことだったのだな。」

天満「『苦難に追いつめられる』は…クモだよね……じゃあ、『愛の証』というのは…。」

シャウト「う、うむ…。」

アイズ「口づけということか。」

サイガ「ちょ待てや！ほんなら何か？ワイは、単なる実験体やったんか？」

ユエ「すまないな。この中では、君が一番動かしやすそうだったのだな。皆に口で説明するより、見てもらった方がいいと思ったのである。」

にゆう「にゆうはとばっちりにゆ～～～～！」

サイガ「ちゃうわ！一番割りに合わんのはワイや！」

天満「まあまあ、落ち着いてサイガ。」

サイガ「落ち着けるかいっ！」

天満「おいしかったよ。」

サイガ「へ？………ほんま？」

天満「うんうん。笑いの神様が見えたよ。」

サイガ「……まあ、あれや、ワイは心の広い男や！許したろ！」

天満「さすがはサイガ！いよ、男前！」

サイガ「なはは、もつと言つてえ！」

アイズ「天満の奴、だんだんサイガの扱いが上手くなってきたな。」

にゆう「にゆうは納得いかないにゅゅ！にゅゅゅ！」

天満「あはは……あ、そうだ、コレあげるから泣くな、にゆう。」

にゆう「にゅ？」

天満「食べてみなよ。」

にゆう「にゅ……にゅっ！にゅゅゅ！美味しいにゅゅ！」

天満「ほら、もう一個あげるから、機嫌直してくれな？」

にゆう「にゅゅゅ！天満大好きにゅゅ！」

天満「あは！良かった！」

真雪「天くん、何をあげたの？」

天満「ん？飴だよ飴。イチゴ味のね。」

真雪「そんなもの持ってきてたの！天くん、甘いもの嫌いなのに、

飴は好きなんだもんねえ。」

にゅう「にゅ、にゅ、にゅ、美味しいにゅ〜！」

シャウト「ユエ、お前の『力』…。」

ユエ「そう、未来を創ることが出来るのだよ。ただし、より大きな未来を創り変えることは難しいがな。」

アイズ「しょうもない未来は、簡単に創れるということか。」

サイガ「しょうもないで…。」

シャウト「こつやって、まずは小さな未来を自分の思い通りに創っていき、『力』を少しずつ大きくしていったのか。巨大な未来を創るために。」

ユエ「ああ、そうだ。」

天満「…ユエ。」

ユエ「…君達に見せたいモノは、もう一つある。」

アイズ「何だ？」

ユエ「未来さ。」

ゼロ「『地球』破滅の未来…ですね？」

ユエ「…最後のページに書かれてある。見てくれ。」

皆「……………」

ゼロ「どうやら、本当だったようですね…。」

天満「『全ての輝きは削られていき、ただ黒い銀河が誕生する。有るものは無に帰り、残るは終焉という言葉のみである。』……………全ての…終わり…。」

ユエ「この未来を変えるために、私は君達を利用させてもらった。決して褒められたやり方ではないが、もはや時間も無いのでな。」

天満「……………そうだな。」

真雪「天くん？」

ジウ「……………ユエ。」

ユエ「何かな？」

ジウ「この未来は、お前の『力』で変えられないのか？」

ユエ「……………ああ、何度も……………何度も何度も試した。だが、生命の死に関わる未来を変えることは……………まだ私の『力』では厳しいらしいんだ。」

サリーオ「じ、じゃあ、キイルの事では…。」

ユエ「……………これを見てくれ。」

サリーオ「…………『病に伏せし者、救いの手により再び立ち上がるが、死神を追い払う事は出来ない。最期は望むものを、望む者のもとに贈り、優しく眠る。』…………キイル…。」

ユエ「一度は確かに、私の『力』で変えることが出来た。最初のキイルの未来は…ただ一言だけだった…『病に勝てず、死を否定出来ない。』だった。」

サリーオ「じ、じゃあこの『黙示録』は…。」

ユエ「私が創った、キイルの、もう一つの死の形…。」

サリーオ「ユエ…。」

ユエ「私は…キイルにただの死という形を与えられなかった。同じ死でも、キイルが本当に望む死を、与えてやりたかった。どうせ死ぬ運命が変えられないなら、少しでも、いい運命として、キイルを…ただ病に苦しむ死ではなく、優しい死を…。」

サリーオ「…。」

ユエ「あの子の…キイルの望む死の形を…大好きな姉の腕の中で、死なせてやりたかったのだ。」

サリーオ「ユエ…………悪かったよ。」

ユエ「サリーオ…。」

サリーオ「アンタのお陰で、キイルは一度死の淵から帰って来れたのに……。アタシはアンタを恨んだ…。」

ユエ「仕方がない。結局…サリーオの役に立つ事が出来なかったのだからな。」

サリーオ「そんなことはない。アンタのお陰で、アタシはいろんな『力』を与えてもらった。ここに…いや、天満達に会うまでは、本当の自分の『力』を自覚してなかったが、この子達に会って、『力』は何のためにあるのか、未来は変えられないのか…。その全てに答えを出せた気がするんだ。」

天満「サリーオさん…。」

サリーオ「キイルの死にずっと囚われてて、未来を見ることが出来なかった。だけど、キイルが教えてくれた。嫌な運命なら、変えればいいって。あがいて、もがいて、必死で動けば、何かが変わるんだ。そう、教えてくれたはずなのに…。分かってなかったみたいだな。」

ユエ「キイルは…。キイルは笑っていたか？」

サリーオ「アタシの気も知らず笑っていたよ。真っ直ぐ見るのが辛くなるほど、眩しい笑顔だったよ。」

ユエ「そうか…。サリーオ…すまなかった。」

サリーオ「アタシの方もな…悪かった。…ありがとう。」

ゼロ「どうやら、サリーオさんとユエさんは、和解出来たみたいですね。」

天満「そうみたいだ。」

シャウト「しかし、この未来がまだここに書かれているということ  
は。」

アイズ「ああ、必ず現実になる。サイガのしょうもない未来のよう  
に。」

サイガ「しょうもない言うなあっ！」

シャウト「どうすればいいんだ？」

ユエ「大丈夫だ。」

シャウト「大丈夫だと？」

ユエ「そのために…この未来を変えるために、君達に来てもらった  
のだ。」

アイズ「それで、僕達を来させて、何をさせようっていうんだ？」

ユエ「先程も言ったが、この未来を起こす者がいる。そいつを討た  
ない限り、この未来は現実になってしまう。」

シャウト「ああ、確か…。」

天満「『アイオーン』…。」

ユエ「…『アイオーン』について話そう。ユインシス、頼む。」

ユインシス「分かった。絶対的な『無』の存在、『黒の波紋』より生まれし『負の塊』、そいつが『アイオーン』だ。」

（遙か銀河の彼方）

？「ふふ…近々だな。ふむ…ん？」

（黒い卵から、何かが生まれた）

？「…名は？」

？「……『ベルクカイザー』…。」

？「ほう…む？他の二つも生まれるか…。」

（同じく黒い卵から何かが生まれた）

？「右から名乗るがよい。」

？「……『リムキュラア』…。」

？「ふむ、して…主は？」

？「…。」

？「どうした？緊張でもしておるのか？」

？「……『アポカリユウス』…。」

？「良い名だ。では主ら『無の破片』に、ふさわしい称号を授けよう。『戦帝』<sup>センテイ</sup>、『蒼聖』<sup>ソウセイ</sup>、『最翁』<sup>サイオウ</sup>…。どうだ？主らに似合いの称号であろう。」

ベルクカイザー「『戦帝』…。」

リムキュラア「『蒼聖』…。」

アポカリユウス「……。」

？「さて、余のために働いてもらうぞ。」

三人「…。」

アイオン「『地球』を探せ。」

（天満達は）

ユインシス「『アイオン』は、もうすぐ現れる。『地球』の輝きを消すためにな。」

アイズ「そいつの目的は何なんだ？」

ユインシス「『無』…だ。」

アイズ「『無』？」

ユインシス「ああ、奴は全てを『無』に帰すと言った。」

アイズ「言った？お前は『アイオーン』と会ったのか？」

ユインシス「…そうだな…では奴が生まれた日のことを話そうか。といっても、知っていることは限られているけどな。」

天満「話してくれ。」

ユインシス「分かった。」

次回に続く

## 第二十三劇『悪誕』

ユインシス「では話そう。我が『時の国』で生まれた『悪魔』のこ  
とを。」

（ユインシスの過去）

ユインシス「最近の現状、どう思う『アリス』？」

アリス「よくありません……。『黒の波紋』の影響が『時の国』にも  
……。」

ユインシス「そうか……。ユエの遺した文献に載っていた『黒の波紋』  
……。文献によると、その『黒の波紋』の『源』が『地球』を滅ぼし  
たと。」

アリス「ユエ様にも、その『源』が何か、お分かりにならなかった  
のですね。」

ユインシス「ああ、分かっていることは、『源』の絶対的な『負の  
力』、そして、全てを覆う『暗い恐怖』。それらが『地球』を覆い、  
一瞬で『地球』を消滅させたことだけだ。」

アリス「何故ユエ様は、お気付きにならなかったのでしょうか？」

ユインシス「気付かなかったわけではないだろうな。ただ気付いて  
も、何も出来なかったんだろう。それほど『源の力』は絶望的なも

のだったんだろう。それに…。」

アリス「『地球』と連絡もままならなかったのですね。」

ユインシス「ああ、だからユエは決めた。たとえ自分の『力』で、『源』を破壊出来なくても、未来に…望みを託そうと。」

アリス「はい…。」

ユインシス「それにユエには時間が無かったからな。自分の残された時間の全てを、ただ『源』を討つために…。」

アリス「我々をお創りになられたのですね。」

ユインシス「……だが、俺達に何が出来るとだろう。」

アリス「お兄様…。」

？「ユインシス様！」

ユインシス「ん？」

？「大変です！」

ユインシス「どうした『クロノ』？」

クロノ「上空に『黒の波紋』が！」

ユインシス「何っ！」

(三人は部屋から出る)

ユインシス「あれは！くっ、ユエが創った『結界』を突き破ったのか！」

アリス「そんな…今まで、しっかり『黒の波紋』の侵入を防いでいましたのに！」

クロノ「どうやら、『結界』の最も薄い部分に、集中的に集まっているみたいなんです！」

ユインシス「馬鹿なっ！アレはただの『負の塊』だぞ！そんなこと出来るはずが！」

アリス「まさか…あの『黒の波紋』には知性があるというのですか？」

ユインシス「生きているというのか？」

クロノ「分かりません。ですが、今『時の国』が危うい時なのは確かです！」

ユインシスの心「くっ……どうすればいい……『ユナイマ』…。」

アリス「どんどん流れて…。どうすればよろしいんでしょうか…。」

？「切り離しましょう。」

アリス「…『ユナイマ』？」

ユナイマ「今、『黒の波紋』が流れているのは、北の方です。ですから、あの上空から北までを全て放棄し、ここから切り離しましょう。」

クロノ「ですが、北には『時計塔』が！」

ユナイマ「仕方ありません。ユインシスと二人で決めました。このままでは、『時の国』全てが、『黒の波紋』に飲み込まれます。そうなる前に！」

クロノ「わ、分かりました！では！」

アリス「……よろしかったのですか？」

ユナイマ「…仕方ありません。それに完全に放棄するわけではありません。時期をみて繋ぎ合わせます。最も…それを『黒の波紋』が許してくれたらですけど。ふう……切り離して、すぐに『結界』をかけ直す必要があります。」

アリス「それなら大丈夫です。ユエ様の『結界』は自然に防御壁として、包んで下さいますから。」

ユインシス「……よし、切り離し成功のようだな。」

アリス「お兄様…はい…。」

クロノ「ユインシス様！」

ユインシス「ああ、ありがとうクロノ。しかし厄介だよ。」

クロノ「はい…。」

ユインシス「切り離れた部分が、『黒の波紋』に覆われていく…。」

アリス「ですが、本当に『黒の波紋』が知性を持っているのだとしたら…。」

ユインシス「…ああ、ここも、いずれは侵されてしまう。」

アリス「どうすればよいのでしょうか？」

ユインシス「…。」

クロノ「…あの、ユインシス様。」

ユインシス「どうした？」

クロノ「『ラビ』の『力』なら…あるいは。」

ユインシス「…俺もそれは考えたさ。だけどな…あの子の体がつまつかどうか。」

クロノ「しかし…もうそれしか。それに、何も『ラビ』一人に任せるわけじゃありません。ボク達『時人』全ての『力』を合わせれば、きっと出来るはずですよ！」

アリス「クロノ…。」

ユインシス「…分かったよ。『ラビ』に話してみよう。」

クロノ「はい！』『トト』、頼むね。」

トト「はいですよ！』『ラビ』を呼んで来ますですよ！」

（トトが『ラビ』を連れて来る）

ラビ「お話は分かりました。」

ユインシス「頼めるかな？」

ラビ「もちろんです。僕達『時人形』は、この『時の国』が大好きです。ですから、それを奪おうとする輩は許せません。」

アリス「ですが、貴方には、とても辛いことになりますよ？」

ラビ「僕なんかの心配をありがとうございますアリス様。ですが、これは僕にしかできません。いえ、是非やらせて下さい。」

アリス「ラビ…。」

ユインシス「感謝するよ、ラビ。」

ラビ「もったいないお言葉です。では早速準備にかかります！」

ユインシス「ありがとう。クロノ、皆を『結界』の中心へ集めてほしい。」

クロノ「かしこまりました。トト！」

トト「ですの！」

（『時人』全てが集まる）

ユインシス「では頼んだよ、ラビ。」

ラビ「はい！はあああ………。」

アリス「お兄様、アレを！」

ユインシス「ん？何っ！『結界』を突き破って『黒の波紋』が！」

クロノ「ラビ……。」

ラビ「我が『力』よ、悪しきものを滅する、大いなる護りになれっ！はあっ！」

ユインシス「駄目だ！護りが薄い！『黒の波紋』の侵入を防げない！」

ラビ「皆さん、僕に『力』を！ありったけの『力』を僕に注いで下さい！」

ユインシス「皆、全てをラビにつ！」

時人達「おう！」

ラビ「ぐっ…か…体が…っ！」

クロノ「頑張ろう、ラビ！」

トト「ですよー！」

ラビ「クロノ！トト！」

クロノ「皆がついてるー！」

トト「ついてますですよー！」

ラビ「う…うん…はあああー！閉じろおおおー！  
ーっ！」

ユインシス「や、やった…か…。」

アリス「そのよう…ですわ。」

クロノ「ふう…やったね、ラビ。」

トト「お疲れ様ですよー！」

ラビ「はあはあはあ…皆のお陰だよ。」

時人「『黒の波紋』が変だぞ！」

クロノ「え？」

トト「切り離れた『時計塔』の方に向かって行きますですよ！」

ユインシス「…どういうことだ？『黒の波紋』が『時計塔』を包んでいく…。」

クロノ「まさか！ユインシス様！」

ユインシス「そんなはずはない！『アレ』を『黒の波紋』が認識出来るはずが！」

アリス「『黒の波紋』が全て、『時計塔』の中に！」

ユインシス「本当に生きているというのか…まさか！『黒の波紋』は最初から『アレ』を狙って！」

クロノ「マズイです！ユインシス様！」

ユインシス「『時の核心』を取り込むつもりか！」

アリス「『時』を自在に動かすことの出来る『時の核心』…。何故『黒の波紋』が？」

ユインシス「嫌な予感がする！皆を避難させてくれ、クロノ！」

クロノ「わ、分かりました！さあ、ラビ！」

ラビ「う、うん。」

（その時、一筋の黒い線が走った）

ユインシス「何だ今のは！『結界』を破って…！」

クロノ「ラビィッ！」

ラビ「う…く…。」

ユインシス「ラビ！どうした！」

クロノ「黒い線がラビを貫いて…。」

ユインシス「何だって！」

？「フフ…当たったのは誰だ？」

ユインシス「な、誰…だ？」

？「答えよ。当たったのは誰だ？」

クロノ「貴様あつ！」

？「余は答えよと言った！」

ユインシス「近付くな、クロノ！」

クロノ「え？ぐはあつ！」

？「フフ…。」

クロノ「く…くそ…。」

？「余と戯りたいのか？それもよからう…。」

クロノ「よ、よくもラビを！」

？「ラビ？そうか、当たったのはラビという者か。」

クロノ「てやあああつ！な、何っ！」

？「どうした？もう終わりか？」

クロノ「こ、これは『黒の波紋』！自由に操れるのか！コイツ！」

？「コイツ？口の聞き方には注意せよ。」

クロノ「黙れ！クソ野郎！」

？「……消えるがよい。」

クロノ「ぐはあっ！ば…かな…。」

トト「ご主人様！」

？「ハハ、何という脆い生物か。」

ユインシス「クロノ！アリス、クロノを！」

アリス「はい！」

ユインシス「一体何者だ！」

？「理解に欠けた生物だな。まだ理解できぬか？」

ユインシス「ま、まさか！」

？「そう、余は主らが言う『黒の波紋』なり。」

ユインシス「そ、そうか…『時の核心』を取り込んで、姿を得たのか！」

？「分かっておるではないか。だが、『時の核心』とやらは面白い『力』を持つておるのう。取り込んで正解というところか。」

ユインシス「くっ！」

？「余は今気分がよい。この姿、そしてこの『力』。」

ユインシス「キサマの目的は何だ！」

？「奪うことだ。」

ユインシス「奪う？何をだ！」

？「『光』をだ。先ずは手始めに『銀河の光』を奪う。」

ユインシス「何だって！」

？「余が存在する空間に忌々しい『光』など不必要。美しいもの、

輝きあるもの、全てが煩わしい。余が全てを『無』のままに…消し  
さるのだ。」

ユインシス「そんなことをさせるか!」

?「しかし、ここは居心地が悪いな。弱々しいが、『光』に満ちて  
おる。」

ユインシスの心「ちよつと待てよ……『地球』は『黒の波紋』の『  
源』に消滅させられた…。しかも、その存在をユエは感知すること  
が出来なかった。……じ、じゃあまさかコイツ!」

?「ん?余の顔がそんなに珍しいか?」

ユインシス「キサマが『地球』を!」

?「何を言っておる?『地球』?」

ユインシス「キサマはここで始末する!」

?「言葉に気を付けよ。でなければ…。」

ユインシス「過去になど行かせるか!」

?「過去?何を訳の分からぬことを。しかし…フフ。」

ユインシス「何がおかしい!」

?「余にとって過去も未来もないわ。」

ユインシス「何っ！」

？「白は黒に、『光』は『闇』に、全ての明るさは暗さに包まれ…  
最後には『無』が全てを支配する。」

ユインシス「…。」

？「か弱き愚者どもよ、聞くがよい。余こそは、『虚無の根源』に  
して、『暗黒の時』を支配する者、余は『アイオーン』なり！」

ユインシス「アイオーン…。」

アイオーン「もう思い残すものは無いであろう。余の名を耳に入れる  
ことが出来たのだからな。」

ユインシス「ふざけるなっ！」

アイオーン「余の手にかかることを、幸福とせよ。」

ユインシス「『地球』は…『地球』はやらせない！たとえ未来を  
変えることになるうと、キサマはここで俺が始末する！」

アイオーン「ふむ…先程から言う『地球』……それに未来を変える  
？……………気が変わった。」

ユインシス「何？」

アイオーン「主の頭の中を覗かせよ。我が『破片』よ…。」

ユインシス「な、何っ！ぐわああっ！」

アリス「お兄様っ！」

ユインシス「ぐわああっ……………うっく。」

アイオン「ふむ……………成程…『地球』か……………実に不愉快な星だ。」

ユインシス「く…くそ…。」

アイオン「ここが先程の『地球』とやらの一部か。通りで不愉快な『光』を放つわけだ。それにしても……………ククク。」

アリス「大丈夫ですか、お兄様！」

ユインシス「くそ…。」

アイオン「滅ぼしてやるわ。」

ユインシス「何っ！」

アイオン「この『時の力』を使い、過去に行き、忌々しい『地球』とやらを滅ぼしてやると言ったのだ。主の頭の中にある、過去を再現してやるわ。」

ユインシス「そんなことをさせるか！」

アイオン「安心せよ。もちろん、最初の獲物は…ここだ。」

次回に続く



## 第二十四劇『無源』

ユインシス「この『時の国』も『地球』も、キサマの好きにはさせない！」

アイオーン「分をわきまえよ。所詮はたかがちつばけな『光』。余の前では、羽虫も同然だ。いや…羽虫より劣るわ。」

ユインシス「くっ！」

アイオーン「では…奪わせてもらおう、主らの全てを。」

？「させない…。」

アイオーン「ん？」

アリス「『クロノ』！」

クロノ「貴様は…ここで止める！」

アイオーン「小僧、分をわきまえよと言っただけだ。」

クロノ「貴様こそわきまえろ！」

アイオーン「何？」

クロノ「『時の核心』のお陰で姿を得た貴様は、言わばボク達と同じ『時人』だ！だったら『時』の大切さが理解出来るだろ！」

アイオン「お陰？フフ…アハハ！」

クロノ「何がおかしい！」

アイオン「主の言い方だと、まるで余が『時の核心』に頼ったみたいではないか。」

クロノ「そうだろ！『時の核心』がなければ、貴様など、ただ銀河を漂う黒い霧だ！」

アイオン「自惚れるなよ羽虫。」

クロノ「な！」

アイオン「一つ教えておいてやる。余は『時の核心』に頼ったのではない。利用したに過ぎん。」

クロノ「利用だと？」

アイオン「主らも気付いておろう。この黒い霧…主らが『黒の波紋』と呼ぶこれが、意思を持っていると。」

クロノ「…。」

アイオン「この霧は、時間をかけることで、形を成すことが出来るのだ。まあ、かなりの時間を要するがな。」

クロノ「何だつて！」

ユインシス「そうか、だから『時の核心』を狙ったのか！」

アイオーン「そうだ。主らが『黒の波紋』と呼ぶこの霧、正式な名称は『無源塵<sup>ムゲンジン</sup>』、余の『力』の全てだ。そして、この『無源塵』を圧縮して姿を得たのが、今主らが目にしている余だ。」

ユインシス「時間を短縮するために、『時の核心』を利用したのか……。」

アイオーン「羽虫、主は言ったな、『時』は大切だと。」

クロノ「だ、だったら何だ？」

アイオーン「主が言うとおり、『時』は大切だ。」

クロノ「……。」

アイオーン「だから余が大切に扱ってやろう、『暗黒の時』をな。」

クロノ「な！」

アイオーン「永遠の『無』の時間を捧げてやろうではないか。光栄に思うがよい。」

ユインシス「腐りきった奴め！」

アイオーン「では消えるがよい。弱々しい『光』よ、我が糧となれ！」

クロノ「くそ、どうすれば！」

？「うわあああっ！」

アイオン「ん？何！」

クロノ「『ラビ』！」

ラビ「今だよトト、『時空の門』を開いて！」

クロノ「ラビ、無事だったのか！」

ラビ「そんなことよりクロノ、奴を『時空の彼方』に飛ばす！『力』を貸して！」

クロノ「わ、分かった！トト！」

トト「ですよ！」

アイオン「何をするつもりか分からぬが、余に通じるとでも思っておるのか？」

ラビ「へへ、ただの霧だったお前なら無理だったよ。」

アイオン「何？」

ラビ「だけど、今のお前なら、『時の核心』を取り込んだお前なら、可能なんだ！」

アイオン「何をする気か？」

ラビ「見てれば分かるよ。」

アイオン「黙って見ていても思っておるのか？『破片』よ…。」

ラビ「思ってないさ、だから！」

アイオン「ぬ？『破片』が消える？……何をした？」

ラビ「『隔離』したのさ。それが僕の『力』なんでね。」

アイオン「『隔離』…だと？」

ラビ「空間を歪めて、物質を『隔離』することが出来るんだよ。『黒の波紋』も例外じゃない！」

アイオン「ほう…羽虫の割に、なかなかよい能力を持っておる。」

ラビ「トト…！」

トト「『東の塔』…『西の塔』…『南の塔』…『力』を貸して下さいですの…。」

アイオン「何だこの『光』は！か、体が焼けるようだ！」

ラビ「へへ。」

アイオン「何だ、何をしたあ！」

ラビ「言っただろ？『時の核心』を取り込んだお前なら可能だって。」

アイオン「まさかこの『光』は！」

ラビ「そのまさかさ。教えてあげるよ。お前が取り込んだ『北の塔』の『時の核心』は、『東』、『西』、『南』のそれぞれの塔にある『羅針盤』を起動させると、『ある事』が起きる。」

アイオン「『ある事』？」

ラビ「『時空の扉』が開くんだよ。」

アイオン「…。」

ラビ「そして、その『扉』が開く所はどこだと思っ？」

アイオン「ま、まさか…。」

ラビ「『時の核心』さ。言っただろ！『時の核心』を取り込んだお前なら可能なんだよ！お前を討てなくても、『時空の彼方』に飛ばすことはね！」

アイオン「さ、させるものかあっ！」

ラビ「その姿を得た時点で、『時の核心』を放棄するべきだったね。」

アイオン「くっ！『扉』を開こうとしているのはアイツか！『破片』よ、奴を殺せっ！」

トト「あ！」

ラビ「へ…。」

アイオーン「何だと…。」

ラビ「させないよ。今だよトト、開くんだ!」

トト「ですよ!」

アイオーン「お、おのれえっ!くっ……覚えておれ!必ず、必ず滅ぼしてやるぞ!キサマらの国も『地球』もな!余の『力』はまだ完全ではない!完全なものになった時に必ずな!アーツハツハツハツハツ……。」

ラビ「ふう…。」

トト「やりましたですよ!」

クロノ「うん!」

ユインシス「アリス、大丈夫か?」

アリス「はい、アイオーンを退けたのですね。」

ユインシス「ああ、だが…。」

ラビ「アイオーン…。」

クロノ「二人ともよくやったよ!」

トト「ですのー！」

ラビ「……。」「

クロノ「どうしたんだい、ラビ？」「

ラビ「……。」「

クロノ「ラビ、体が！ユインシス様、ラビが！」

ユインシス「どうした！……ラビ！」

アリス「どうして？」「

ラビ「アイオーンは危険だよ、本当に……。」

ユインシス「まさか……あの『破片』を？」

ラビ「……全てを『隔離』出来ませんでした。少し、体に……。」

ユインシス「アリス、何とかならないのか？」

アリス「……。」「

ユインシス「『ユナイマ』、何か無いか？」

ユナイマ「……すみません。」「

ラビ「このままじゃ、いずれ自我を失ってしまいます。ですから……。」

ユインシス「ですから…何だ？」

ラビ「僕は消えます。」

クロノ「そんな！」

トト「嫌ですよ！そんなの嫌ですよ！」

ラビ「あの『結界』も完全じゃありません。ですから、僕の『力』の全てで、『黒の波紋』を完全に『隔離』します。」

ユインシス「ラビ…。」

クロノ「何とかならないのかい！」

ラビ「もう…体の半分が侵されてきているんだよクロノ。だから…やらせて、お願い。」

クロノ「そんな…。」

ラビ「僕はこの大好きな『時の国』の護りとして、永遠に生き続ける。死ぬわけじゃない。」

ユインシス「ラビ…。」

ラビ「ユインシス様、アリス様、ユナイマ様、クロノ、トト、言葉を交せるのもこれが最後です。ですから最後に…最後に一つ、僕の願いを聞いて下さい。」

ユインシス「…何だい？」

ラビ「アイオーンを……アイオーンを討って下さい。無茶かもしれませんが…」

ユインシス「命を懸けて…。」

ラビ「え？」

ユインシス「命を懸けて、お前の願いを叶えてみせるよ。」

ラビ「ユインシス様……ありがとうございます。」

クロノ「ラビ…。」

ラビ「アリス様、勝手に命を捨ててすみません。せつかく下さった命なのに。ですが……今はこれが正しい気がします。」

アリス「ラビ…。」

ラビ「ユナイマ様、どうか皆を…『時人形』達を、よろしく願います。」

ユナイマ「…任せておきなさい。」

ラビ「クロノ、トト、今まで遊んでくれてありがとうございます。すごく楽しかった！」

クロノ「…ボクもだよ…ラビ。」

トト「ですの…。」

ラビ「へへ、やっぱりここは最高だね！僕の想いは、『護りの力』として…。」

クロノ「ラビ…君の想いはボク達が必ず…。」

トト「見守って下さいですの…。」

アリス「ラビ…ありがとう。」

ユインシス「ラビ…お前が大好きなものの全て、護ってみせる。」

ユナイマ「やることは一つ、ですね。」

（現代へ）

ユインシス「これがアイオーンだ。」

皆「…。」

ユインシス「それから俺は『エリア』を使うようになり、何をすればいいのか、何が出来たのかを探した。」

シャウト「それでユエとの未来を知り、過去に行き、アイオーンを倒すことにしたんだな。」

ユインシス「まあ、未来が見えようと見えまいと、俺は過去に行く

つもりだったけどな。たとえ禁じられた行為だとしても。」

天満「でも、誰が禁じたのかな？」

ユインシス「ユエだよ。」

ユエ「…。」

ユインシス「過去に行き、変えるということは未来を変えということ。もしかしたら…。」

アイズ「『時の国』の存在が危うくなるということだな。」

サイガ「せやな…だからユエは禁止したんか。」

ユインシス「こんな方法を使わず、『時の国』だけでアイオーンを討って欲しかったんだよユエは。」

真雪「もしかして、『時の核心』はユエさんが？」

ユインシス「そうだ、『時の核心』だけではなく、俺達『時人』も創造した。命を…投げてな…。」

真雪「命を投げ…。」

天満「…。」

ユインシス「ユエには…。」

ユエ「ユインシス。」

ユインシス「ユエ…。」

ユエ「ここから先は、私に話させてほしい。」

ユインシス「…分かった。」

ユエ「ありがとう。……私には残された時間が少ない。だから自らの意思を伝えたかったのだろうな。己れの命を捨て、全ては未来のために。」

アイズ「時間が無いってどういうことだ？」

ユエ「……。」

アイズ「ユエ？」

ユエ「…それ。」

天満「それは俺のせいなんだ。」

皆「!」

真雪「天くん？」

ゼロ「どういうことですか？」

天満「……本当なら俺は…。」

ユエ「ディーノ。」

天満「え？」

ユエ「お前は関係ない。デイクと私で決めたことだ。だからお前が気にするんじゃない。」

天満「ユエ…。」

アイズ「どういうことだ天満？」

天満「…それは…。」

ジウ「今はそんなことどうでもいいだろ。過去の疑問を解決しても、仕方ないぜ。そんなのは全てが終わってからやればいいだろ？」

アイズ「しかし…。」

サイガ「アイズ、待とうや。」

アイズ「サイガ。」

サイガ「無理に聞くもんやない。天満を信じてんねんやろ？真雪を見てみい。」

真雪「私は天くんを信じてますから。」

天満「真雪…。」

アイズ「…分かった。」

天満の心「真雪、ジウさん、サイガ、ありがとう。アイズ、ごめん……ごめん……みんな……」

ジウ「さて、これからどうするんだユエ。」

ユエ「『地球』を進化させる。」

ゼロ「三段階ですね。」

ユエ「アイオンに見つかるまで、もう時間が無い。皆の『力』を貸してほしい。」

天満「やろうユエ。」

真雪「天くんと一緒なら、何でも出来るよ。」

にゅう「頑張るにゅー！張り切るにゅー！」

アイズ「『オルテナ』を破壊させたりしない。」

サイガ「せや、フィアンとの思い出がある場所、無くしてたまるかい！」

サリオ「アタシも、ここで諦めたら、何のために再び顔を上げたのか分からない。」

シャウト「皆を守るために。私に出来ることをする。」

ゼロ「まだ死にたくありませんからね。」

ジウ「オレは死なんな。な。」

ユインシス「さあ、やるぞユエ。」

ユエ「ああ。」

次回に続く

## 第二十五劇『進時』

シャウト「だがユエよ、『地球』を進化させるといっても、具体的にはどうするんだ？」

ユエ「君達は『ハクウェル研究所』で見たはずだ。『フュージョニア計画』を。」

シャウト「ああ。」

ユエ「一段階は『<sup>アフソフ</sup>錬吸』、『地球』から可能な限り『錬』、すなわち『生命エネルギー』をこの『天球』に吸収させる。だがそのままでは、『天球』という器から『錬』が溢れだし暴走する。それで二段階『<sup>フルエリア</sup>最高領域』、『フォンス』を最大に覚醒させ、その『力』で『天球』を覆い、大量の『錬』を暴走させず留める。」

シャウト「で、ではまさか我々が戦った相手が急に倒れたのは…。」

？「コラアアアーッ！ユエッ、マジどこだ！」

ゼロ「おや？あの声は…。」

？「ここかつ！」

ユエ「やあ『フェイ』。」

フェイ「やあフェイじゃねえよ！マジどういふつもりだ！『イオキス』にマジ聞いたぞ！俺達の『レベル3』の『エリア』をマジお前が吸収したっていうのをな！マジ何で、んなことしやがった！でな

きや、マジもつ少しで、あのオッサンをマジやれたのに！」

シャウト「悪かったな、オッサンで。」

フェイ「な、てめえら！マジ何でここに？」

ゼロ「そんなことも分からないのですか？マジ馬鹿さん？」

フェイ「ゼエエロオオ！てめえまでいやがったのか！」

ゼロ「おや？先程からいましたよ。まさか頭だけでなく、とうとう目まで馬鹿になりましたか？」

フェイ「マ、マジ殺しちゃう！」

？「よせ…フェイ…。」

フェイ「『イオキス』…。」

イオキス「ユエさん…話して…くれますか…。」

ユエ「ああ、君達には申し訳ないことをした。全てを話そう。」

フェイ「おう、マジさっさと話しやがれ！」

ユエ「イオキス、『リアリイ』は？」

リアリイ「ここにいますよ。」

ユエ「リアリイ。」

リアリィ「話してよユエ。ユエのことだから、たぶん何か理由があったんだよね？」

ユエ「ああ…。先程言った通り、二段階は一段階による『鍊』の暴走を止めること、そして『鍊』を限りなく『天球』に凝縮させ留めることだった。」

フェイ「マジ何で、んなことする必要あったんだ？」

ゼロ「そうすれば、アイオーンから、『地球』を遠ざけることが出来たからですよ。」

フェイ「てめえにはマジ聞いてねえよ！」

ゼロ「これはこれは、どうもすみませんでした。」

フェイ「けっ！」

シャウト「アイオーンは『地球』が放つ『光』を探している。だからその『光』を抑え、アイオーンに気付かれないようにする訳があった。」

ユエ「そう、それが二段階だ。」

イオキス「ユエさん…それで…。」

ユエ「…単にフェイ達に『力』を発動してもらい、二段階を終えることも出来た。」

リアリィ「それなのにどうして？」

フェイ「そうだぜ！マジ何でだよぉ！」

ユエ「アイオーンを討つために、一人でも多くの戦士が必要だったのだよ。」

リアリィ「…そうか…だからなんだね。」

フェイ「え？マジどういうことだ？」

ゼロ「あなたは黙っていた方がいいですよ。これ以上馬鹿が明らかになる前に。」

フェイ「こ、こんにやろぉっ！」

イオキス「つまり…ユエさんは…我々と…サリーオ達を…戦わせ…相手の…『フォンス』覚醒を…促した…そういうこと…ですね…ユエさん…。」

ユエ「そうだ。『フォンス』を覚醒させるためには、『強い力』に触れ、『強い想い』を抱くこと。そのため君達には、彼らの『フォンス』覚醒を求め、動いてもらったのだ。」

フェイ「でもマジ何で教えてくれなかったんだ？別にマジ教えても良かったんじゃないの？俺達はマジ『天球』を救うために、お前についてんだぜ。」

ユエ「それは…。」

ユインシス「本気になってもらうためだ。」

フエイ「本気？」

ユインシス「ああ、この計画を言ってしまうと、お前達が本気で戦えないと思ったのだな。特にリアリイなんかは、優しいからね。」

リアリイ「いやん、照れるじゃん！」

フエイ「で、でもさあ…。」

ユエ「黙っていてすまなかったフエイ。許してくれ。本当にすまなかった。」

フエイ「……まあ、いいけどさ。」

ゼロ「ふふ、まるで子供ですね。」

フエイ「うるせえっ！だがマジでめえとだけは、いつか決着つけっからな！オッサン、てめえともだ！マジ覚えとけよ！」

シャウト「心しておこう。」

ゼロ「僕は覚えませんがね。」

フエイ「このやろ…人を散々なめやがってえ…。」

リアリイ「でも安心したあ。」

ユエ「ん？」

リアリィ「やっぱりユエはユエなんだもんね！」

ユエ「ああ、私は私だよ。」

シャウト「それでユエ、二段階は終わったのか？」

ユエ「ああ、我々『叢雲』の『レベル3』の『力』で、しばらくはな。」

シャウト「しばらくというのは？」

ユエ「いくら『フルエリア最高領域』で抑えたとしても、『地球』から吸収した『鍊』は膨大だ。そう長くは抑えてはおけない。」

シャウト「ではどうするんだ？」

ユエ「急ぎ二段階へ移行する。」

シャウト「三段階か。」

ユエ「ああ、三段階『オールムーン大満月』、『地球』と『天球』を融合させる。」

アイズ「どうやって融合なんてさせるつもりだ？」

ユエ「この『月』…つまり『天球』を少しずつ分解していき、『鍊』と融合させ、『地球』に戻していく。」

サイガ「ほんで、つまりは『地球』はどうなんねや？」

ユエ「『地球』そのものはさほど変わらない。変わるのは『地球』の外側だ。」

サイガ「外側？」

ユエ「『地球』を覆うのだよ。」

真雪「その…分解した『月』で…ですか？」

ユエ「そう、『天球の層』を構築する。」

ゼロ「『天球の層』…ですか？」

ユエ「ああ、名を『セイントヴァース』。『錬』を極限まで凝縮し、『地球』の外に『黒の波紋』を寄せつけない、『聖なる外壁』を構築する。」

ゼロ「しかし、聞くところによると、未来のあなたが創った結界すら、『黒の波紋』を防ぐに足らなかった。本当に、その『セイントヴァース』とやらは、大丈夫なんですか？」

フェイ「てめえゼロ、ユエをマジ信じてねえのかよ！」

ゼロ「あなたは黙っていて下さい。僕はユエさんにお聞きしているんです。」

フェイ「黙れだと！」

ユエ「フェイ…。」

フエイ「く……ちっ！」

ユエ「ゼロの懸念は分かる。だが、これが私の出来る全てだ。そう信じてきたからこそ、幾人もの者を利用し、こうして覚悟の結晶を創ることが出来たのだ。」

ゼロ「……いや、僕はただお聞きしたかっただけなんです。あなたの覚悟を。」

ユエ「ゼロ。」

ゼロ「ほとんど未知の相手と戦うんです。だがそれでも、揺らぐことのないあなたの意思を確認したかったんです。」

シャウト「そうだな、たとえ勝てる確証は無くても、勝てると信じて戦う。」

アイズ「ああ、僕らはいつもそうしてきた。」

サイガ「諦めつつゆうのは、どうも性に合わへんからな。」

サリーオ「思い出がたくさん詰まった『オルテナ』だからな。」

真雪「まだまだやりたいこともたくさんありますから。」

にゆう「天満と一緒に戦うにゅー！」

ジウ「まあ、こういう連中だ、ユエ。」

天満「ユエ！」

ユエ「ああ、やろう！運命を叩く！」

フェイ「へ、俺がいれば、マジどんな奴だって敵じゃねえよ！」

リアリィ「ユエにいついく、そう決めたもんね！」

イオキス「早速…始めましょう…。」

ユエ「よし！三段階『オールムーン大満月』、開始する！」

（剣斗は）

剣斗「はあはあはあ…。」

琴花「はあはあはあ…。」

ミリア「はあはあはあ…。」

クロノ「どうしました？もう終わりですか？」

剣斗「く、くそっ！な、『幻術』！」

クロノ「ボクはこっちです！はっ！」

剣斗「うわあああっ！」

クロノ「まだまだ！」

剣斗「にやろう…。」

琴花「つ、強い…。」

ミリア「三人がかりで触れることも出来ないなんて…。」

クロノ「当然です。ボクは『エリア』を使用しているんです。『エリア』には『エリア』でしか対抗出来ません。たとえ『法術』を使用したとしても、『フォンス』による身体的な覚醒力には遠く及びません。」

剣斗「くそっ！」

クロノ「自分の中に『力』があることを感じなさい。それを『フォンス』から出すイメージを描くんです。」

琴花「そ、そんな簡単に言われても。」

クロノ「あなた達の中には、確かに『力』は存在しているんです。あとはそれを、自分の中から探しあてるだけです。」

ミリア「探しあてるって言っても。」

クロノ「『法術』を会得した時のことを思い出すんです。」

剣斗「『法術』を会得した時のことを？」

クロノ「全ては想いが『力』を生み、育てる。大切なのは、想いを

強く出すこと。さあ、覚醒させるんです！自分の中にある確かな想いを！」

剣斗「…想いか。」

琴花「そうだよ…。」

ミリア「想いの強さなら！」

三人「誰にも負けないっ！」

クロノ「！」

トト「覚醒の『光』ですよ！」

クロノ「そうです、それがあなた達の強さです。」

（聖地は）

聖地「僕は…君だったんだね…『アオス』…。」

アオス「聖地…君の本当の名前は…いや、よそつ。」

聖地「え？」

アオス「君の名前は聖地だ。それが、君だ。」

聖地「アオス…。」

アオス「…聖地。」

聖地「…分かつてる。」

アオス「いいんだね？」

聖地「今なら少し分かるよ。あのディーノが、『不完全』でありながら、どうしてあれほどの強さを手に入れたのかが。」

アオス「そうだね…。」

聖地「『不完全』なままじゃ…勝てないんだよね？」

アオス「…そう。」

聖地「大切な人を守りたい。そのために…。」

アオス「…怖いんじゃないのかい？震えているよ。」

聖地「…。」

アオス「…これを。」

聖地「これは？」

アオス「『カイセイコン海聖魂』。」

聖地「…。」

アオス「これは僕の『力』の全て。これを君の中に眠らせておく。」

聖地「アオス。」

アオス「これを解放する時期は、君が決めるんだ。」

聖地「…いいの？」

アオス「ああ、君なら僕のように、間違わずに正しい方向に導けると思う。」

聖地「…。」

アオス「これから君には、ある場所に行ってもらいたい。」

聖地「どこに？」

アオス「この『海聖魂』が教えてくれるよ。」

聖地「…分かったよ。」

アオス「そしてこれを…。それは『フォンス』と呼ばれるもの。」

聖地「これも『海聖魂』が教えてくれるのかい？」

アオス「そう、それは君の助けになってくれるものだから。」

聖地「助けに…。」

アオス「全ては『海聖魂』が教えてくれる。さあ、君の中に『種』

として植え付けておくよ。」

聖地「……………これが『海聖魂の種』……………温かいよ。」

アオス「あとは君が咲かせてくれ。いい花を咲かせてほしい。…僕が伝えられることは、これで全てだよ。」

聖地「……………うん。」

アオス「最後に一つ聞かせてほしい。」

聖地「何？」

アオス「この世界…好きかい？」

聖地「大好きだよ！」

アオス「いい答えだ……………」

聖地「アオス…さようなら。あとは僕がやってみるよ。君も愛したこの世界を守るために。君の親友…ディークのために…。そして、僕自身のために…。」

次回に続く

## 第二十六劇『鍊値』

聖地「よし、行き先…『テムローア高原』か…。」

（聖地は『テムローア高原』へ）

聖地「ここにアオスの遺産があるんだよね。確か……あつた！ここに触れば…。」

（一つの岩に手を触れると、地下に通じる階段が現れる）

聖地「よし。………ここか。」

（階段を降りて行くと、扉を発見）

聖地「ここが、アオスの遺した、アオスの研究の全て。……ユエ？その人がデークの半身なんだね。そしてディーノ……成程、急がなきゃならないみたいだね。」

（天満は）

天満「…。」

ユエ「…。」

天満「…ユエ？」

ユエ「こんな所で何をしているんだ？」

天満「いや…。」

ユエ「……『黄泉玉』の真実は、やはり重いか？」

天満「……皆には悪いけど、正直…キツイよ…。」

ユエ「だろうな。」

天満「ユエはキツくないのか？自分の体のこと。」

ユエ「私は望んで生まれたのだからな。」

天満「望んで？」

ユエ「デイクが何故私を生み、わざわざ『月』を創ったのだと思う？」

天満「…『地球』のため？」

ユエ「ああ、それもある。だが真の目的は『月』、すなわち『天球』を『地球』のように、生命溢れる緑豊かな星にしたかったのだよ。」

天満「どうして？」

ユエ「我々の…『故郷』にしたいと言っていた。だから私は、その想いを受け、『知のディーク』として生まれることを、決心した。」

天満「…そっか。」

ユエ「天満…我々は、ここに有って、無い存在なのだよ。真実を知ったお前なら、理解出来るだろう？」

天満「ふう…理解は出来ても、納得は出来そうもないよ…。かつてのネオスのようにね。」

ユエ「アオスカ…彼もまた、限りなく危険な存在だった。いや、そもそも我々を生み出した存在が、既に危険な異物なのだろうがな。」

天満「『オルフェリア』に『ドリユーマ』か…。」

ユエ「『地球』という世界には、我々は異物でしかない。そうディークが言っていたよ。」

天満「それでも…それでも俺は、『地球』を守りたい。」

ユエ「ああ、それがディークの意味であり、私の意味でもある。」

天満「守るんだ、絶対。」

（真雪が天満を発見し、近付こうとする）

真雪「あ、天…。」

天満「俺は『地球』から去るよ。」

真雪「えっ！」

ユエ「そうだな、それが一番良いのかもしれない。」

天満「人が生きる世界を守るため。」

ユエ「我々の居場所は、『地球』には存在しないのだろうな…。」

真雪「……天くん。」

天満「そろそろ時間だね。行こうユエ、三段階の準備は、もう出来たはずだ。」

ユエ「ああ。」

真雪「こっちに来る！……天くん。」

（真雪はその場から去る。天満は皆の所へ）

アイズ「ん？天満、どこ行ってたんだ？三段階の準備はもう出来てるぞ。」

天満「ごめんごめん。」

サリーオ「真雪、天満を呼びに行ったんじゃないのかい？」

真雪「…。」

サリーオ「ん？…真雪？」

真雪「え！あ、はい、準備が出来たんですよ！」

サリーオ「？」

ユエ「皆、それでは三段階を開始する。」

（その時、大きな地震が起きる）

天満「な、何だ？」

サイガ「地震かいな！」

ユエ「一体……ユインシス、『黙示録』はどうなっている！」

ユインシス「見てくる！」

ユエ「このような地震、予期していないはずだ。」

ユインシス「ユエ！」

ユエ「どうだった？」

ユインシス「『黙示録』が、書き換えられている！」

ユエ「何っ！」

ユインシス「予定よりも早く、奴らが来た！くそっ！俺が『エリア』を使ってさえいれば、察知出来たものを！」

ユエ「くっ、予想より確実に早いか…。」

天満「ユエ！」

ユエ「天満……仕方ない。皆、聞いてくれ！」

ゼロ「ま、まさか…。」

ユエ「敵が来たようだ。」

シャウト「アイオーンか！」

ユエ「いや、アイオーンはまだ遙か銀河の彼方のはずだ。」

シャウト「だったら！」

ユエ「アイオーン本人が来るのは、まだ先のはずだ。恐らくは…。」

ユインシス「『黒の波紋』…。」

アイズ「それが敵？しかし『黒の波紋』には実体が……そうか、アイオーンのように形を成したのか！」

ユインシス「アイオーンが『地球』を見つけるために、様々に放った手下だろうな。」

ユエ「とにかく、この『黙示録』を知られる訳にはいかん！皆、頼む！」

フェイ「へ、このためにマジ鍛えてきたんだ！マジ任せときなつて！」

イオキス「ユエさんは…どうするの…ですか…。」

ユエ「私とユインシスは、すぐにでも三段階を実行する。」

リアリイ「うん。あとはリアリイちゃんにまっかせなさいっ！」

天満「みんなっ！」

アイズ「ああ、行こう！」

サイガ「よっしゃっ！」

ゼロ「仕方ありませんね。」

シャウト「手強いだろうが、やるしかないだろうな。」

真雪「私も！」

天満「駄目だ！」

真雪「え！」

天満「サリーオさんと真雪は残っててくれ！」

真雪「どうして？」

天満「お前はまだ覚醒させてないだろ？」

真雪「あ…でも。」

天満「いいから残れ！」

真雪「あ…。」

天満「サリーオさん、あとは頼みます！」

真雪「天くん！」

サリーオ「真雪！」

真雪「サリーオさん…。」

サリーオ「今必要な『力』を持ってない真雪は、戦いの邪魔でしかないんだよ。」

真雪「でも、天くんは！」

サリーオ「しっかりおしっ！」

真雪「サ、サリーオさん…。」

サリーオ「今のアンタは普通じゃない。心そのものが揺れている。」

真雪「…。」

サリーオ「なあに、奴らに任せときなつて!」

ジウ「そうだな、信じて待つことも、強さだ。」

真雪「……はい。天くん…。」

（天満達は外へ）

アイズ「なんだコイツらは!」

サイガ「うじゃうじゃおるやんけ!」

ゼロ「『蟲』…ですか?」

天満「コイツらが『黒の波紋』か?」

イオキス「いや…正確には…『無の破片』と…呼ばれる…ものたち…だろう…。」

天満「『黒の波紋』とは違うのかい?」

イオキス「『黒の波紋』は…アイオンの…ことを言う…。」

アイズ「じゃあコイツらは？」

イオキス「アイオーンの…『力』の一部で…生み出した…ものにとだ…。」

アイズ「一部？そいつが『無の破片』なのか？」

？「少し違いますね。」

天満「な、『蟲』が喋った！」

アイズ「何だお前！違うとはどういうことだ！」

？「わたくしは、誉れ高き『最翁様』の戦士、『マグナオウ』と申します。」

天満「『最翁』？アイオーンの仲間か！」

マグナオウ「おやおや、いきませんよ。アイオン様を呼び捨てなご。命を落としたく無いでございましょう？」

天満「何っ！」

アイズ「命を落とすのはどっちか、思い知らせてやるぞ。」

マグナオウ「ほう、何やら威勢のいい方がいらっしやいますねえ。」

アイズ「威勢だけかどうか、試してみるか？」

マグナオウ「生憎と、わたくしは多忙なのでございます。故に、貴

方達と遊戯を楽しむ時間などございません。」

フェイ「マジむかつく野郎だな！」

リアリイ「リアリイちゃんは『蟲』なんて大っ嫌い！」

ゼロ「ふむ…一つお聞きしてもよろしいですか？マグナオウさん。」

マグナオウ「成程、少しはマシに語れる方もいるみたいでございますね。いいでしょう、仰って下さい。」

ゼロ「あなたは、何をしに来られたのですか？」

マグナオウ「無粋なことを聞きますね。とっくにご存知のはずですが？」

ゼロ「……成程。では、あなたをここから出す訳には行かないようです。」

マグナオウ「貴方も馬鹿でございますね。」

ゼロ「行きますよ天満くん！」

天満「ああ！」

ゼロ「皆さんは、他の『蟲』達を！」

サイガ「行くでアイズ！」

アイズ「ちっ！」

フェイ「マジ命令すんな！」

イオキス「行くぞ…フェイ…。」

リアリイ「でも、アイツ強いよ！」

イオキス「…『戦闘鍊値』…3658…。」

リアリイ「ちよつとちよつとお、強過ぎじゃない！」

フェイ「ふん！」

リアリイ「どうかしたのフェイ？」

イオキス「忘れたのか…ゼロの…『戦闘鍊値』は…。」

ゼロ「『氷の蛇紋』<sup>ジャコウ</sup>！」

天満「『月の咆哮』！」

マグナオウ「小さき技でございますね！」

天満「くっ、弾き返された！」

ゼロ「…。」

マグナオウ「どういたしました？言葉数が減りましたが？」

ゼロ「…ふふ。」

天満「ゼロ？」

ゼロ「ふふふ。」

マグナオウ「何でございますか？」

ゼロ「いやいや、失礼。どうやらあなたは、アイオーンの手下でも、最下層のようですね。」

マグナオウ「何を！」

ゼロ「僕は…7900です。」

マグナオウ「は？」

天満「え？」

マグナオウ「何でございます？」

ゼロ「さようなら、小さき『蟲』さん。」

マグナオウ「消えた？ぐっ……な…何…。」

天満「アレは『氷紋』！」

マグナオウ「ぐっ…。」

ゼロ「それではご機嫌よう。」

マグナオウ「や、やめ…。」

ゼロ「『氷の華山』<sup>カザン</sup>。」「

マグナオウ「ぐ…が…馬鹿…な…。」

ゼロ「皮肉ですね。醜い者ほど、輝く山が出来ます。」「

天満「…し…瞬殺。」「

ゼロ「どうやら『無の破片』ではなかったようですね。もしそうなら、もつと手強いはずですからね。恐らくは彼が言っていた『最翁』さんとやらの部下ですね。それも相当格下の…さて、皆さんは大丈夫ですかね？」

（その時、一匹の『蟲』が『月』から離れていく）

シャウト「終わったようだな。」「

ゼロ「皆さんもご無事で何よりです。」「

フェイ「てめえがマジ倒したのかよ、アイツ。」「

ゼロ「まあ、そうですね。」「

リアリイ「やっぱゼロは強いわあ。」「

フェイ「ふんっ！」「

天満「あ、あのさあゼロ、さっきの数字は何？」

ゼロ「ああ、それはですね、『戦闘鍊値』ですよ。」

アイズ「何だそれは？」

ゼロ「まあ、戦闘における『力』を、『鍊の力』として計算し、数値化したものですよ。」

サイガ「ふーん、そない便利なもんがあんねんや。」

ゼロ「イオキスさんが、数値化してくれますよ。」

サイガ「ホンマ！な、ワイは何ぼなん！」

ゼロ「ちょうどいいですから皆さん、今の自分のレベルを知っておいて下さい。お願いします、イオキスさん。」

イオキス「分かった…『最高予測戦闘鍊値』……サイガ…1530  
…アイズ…1528…シャウト…2603…天満…1796…。」

サイガ「ワイの勝ちやでアイズ！」

アイズ「納得いかない…。」

天満「ちょっと待ってよ！ゼロは確か…。」

リアリィ「ゼロは断突の7900だよ！」

アイズとサイガ「7900!」

シャウト「強いとは思っていたが、まさかそれほどは。」

フェイ「ふんっ!」

天満「ゼロって凄いんだな。」

ゼロ「いやいや、まだまだですよ。」

天満「何言ってたんだよ!7900なんて、凄いじゃないか!」

ゼロ「ふう……本当にまだまだなんですよ。」

天満「え?」

ゼロ「ユエさんに聞いたんですが、『時の国』に現れたアイオーン……『戦闘錬値』いくつだと思えますか?」

天満「え……と……。」

ゼロ「83000です。」

天満「何だって!」

ゼロ「しかも、生まれたばかりで、その数値です。今のアイオーンの『力』は、ハッキリ言って測り知れません。」

皆「……。」

ゼロ「さっきの雑魚であるはずの者でさえ、僕の半分くらいの『力』を持っていました。」

天満「…。」

ゼロ「それでもやるしかないんです。やると決めた以上はね。」

天満「…そうだな。」

次回に続く

## 第二十七劇『部屋』

天満「それにしてもアイズ達、よく『蟲』達を退けられたよな？」

アイズ「…いや、認めたくはないが、イオキスが教えてくれた『戦闘鍊値』とやらが正しいなら、僕やサイガには荷が重かっただろうな。」

天満「え？戦ったんじゃないのか？」

アイズ「『蟲』達は僕達と戦おうとはしなかったんだ。」

天満「じゃあ…。」

アイズ「…イオキス、あのマグナオウとやらは別格として、他の『蟲』の『戦闘鍊値』はいくつだったんだ？」

イオキス「1800だ…。」

アイズ「…やはりな。言葉すら話せない雑魚の『蟲』すら、その強さだ。それにあの数、本気で襲われれば、僕やサイガやシャウトは殺られていた。」

サイガ「…。」

シャウト「つまり『蟲』達は、我々を殺すよう命令されていた訳ではないということだ。」

アイズ「ああ、恐らくは偵察だろうな。」

ゼロ「そのようですね。この事から察するに、アイオーンは自らの手で、『地球』を滅ぼしたいみたいです。手下ではなく、自らの『力』を持って。」

天満「じゃあアイズ達は『蟲』達を…。」

アイズ「ああ、全部倒せたと思う。相手は無抵抗だし、倒すには難しくはなかった。」

ゼロ「…本当に全部倒せたんですか？」

シャウト「少なくとも、こちら辺にいた『蟲』達はな。」

ゼロ「もし一匹でも倒せ損なつたとしたら…。」

天満「うん…危険だ。」

ゼロ「唯一の救いは、ここが『月』だということですね。恐らく『蟲』達は、『光』を感知して来たはずです。」

天満「そうか、アイオーンは『地球』を探している。だけど今は…。」

シャウト「今『地球』はただの星だ。『光』も何もない。」

アイズ「アイオーンが『月』に興味を持たない限り、たとえ僕達の存在が知れても、すぐには来ない…か。」

サイガ「せやな、アイオーンが興味を持たへんよう、祈るしかあら

へんな。」

天満「幸いアイオンが知っているユインシスが、『蟲』達に見られていなかったしな。」

ゼロ「そうですね。ただし、アイオンの目的は『完全なる無』です。いずれここにも必ず来ます。その前に僕達ができるべきことは一つです。」

サイガ「するべきこと?」

ゼロ「強くなるんです。」

天満「そうだ! そうだよ! アイオンの『戦闘鍊値』は83000以上! 今のままじゃ、アイオンに汚れすらつけることは出来ない!」

アイズ「ああ、一方的に殺られるなんてごめんだ。」

シャウト「だが時間も限られている。どうする?」

ゼロ「ユエさんなら、何か方法を知っているはずですよ。」

天満「そうかもしれないな。よし、ユエの所に行こう!」

皆「ああ!」

天満「...ところでイオキス達は?」

ゼロ「恐らく先にユエさんの所へ行ったのでしょーうね。」

天満「俺達も行こう！」

（剣斗達は）

剣斗「この『光』が？」

クロノ「そう、『フォンスの光』です。」

ミリア「じゃあこれで、アタシ達にも『エリア』が？」

クロノ「まだです。」

ミリア「何でえ！」

クロノ「その『光』をコントロール出来て、初めて『エリア』を使えるんです。」

琴花「ど、どうすりゃいいの？」

クロノ「どんな『エリア』になるかは、あなた達の想い次第です。いいですか、あなた達に合った、あなた達自身を見つめなさい。」

（天満は）

天満「ユエ、じゃあ方法があるんだな？強くなる方法が！」

ユエ「ああ、上手くいけば爆発的に『力』が増す…だろうな。」

アイズ「何か気になる言い方だな。」

シャウト「やはり…リスクがあるのか？」

ユエ「失敗すれば、『フォンス』そのものを失う。」

天満「失うって…この手の『フォンス』をかい？」

ユエ「あ、言い方が不適説だったな。そうではなく…そういえば『フォンス』の意味を知っているか？」

天満「そっいゃ…。」

アイズ「聞いてないな。」

ユエ「そうか。『フォンス』の意味は『心』。」

天満「『心』…。」

ユエ「つまり『フォンス』を失うとは、『心』を失うということだ。」

天満「じ、じゃあ…！」

ユエ「ああ、強くなるか…『精神崩壊』するかだ。」

シャウト「何てことだ…。」

アイズ「そんな危険なのか？」

ユエ「この方法は、直接『精神』を鍛えることが出来る。」

サイガ「『精神』を？」

ユエ「いいか、普通『精神』を鍛えるには、『肉体』を通して、少しずつしか鍛えることが出来ない。だがこの方法を取れば、直接『精神』のみを鍛えることができ、『心』…すなわち『フォンス』を強くすることが出来るのだよ。」

シャウト「成程。『エリア』の強さは『心』の強さ、『心』を鍛えることが出来れば、『エリア』を爆発的に向上させることが出来るというわけか。」

ユエ「そのとおりだ。」

シャウト「それで、その方法とは？」

ユエ「ある部屋へ入ってもらう。」

天満「部屋？」

ユエ「ああ、『暁の部屋』にな。」

天満「『暁の部屋』？」

リアリィ「リアリィちゃんも入ったんだよ！」

アイズ「どんな部屋なんだ？」

リアリィ「えつとね、中は『鍊』が大量にあってね、それが自然と勝手に自分の中に入り込んでくるの！」

アイズ「勝手に！そ、そんな部屋に長時間いたら！」

リアリィ「うん、制御出来なくなって、『肉体』も『精神』も崩壊していくんだよ。」

フェイ「マジ俺らも入ったけどよ…マジきつかったぜ。たった三日でマジ限界だったしな。」

天満「ユエ、本当に大丈夫なのか？」

ユエ「分かん。」

サイガ「分からんってな！ちょっと待ちいな！」

リアリィ「でも『力』はつくよ！」

サイガ「え？」

フェイ「確かにマジキツイが、たった三日で俺らは『レベル3』にマジ辿り着けた。その嫌味野郎もマジ入ったんだぜ。」

ゼロ「…。」

天満「本当か？」

ゼロ「ええ、まあ。」

リアリィ「でもゼロは五日もいたけどね。」

天満「そんなところで五日も！」

ゼロ「いやあ、マグレですよマグレ！」

フェイ「ちつ、ホントにマジ嫌味な野郎だなてめえは！マグレであんなところにマジ居れるかっての！」

シャウト「しかし、ゼロのように『力』がつくのなら。」

天満「ああ！ユエ、頼む！」

ユエ「アイオーンが来るまで時間は残り少ない。命を懸けるしかないぞ？」

アイズ「望むところだ。」

サイガ「死ぬつもりなんてあらへんしな。」

真雪「…。」

サリーオ「どうした真雪？」

真雪「…私も入れるのでしょうか？」

サリーオ「……天満と離れたくないんだな。」

真雪「…はい。」

サリーオ「行つてきな。」

真雪「いいんですか？」

サリーオ「真雪に合った、真雪自身の『力』を探して来な。」

真雪「はい！」

ジウ「ふ……熱い奴らだな。」

ユエ「では早速入ってもらつ。」

天満「そついやユエ、俺達はどれだけの時間入つてればいいんだ？自由に外に出てもいいのか？」

ユエ「いや、当分出入口は消す。向こうからは、こちらへ出て来れない。」

天満「な、何でそんなこと！下手すれば死ぬかもしれないんだぞ！」

ユエ「何度も開くことが出来ないからだ。」

天満「一体どういつ。」

ユエ「一度開けば、中にある大量の『鍊』が外に逃げる。再び同じ状態に戻すのに、かなりの時間がかかる。」

天満「じ、じゃあ入る時も逃げるんじゃない。」

ユエ「いや、君達を送り込む時は、扉は開かなくても済むんだ。」

天満「？」

ユエ「ゼロだよ。」

天満「……あ！『氷紋』か！」

ユエ「そうだ。」

天満「ち、ちょっと待って！じゃあさ、帰る時もゼロに頼めば……。」

ゼロ「無理なんですよ。」

天満「どうしてだい？」

ゼロ「中にある大量の『鍊』が邪魔をして、僕の『力』が反響してしまうんです。中に入る時は、ここで『力』を発動させるだけですから大丈夫なんですがね。」

天満「そっか……。」

サイガ「せやけど、『氷紋』っちゅうのは、ホンマに便利やなあ。」

アイズ「『氷』でマーキングしたところなら、何処へでも『瞬間移動』が出来る。」

サイガ「反則やな……。」

ゼロ「ふふ、ですが強い『力』には、それ相応のリスクがあるものなんですよ。『氷紋』もまた然りです。」

天満「リスクって？」

ゼロ「これはマジ馬鹿さん達も知っていることですが、『氷紋』は一日に五回、しかも行う度に体力を著しく低下させてしまうんですよ。」

天満「そうだったのか。」

ゼロ「『氷紋』は、一対一には無類の強さを発揮出来るんですが、相手が複数の場合に限っては、とても不都合な技なんです。戦うとしたらですけどね。」

アイズ「だがそれでも、有効範囲の広い技だな。」

シャウト「やはり『エリア』には驚かされるな。」

ゼロ「そういうば、シャウトさんだけが、『レベル2』を覚醒させられたんですね。」

天満「ホントか！さすがはシャウトだな！」

アイズ「霊神…だからか？」

ユエ「そうだ。霊神は『鍊』の集合体。普段から『鍊』の扱いに慣れているお陰で、『エリア』の向上も速かったというわけだ。」

天満「霊神は自ら『鍊術』を発揮出来るもんなあ。」

サイガ「羨ましい限りやで。」

天満「そっぴゃユエ。」

ユエ「何だ？」

天満「さっきも聞いたんだけど、俺達はどのくらい『暁の部屋』に入ってるんだ？」

アイズ「ゼロが五日間だったことを考えて……一週間くらい……か？」

ゼロ「それではアイオンには届かないでしょうね。」

アイズ「じゃあお前はどのくらいだと思うんだ？」

ゼロ「ん……一ヶ月くらいでしょうかね。」

フェイ「マジ馬鹿言えっ！そんなもんマジ死んじまうわいっ！」

ゼロ「そうですか？」

天満「ユエ、一体どのくらいの時間なんだ？」

ユエ「ふふ……。」

皆「……。」

ユエ「六ヶ月だ。」

(銀河の彼方では)

?「よし、ご苦労じゃった。」

蟲「キイー!」

?「マグナオウが殺られたとなると……よもやアタリというわけかのう。さて、報告は……せずとも良いか。わざわざ奴の得となるようなことはする必要あるまいて。こちらはこちらで、準備に時間を食うからのう。」

蟲「キイー!」

?「奴がワシを?」

(アイオーンの所へ)

アイオン「三人とも、報告せよ。まずは『ベル』よ。」

ベルクカイザー「我が担当銀河には、生命ある惑星はございませんでした。」

アイオン「ふむ、『リム』よ。」

リムキュラア「私が担当した銀河には、生命ある惑星こそございましたが、閣下のお探しのモノはございませんでした。」

アイオン「……『アポ』よ。」

アポカリユウス「……特に閣下に報告するような情報は無いですよ。」

アイオン「…醜いな。」

アポカリユウス「は？」

アイオン「ベルもリムも美しい出来映えだ。余の最高傑作。だが何事も失敗作はあるのだな、アポよ。」

アポカリユウス「……。」

アイオン「主の顔は醜い。完全な失敗作。余の最も嫌いな老いの姿。忌々しい姿だな、アポよ。」

アポカリユウス「く…。」

アイオン「もうよい、三人とも下がれ。引き続き調査をし、何か良い知らせが有ったら知らせよ。」

ベルクカイザーとリムキュラア「はっ！」

アポカリユウス「……。」

アイオン「余はまた少し眠る。起きた時に余を喜ばせよ。楽しみにしておるぞ。」

アポカリユウス「……。」

次回に続く

## 第二十八劇『修業』

皆「六ヶ月うーっ！っ！」

ユエ「そうだ。」

フェイ「お、おいおいマジかよ！六ヶ月なんて…マジあんなトコに六ヶ月もいたら廃人になっちまうぜ！」

ゼロ「さ、さすがに驚きましたね…六ヶ月…ですか。」

天満「ユエ、本気なのか？」

ユエ「言ったはずだ、時間が無いと。零か百か、そういう試練が必要なのだ。」

シャウト「『力』を得るか…『全て』を失うか…か。」

アイズ「だ、だが半年も僕達が入って大丈夫なのか？僕達のことだけじゃなく、アイオーンが半年も『地球』を放っておくのか？」

ユエ「それは大丈夫だ。『黙示録』によると、アイオーンがここに来るのは、今から187日後だ。」

アイズ「ほ、本当に大丈夫なのか？さっきみたいに、お前の予想を上回るかもしれないぞ！」

ユエ「確かにその可能性は否めないな。」

アイズ「だつたら！」

ユエ「それでもやるしかないのだ。」

アイズ「う…。」

サイガ「…。」

アイズ「サイガ…。」

サイガ「やってやろうやんけ、アイズ。」

アイズ「……。」

サイガ「ワイらにはまだまだやることがあるやろ？でけへんまんま  
で、死にたあらへんからな。」

アイズ「サイガ…。」

天満「そ…そうだよな…。そうだよアイズ！俺達ならきつと出来る  
さ！」

アイズ「だが半年なんて、どう考えても生存率が…。」

天満「零じゃないだろ？」

アイズ「…。」

天満「このままじゃ、俺達は何も出来ないで、殺されるだけだ。だ

けど、俺達が生きていられる可能性がある。」

アイズ「天満…。」

天満「ほんの僅かかもしれないけど、俺は懸けたい！その僅かな可能性に！」

アイズ「……ふ、以前と逆になったな。」

天満「え？」

アイズ「以前はこうやって尻込みしてるお前を、僕が後押ししたんだがな。」

天満「そうだったよな。」

アイズ「自分の守りたいモノを想う。それが強さ……自分で言ったことが、自分で分かってなかったとはな。」

天満「やろう、アイズ！」

アイズ「ああ！」

サイガ「それでこそや！」

サリーオ「いいチームだな。」

真雪「はい！」

にゅう「みんな強いにゅー！」

ユエ「それでは来てくれ。」

(『暁の部屋』へ)

ユエ「ここが『暁の部屋』だ。」

サイガ「でかい扉やなあ。」

天満「この中で六ヶ月……ん？……あのさあ、食事とかは？」

アイズ「そういえばそうだな。五日程度なら何とかなるが、さすがに六ヶ月も断食は無理だしな。」

ユエ「ふ、入れば分かるさ。」

ゼロ「まあ、普通に驚くと思いますよ。」

フェイ「ま、俺達はマジ辛くて食事どころじゃなかったけどな。」

リアリイ「そうそう。体の痛みに耐えるのに必死必死！」

真雪「そ、そんなに大変なんですか…。」

リアリイ「た〜いへんた〜いへん！」

ユエ「中の生活の仕方は、ゼロ達に教えてもらうといい。」

天満「分かった。」

シャウト「そう言えば、どれだけの者が行くんだ？」

ユエ「私、ユインシス、ユナイマは行かない。」

天満「どうして？」

ユエ「三段階は時間がかかる。私まで入ってしまったら、誰も計画を進められなくなる。」

天満「そうだな。じゃああとは…。」

ジウ「オレも行かないぜ。」

天満「ええ！」

ジウ「オレにはオレのやることがある。それに、六ヶ月も閉じ込められるのもごめんだ。」

天満「ジウさん…。」

ジウ「…強くなってこい。」

天満「え？」

ジウ「強くなって戻ってこい。その為に来たんだろう？」

天満「…はい！」

ジウ「…小僧。」

天満「はい？」

ジウ「……負けるな。（ボソ）」

天満「え？何ですか？」

ジウ「何でもねえ。さっさと行って、さっさと強くなってこい！」

天満「あ、はい！」

シャウト「では行かないのはジウだけだな？」

ユエ「…ゼロ。」

ゼロ「分かりました。では皆さん、僕に触って下さい。」

フェイ「ちつ…。」

ゼロ「おや？もしかして行かないんですか、マジ馬鹿さん？」

フェイ「くっ…触ればいいんだろ、触れば！」

ゼロ「素直じゃないですねえ。」

ユエ「よし、準備が出来たようだな。」

天満「ああ！」

アイズ「絶対に！」

サイガ「強うなつて！」

シャウト「帰ってきてみせる！」

真雪「私もです！」

サリーオ「やるしかないね。」

フェイ「六ヶ月なんてマジ大したことないぜ！」

リアリイ「ユエ待っててね！」

イオキス「では…。」

ユエ「皆、生きろ！」

皆「おう！」

ゼロ「では行きますよ！『レベル2』…『氷紋』発動！」

ユエ「…待ってるぞ。」

ジウ「奴らなら平気だろ。」

ユエ「そうだな。」

（天満は）

ゼロ「さあ着きましたよ。」

天満「ここが…。」

アイズ「信じられないな…。」

サイガ「ホンマに部屋ん中なんか？」

ゼロ「広さは『月』くらいあるらしいですよ。」

サイガ「でかつ！ってか部屋ん中やで？」

ゼロ「ここは『鍊』が作り出している部屋です。つまり空間、物質、質量といった、全てが『鍊』で構成された部屋なんです。言ってみれば、『別次元の空間』と呼ばれるものですね。」

サイガ「別世界ってわけなんか。」

真雪「でも、凄く綺麗な所なんです。まるで昔の『地球』みたいです。」

ゼロ「『鍊』は『自然』を構成する『力』です。最も安定した豊かな空間を作ってるんです。つまり、人も建物も無い、『自然』だけがある空間が、『地球』にとって最も安定した豊かな空間なんですよ。」

真雪「私達が『地球』を汚してしまってるんですね…。」

ゼロ「人は欲深い生き物ですからね。『自然』を自分達が支配するものと考えてるんでしょう。」

真雪「この光景が、本当に『地球』のあるべき姿かもしれないんですね。」

ゼロ「そうですね…。」

天満「確かに『地球』を悪い方に変えてしまったかもしれない。でも、変えられたってことは、元に戻すことも出来るはずだ。」

真雪「天くん…。」

天満「人が本当に『自然』を理解した時、本当の意味で共に生きることが出来るはずだよ。」

シャウト「そうだな。」

天満「その為には、凄く長い時間が必要かもしれない。だからこそ、ここで『地球』を破壊させるわけにはいかないんだ！『地球』と共に生きていくために……『自然』を元に戻す為にも、俺達は生きなきゃならないんだ！」

真雪「天くん！」

アイズ「その為にもまずは『力』がいる。生きる為の『力』がな。」

天満「アイオンに勝つ『力』がね！」

にゅう「勝つにゅ〜！」

天満「に、にゆう！何で！」

真雪「ついてきちゃったの！」

にゆう「にゆうも一緒にゆー！にゆうも頑張るにゆー！」

天満「全く…でもありがとうな、にゆう。」

にゆう「みんなで頑張るにゆー！」

サイガ「よっしゃ！んでゼロ、ワイらは何をしたらええねん！」

ゼロ「生きるんですよ。」

サイガ「生きる？そんだけ？」

ゼロ「ええ、ここで六ヶ月を生きるんです。」

サイガ「な、何や…えらい簡単やないか…はは。」

フェイ「笑ってられるのもマジ今のうちだぜ！」

サイガ「へ？」

フェイ「今はまだマジ気付いてねえみてえだけだな、そろそろ…」

サイガ「ん？…あれ？…っ！」

アイズ「どうしたサイガ！」

サイガ「くっ！」

ゼロ「来ましたね。」

シャウト「何だ？」

ゼロ「こうやって立っているだけでも、もの凄い速さで、大量の『錬』が体に流れ込んでくるんです。」

アイズ「サイガ！」

サイガ「だ、大丈夫や…。」

ゼロ「たまたまサイガさんに流れ込む『錬』の速さが、皆さんより速かった為、こうなったわけですが、そろそろ皆さんにも…。」

アイズ「うっ！」

真雪「う…。」

天満「真雪！」

ゼロ「分かりましたか？ここでただ生きるということが…。」

サイガ「な、納得やわ…。」

ゼロ「これからもっと激しくなってきます。ここにある『錬』は質、量共に、『オルテナ』のそれとはケタ違いです。今はまだ、『錬』が急激に流れ込んだせいで、体が驚いているだけですが、あなた方

の『鍊』の『許容量』を越えてしまうと、今度は全身に激痛が走ります。」

シャウト「な、なるほど…。つまりユエの目的は、無理矢理『鍊』の『許容量』を広げることなんだな。」

ゼロ「それもありますが、一番鍛えられるのは『精神』です。『鍊』を生むのは『精神』…『心』です。『鍊』の『許容量』が増えるということは、『心』が強くなるということです。普通は肉体を通してでしか鍛えることが出来ない『精神』ですが、ここでは直接鍛えることが出来ます。つまりここでの一日は、外での何ヶ月もの修業と同じ経験を与えてくれるんですよ。」

リアリイ「そうそう、だからここで生きることは、本当に大変なんだから！」

アイズ「こ、こんなところで六ヶ月…か…。」

シャウト「確かにやり遂げることが出来れば、今までの何十倍もの『心の強さ』を身に付けることが出来るな。」

ゼロ「『心の強さ』…『エリアの強さ』ですからね。さて、僕達はまだまだ大丈夫ですが、そろそろ天満くんも…。」

天満「まだ大丈夫みたいだけ…ど…。」

シャウト「天満！」

ゼロ「シャウトさんは元々『鍊の集合体』ですから、もしかしたら、この試練は案外シャウトさんにとっては一番合ってるかもしれないませ

んね。」

イオキス「とにかく…六ヶ月だ…。」

ゼロ「そうですね。とりあえず、まだ平気な僕達が食糧の調達に行きますか。」

サリーオ「アタシはこの子達を看てるよ。」

ゼロ「おや？サリーオさんはどうやら経験者みたいですね。」

サリーオ「まあね。だからまだ平気なんだよ。」

ゼロ「では天満くん達を頼みます。行きますよ、マジ馬鹿さん。」

フェイ「いいかげん殴るぞ！」

リアリイ「まあまあ。」

ゼロ「では待っていて下さい。」

天満「く……絶対…負けないぞ！」

（剣斗達は）

剣斗「ふう、しんど…。」

クロノ「少し休憩しましょうか。」

琴花「た…助かった…。」

ミリア「もう…ダメ…。」

クロノ「『レベル2』…『<sup>ユウゲン</sup>幽幻』終了…ふう。」

剣斗「きつちい〜!」

トト「お疲れ様ですの!はい、水分補給しますですの!」

剣斗「サンキュ!」

琴花「ありがとう!」

ミリア「ありがとうトト!」

剣斗「だけど、ホントキツイな〜。クロノの『レベル2』はさ。」

琴花「ホントだよ全く…。」

ミリア「息もしにくいし、体も重いし、あげくの果てには、動きたんびに激痛だし…。」

クロノ「ふふ、前にも説明しましたが、ボクの『幽幻』は、様々な状態を与えることが出来る空間を作り出します。とても狭い範囲ですが、この程度の大きさなら、あなた達の感覚を支配することは十分可能です。」

剣斗「その『力』で、俺達の体に負荷をかけて、『エリア』を長時

間広げっぱなしにすることで、俺達の『エリア』を強くするんだろ？」

琴花「でもマジでしんどいんですけど。」

クロノ「さて、次は体を麻痺状態の状態にして、筋トレといきましょうか！」

三人「ええーっ！っ！」

クロノ「さてやりますよ！」

三人「はあゝい…。」

トト「頑張つて下さいですよ！」

剣斗「うつしやあっ！」

琴花「負けるかあっ！」

ミリア「強くなるぞーっ！」

クロノ「ふふ、まだまだこれからですよ！」

三人「おう！」

クロノの心「…あと六ヶ月…。」

次回に続く

## 第二十九劇『属性』

ゼロ「はい皆さん、食糧調達してきましたよ…といっても、食べられるわけですね。」

天満「ぐ…ぐく…。」

ゼロ「あまり無理に動かない方がいいですよ？」

天満「だ…だけど…。」

ゼロ「じつとしているだけでも、今もしっかり『精神』に負荷がかかり、鍛えられています。マジ馬鹿さんも、三日間をそうして過ごしたんですよ。」

フェイ「マジそうだけだよ…てめえに言われんのはマジムカツク！」

イオキス「安心するんだ…確実に…『戦闘錬値』は…上がっている…。」

リアリイ「でもでもお、はつきし言ってえ、こんな状態で六ヶ月なんて無理じゃないのかなあ。」

ゼロ「…ユエさんは何か根拠があつて、我々に六ヶ月を生きろと言ったはずです。しかし…。」

シャウト「そうだな…。」

ゼロ「ん？シャウトさんは体、大丈夫なんですか？」

シャウト「ん？ああ、今のところはな。」

ゼロの心「おかしいですね…。いくら霊神とはいえ、もうすでに『許容量』を越えてもいいはずですが…。」

イオキス「どうか…したか…ゼロ…。」

ゼロ「イオキスさん、シャウトさんの『戦闘錬値』は今どうなっていますか？」

イオキス「なんだ…いきなり…。」

ゼロ「教えて下さい。」

イオキス「……………順調に…上がり…続けているぞ…。」

ゼロ「それなのに……………そうか！シャウトさんは元々『錬物質』だけで出ています！人と違って『錬』を受け入れる時に邪魔をする『物質』がない！」

フェイ「マジということだ？」

ゼロ「例えば、シャウトさんと天満くんが、戦いで傷を負い、『錬』を大量に消費したとしましょう。」

フェイ「あ、ああ。」

ゼロ「天満くんが完全に回復するためには、薬を使って傷を治し、体を休めて『錬』を回復させるしかありません。」

フエイ「んなことマジ当然だろ！」

ゼロ「ではシャウトさんの場合もそうでしょうか？」

フエイ「え…？」

リアリイ「そつか…霊神のシャウトは、大気に漂ってる『鍊』を取り込めば…。」

フエイ「あ！」

ゼロ「そうです。そうやって気脈の流れに意識を集中するだけで、素直に、そして素早く『鍊』を吸収し、自然に、それも僅かな時間で完全回復出来るんです。そうですね、シャウトさん？」

シャウト「ああ、そのとおりだ。実際にネオスとの戦いでも、『超霊化』しても、霊神達はすぐに回復した。」

ゼロ「やはり…。」

フエイ「だがよ、マジそれがどうしたってんだよ。俺達は人だし、マジ関係ねえだろ？」

ゼロの心「いや…ユエさんのことです。何かあるはずなんです。この状況を越える何かが！」

天満の心「…そうか……霊神に…なれば…この痛みは……だけど……だけど……」

サリーオ「そろそろかね。」

天満「サリーオ…さん？」

サリーオ「さてと、ゼロ。」

ゼロ「ん？どうしました、サリーオさん？」

サリーオ「皆一列になつてくれるかい？」

ゼロ「え？」

リアリイ「サリちゃん、どういうこと？」

サリーオ「ユエが何で戦闘向きじゃない、『スタンスエリア』の  
タシをここに送ったと思う？」

ゼロ「…。」

リアリイ「ああ！そっぴやサリちゃんの『エリア』は！」

サリーオ「さあ、やるから一列になりな。」

ゼロの心「『スタンスエリア』は『ネイチャーエリア』とは違い、  
『レベル2』までしかない。だがその代わり、効力を広範囲に持続  
させ続けることが出来ます。ユエさんの根拠は、サリーオさんの『  
エリア』だったというわけですか…。」

サリーオ「私の『エリア』で、アンタ達の『属性』を統一する！」

ゼロ「統一？どういうことですか？」

サリーオ「なあと簡単さ。アンタ達はそれぞれ『錬属性』というものがあるだろ？『潜在特性』と言ってもいい。」

ゼロ「はい、天満くんが『月』、アイズくんが『糸』、サイガさんが『刃』と言ったように、皆さんそれぞれ違う『錬属性』を持っています。」

サリーオ「それを統一するんだよ。」

ゼロ「そんなことが可能なんですか？『属性』は天性のものです。生まれつき備わっている『力』を変えることなんて出来るとは思いませんが…。」

サリーオ「…ゼロ、どうしてココはいるだけで負荷がかかり、苦痛を味わうんだった？」

ゼロ「今更何ですか？」

サリーオ「いいから答えな。」

ゼロ「…分かりました。何故負荷がかかるのかというと、大気を漂っている大量の『錬』が強制的に体に流れ込まれてくるからです。その時に、自らの『錬の許容量』が無理矢理広げられ苦痛を伴うわけです。」

サリーオ「じゃあシャウトが無事なのは？」

ゼロ「ですからそれは、シャウトさんは霊神で、元々『錬』で構成

されてますから、いくら流れ込んでも……あれ？おかしいですね……  
どんな霊神も『属性』があります。」

フエイ「マジそれが何かおかしいのか？」

ゼロ「シャウトさんは『鏡属性』。痛みを伴うのは『属性』の違う『鍊』を受け入れる時に、『許容量』に変化が起こり、無理矢理広げられてしまうからであって、それは霊神でも同じはず……何故？」

サリーオ「それは霊神は『純属性』だからだ。」

ゼロ「『純属性』？」

リアリイ「確かユエに聞いたことあるよ。霊神だけがそうなんだよね？」

サリーオ「ああ、確かに人も霊神もそれぞれ『鍊属性』を持っている。けどね、人と霊神が違うところ、それは、人の持つ『鍊属性』は一つじゃないってことなのさ。」

フエイ「マジさっぱりだぜ。」

サリーオ「霊神は一つの『属性』が合わさり生まれてくる。何一つ不純物無くな。例えば大気に漂う『火の鍊』、それだけが集まり『火の霊神』が生まれる。」

ゼロ「そう……ですね。」

サリーオ「大気には様々な『属性』の『鍊』が漂ってる。霊神はその『鍊』を取り込む時、瞬時に自らの『属性』へと変化させられる。

だからシャウトは、大気に漂ってる『火の錬』を取り込み、体内で自らの『鏡の錬』にスムーズに変換させることが出来るんだ。」

ゼロ「で、では人は…。」

サリーオ「人っていうのは、様々な『錬物質』で構成されているんだよ。」

フェイ「マジどゆことだ？」

ゼロ「そうか…だから『許容量』に変化が起こり、そのせいで混乱を起こし、苦痛を伴うんですね！」

サリーオ「分かったか？」

フェイ「マジ説明しろよ！難し過ぎてマジさっぱりだぜ！」

ゼロ「つまり人は一つの『属性』だけじゃないんです。体内に何種類もの『属性』が存在しているんですよ！」

フェイ「はあ？お前さっきと言ってることマジ違うじゃねえか！天満は『月』でアイズってやつが『糸』で、マジそれぞれ違う『錬属性』を持ってるってマジ言ってたじゃねえかよ！」

ゼロ「ええ、間違いありません。」

フェイ「だったら！」

ゼロ「確かに人は『属性』を持っています。ですがそれは体内にある最も多い、生まれつき増えやすい『属性』のことだったんですよ。

」

サリーオ「ご名答。」

フエイ「え？え…はあ？」

ゼロ「つまり、人の体内には大気のように、様々な『属性』の『錬』があり、その中で最もその人に合った強い『潜在特性』が、その人の『錬属性』なんです。」

フエイ「じ、じゃあよ…マジ俺ん中には他の『属性』があるってのか？」

ゼロ「あなただけでなく、僕の中にも『氷』以外に、サイガさんの『刃の錬』や、あなたの『水の錬』があるんですよ。」

フエイ「マジかよ…。」

サリーオ「まあ、だから人は環境に対して、適応能力が極めて高いんだがな。」

ゼロ「人には体内に様々な『錬』があるせいで、大気の『錬』を取り込んだ時、それが自らの『錬属性』でない場合、変換出来ず、余分な『錬』が体内に入り、無理矢理『許容量』をこじあけられ、苦痛が生じるんですね。」

サリーオ「少し違うな。」

ゼロ「え？違う？」

サリーオ「変換は出来るんだよ、人でもな。」

ゼロ「そうなんですか？」

サリーオ「じゃなかったら、『錬属性』が変わってしまわないか？」

フェイ「マジそうだぜ！俺が取り込む『錬』がマジ『火』ばっかだったら、体内の『錬』の量が逆転して『水属性』からマジ『火属性』になっちまうからな！」

ゼロ「では何故苦痛が生じるんですか？」

サリーオ「確かに変換は出来る。だがね、霊神と違って『純属性』じゃない。だから取り込む『錬』全てを変換出来るわけじゃないんだよ。」

ゼロ「全部じゃない…ですか？」

サリーオ「ああ。例えばゼロ、今アンタに大量の『錬』が流れ込んでいるだろう？」

ゼロ「はい。」

サリーオ「その『錬』は『火の錬』だとしよう。すると、アンタの体内では何が起こっているか…。」

フェイ「何が…。」

サリーオ「ゼロ、アンタの中にはもちろん『火の錬』もある。取り込んだ『火の錬』は当然、体内の『火の錬』の場所に送られていく。

「

ゼロ「はい。」

サリーオ「だがここであることが起きる。」

リアリイ「あること?」

サリーオ「体内には『鍊バランス』というものがあるんだよ。」

リアリイ「それで?」

サリーオ「その『鍊バランス』を保つように、振り分けられるんだよ。」

ゼロ「なるほど。その『バランス』の中心である僕の『氷の鍊』と『火の鍊』が2:1だとしたら、たとえ取り込んだ『鍊』が『火』だとしても、『バランス』を保つように振り分けられるというわけですね。」

サリーオ「ああ、だがここでは体内の『鍊バランス』に急激に変化が生じるため、苦痛という代償がついてくるんだ。」

ゼロ「全く知らなかったですよ。」

リアリイ「それでサリちゃんの『エリア』を使うんだね!」

サリーオ「そうだ。アタシの『薬のエリア』で、『鍊バランス』を統一させるんだよ。ま、一時的ではあるが、体がこの空間に慣れるまではもつたろうね。」

ゼロ「もしかしてそれがサリーオさんの『レベル2』ですか？」

サリーオ「そうだ。体内の『鍊』を一つに統一する。つまりは霊神と同じ状態になるってわけだね。そうすれば、素直に『鍊』を取り込むことが出来る。」

ゼロ「凄いですね…。」

サリーオ「もちろん条件もある。皆にこれを服用してもらわなければならない。」

ゼロ「これは…『フォンス』のようですが？」

サリーオ「アタシが作った『薬』だよ。」

リアリイ「うわぁ…何か苦そう…やだな…。」

サリーオ「つべこべ言うな！それはアタシが作った『法薬』で、アタシの『力』に感応してくれるものだ。」

ゼロ「そうか、普通他人の『鍊』は、自らの『鍊』と反発してしまいます。それでこの『法薬』を服用し、サリーオさんの『鍊』を長く持続させる効果をもたらすんですね？」

サリーオ「よし、じゃあやるよ！」

ゼロ「お願いします。では皆さんに『法薬』を！」

フェイ「仕方ねえな。」

リアリィ「まっかせてい！」

イオキス「了解した…。」

天満「ん…ゼロ？」

ゼロ「強くなりましょう、天満くん。」

天満「…ああ。」

サリーオ「じゃあ行くよ！『薬のエリア』…『レベル2』！…『薬<sup>クスリ</sup>』！」

天満「…ん…あ。」

真雪「ん…。」

天満「大丈夫か、真雪？」

真雪「体の痛みが…消えた？」

アイズ「これは…。」

サイガ「さっきまでの痛みがウソみたいやで。」

にゅう「良かったにゅ〜！みんな元気になったにゅ〜！」

ゼロ「そっぴやいましたっけね、にゅうさん…。」

シャウト「にゅも霊神みたいなものだからな。」

サリーオ「ふう…。」

ゼロ「ご苦労様です。」

サリーオ「ああ…これからだな。」

ゼロ「そうですね…これからです。」

次回に続く

### 第三十劇『迫時』

天満「はあっ！」

フェイ「くつ、『レベル2・水使』っ！」

天満「……そこだっ！『月の咆吼』っ！」

フェイ「何っ！俺の『水使』が！」

天満「たあっ！」

フェイ「うわっ！おっと！マジ危ねえ！」

天満「逃がさない！『月の咆吼』っ！」

フェイ「な！ぐわあああ！」

天満「ふう。」

フェイ「こっちだ！」

天満「え？」

フェイ「『水の裂尾<sup>レッピ</sup>』っ！」

天満「うわあああ！」

フェイ「新参者にマジやられる俺様じゃないんだぜ！」

ゼロ「おや？そのわりには結構押されてたかに見えましたが？」

フェイ「マジうつせえ！」

真雪「大丈夫、天くん？」

天満「あ、ああ…でもさすがだよフェイ。まだまだ修行が足りないな。」

ゼロ「それでもこの一週間、見違える程、皆さん成長しましたよ。」

天満「うん。皆『レベル2』を覚醒出来たみたいだからね。」

真雪「でも私は…。」

天満「真雪…。」

ゼロ「…真雪さんだけが『フォンス』をまだ覚醒せずにいます。」

真雪「…。」

天満「き、気にするなって！なあゼロ！」

ゼロ「そうですね。まだまだ時間があります。真雪さんも近いうちに必ず『エリア』を広げることが出来ますよ。」

真雪「は、はい…。」

天満「……そ、そういえばアイズ達は？」

ゼロ「んゝさつきまで僕が相手をしてましたからねえ。」

天満「おいおい…まさか本気で？」

ゼロ「嫌ですよ天満くん。しっかり加減はしましたから大丈夫ですよ。」

サイガ「あれのどこが加減やねん…。」

天満「サイガ！何だよ、ボロボロじゃないか！」

アイズ「死ぬかと思っただぞ。」

天満「アイズまで！」

サイガ「『氷紋』にあないな使い方があるなんて知らなかったで…。」

アイズ「反則だあれは。」

ゼロ「そうですか？まだまだ実力の半分も出してないんですがね。」

サイガ「はは…イヤミやな…完全に…。」

アイズ「くそ…。」

天満「はは、どうやらこっぴどく鍛えられたみたいだな。」

リアリィ「食事食事い！」

天満「ん？…よし、行こうか。……半年、俺は必ず…たとえ俺が俺でなくなっても…。」

真雪「天くん！」

天満「今行くよ！」

（剣斗達は）

剣斗「い、今のが俺の？」

クロノ「そう、『レベル2』です。」

剣斗「よっしゃあっ！」

琴花「やるじゃない剣斗！」

ミリア「ぎゅんねん。剣斗に先を越されたよ！」

クロノ「とはいえ、まだ覚醒したばかり。さあ、今度は『レベル2』を自由に扱えるよう特訓です。」

剣斗「よぉーし、こうなったら一気に『レベル3』まで行ってやる！」

琴花「調子に乗んな！」

剣斗「んがつ！」

ミリア「あはは！相変わらずだよねえ！」

トト「ご主人様。」

クロノ「トト？どうしたんだい？」

トト「アリス様がお呼びですの！」

クロノ「もしかして、ユインシス様から？」

トト「ですの！」

クロノ「分かったよ。皆さん、少し休憩にしましょう。」

ミリア「はあく助かったあく。」

琴花「剣斗、大丈夫？」

剣斗「ああ！まだまだいけるぜ！琴花は？」

琴花「大丈夫大丈夫。早くアンタに追いつかなきゃなんないし。」

剣斗「………そーいや天満と真雪、元気かな？」

琴花「二人は今『オルテナ』なんですよ？あつちも『地球』みたいなことになってるって聞いたけど……。」

ミリア「うん…みんな石になっちゃってた……。」

剣斗「…でも、天満は天満でやるべきことをしてんだろ。アイツは  
大丈夫だよ、強えし。」

琴花「真雪もああ見えてやるときはやるからね。」

ミリア「…あゝあ、ラリアに会いたいなあ。」

剣斗「…だな。そのためにも今やれることをしようぜ！」

琴花「そうだね！」

ミリア「よおーし！」

クロノ「皆さん。」

剣斗「お、特訓再開か？」

クロノ「その前に、今の状況を説明します。」

ミリア「もしかして天満達の？」

クロノ「はい。ユインシス様からアリス様に報告がありました。あ  
なた達の友である扇天満達は、『オルテナ』から『銀河の架け橋』  
と呼ばれる橋を渡り、『天球』に辿り着いたそうです。」

剣斗「『天球』？」

クロノ「『月』ですよ。」

三人「！」

剣斗「つ、『月』って…はは、天満のやつ、そんなところにいんのかよ…。」

クロノ「そこで、全ての要であるユ工様と接触し、状況を把握した後、新たな『力』を得るため修行中だそうです。」

剣斗「あつちも頑張ってたんだな。」

琴花「あとどんくらい時間あるんだっけ？」

クロノ「そうですね…。」

琴花「クロノ？」

クロノ「まあ、時間を気にしても仕方がないですよ。今言えることは、時間を無駄に出来ないということです。一瞬一瞬を全力で生きて下さい。」

剣斗「ま、そうだよな！」

ミリア「天満やシャウト達も必死でやってると思うしね！」

琴花「よし！そんじゃ、さっさと始めようクロノ！」

剣斗「よっしゃ、休憩終わり！」

トト「…ご主人様。」

クロノ「何だい？」

トト「どうして、残された時間を教えてあげなかったのですの？」

クロノ「…これでいいんだよ。」

トト「？」

クロノ「ユインシス様が感じた未来…もうすでに大部分が変わりつつある。あと半年でアイオーンとの戦いが始まる。だけどその未来も、もしかしたら変わるかもしれない。」

トト「ユインシス様の能力を疑っているんですの？」

クロノ「いいや、そういうわけじゃないよ。だけど、大事なことに、予想は悪い方を優先して備えておくべきだと思うんだ。まだ半年ある…そうじゃなくて、もっと早く、アイオーンは動く。そう考えておいた方が対処もしやすいし、それに…焦るだろ？」

トト「焦る…ですの？」

クロノ「うん。半年で死ぬ…それくらいの想いがなければ、アイオーンには届かない。」

トト「それでは、彼らにあと三ヶ月って言ったら焦るですの！」

クロノ「……それは怒られそうだから嫌だな。」

剣斗「おーい、クロノ！早くしよっぜ！」

クロノ「全ては剣斗達の想い次第だよ。大丈夫、一瞬一瞬を全力でね！」

トト「……あと半年……ですの……。」

（その頃聖地は）

聖地「ここが『天地海』の海底『フィアリス』……この感じ……久しぶりだね。……やあ、久しぶりだね……『レイラーム』。」

レイラーム「……。」

聖地「答えてはくれないのかい？」

レイラーム「……私は……貴方に失望しました。」

聖地「……だろうね。」

レイラーム「貴方は幾度も私を裏切りました。」

聖地「うん、分かってる。」

レイラーム「それなのに、よく顔を出せましたね……。」

聖地「……。」

レイラーム「貴方がアオスではないのも理解しています。ですが、それでも、貴方を恨みます。」

聖地「……構わないよ。」

レイラーム「…。」

聖地「恨んでも憎んでも構わない。ただもう一度……。」

レイラーム「都合の良い話ですね。貴方の……いえ、アオスのしたことを許せると思いますか？」

聖地「それでも……。」

レイラーム「……一度目は、霊神達を裏切り、次は親友とも言える『天駆ける者』を裏切り、そして……今度は『オルテナ』を裏切り、崩壊しようとまでしました。」

聖地「……そうだね。」

レイラーム「今度は世界……いえ、宇宙界をも裏切りますか？」

聖地「それで僕の望みが実現出来るなら……。」

レイラーム「馬鹿にしているのですか！」

聖地「馬鹿になんかしてないよ。今……僕が出来ることをしに来ているんだ。」

レイラーム「この目……貴方には不幸が似合います。」

聖地「……かもしれない。」

レイラーム「誰にも触れず、誰にも認められず、誰にも愛されない。」

聖地「……ふう、しんどいね……。」

レイラーム「それだけのことを、貴方の前格は行ったのです。」

聖地「うん……たとえ僕がしたわけじゃなくても、僕の中には、確かな感覚として残ってる。」

レイラーム「死だけが貴方を認めています。」

聖地「……うん。だけど、まだ死ぬわけにはいかないんだ。」

レイラーム「まだ望むのですか!」

聖地「デイクが……アーミアが……ミーファが、そしてディーノが教えてくれたんだ。僕にはまだ死んじやいけない理由がある。」

レイラーム「……。」

聖地「アオスのしたこと、それが許されないことなのは僕も分かっている。」

レイラーム「それで?」

聖地「だからこそ、僕はまだ死ねないんだ!」

レイラーム「……。」

聖地「レイラーム、信じてくれなんて言わないよ。だから見ていてほしい！僕が…アオスの本当の望みを叶えるんだ！」

レイラーム「裏切りですか？」

聖地「違うよ。僕の全てを懸けて、この体と心が終わるまで、大切な人達を守るために戦い続ける！」

レイラーム「！」

聖地「君にはまた迷惑をかけると…思う。ごめん…だけど、こんなことを頼めるのは君しかないんだ！」

レイラーム「…名前は？」

聖地「え？」

レイラーム「貴方の名前です。今の…聞かせてもらえますか？」

聖地「聖地…<sup>ヒイラギ</sup>柊聖地！」

レイラーム「柊…聖地…。貴方にはもつたいない名前ですね。」

聖地「負けない。名前にも、『ドリューマ』の意思にも、そして…アオスにも！」

レイラーム「……私はまだ、貴方を信じたわけではありません。しかし、アオスでもネオスでもない貴方、聖地が見い出した道を見てみたくなりました。」

聖地「レイラーム！」

レイラーム「もう一度…もう一度だけ、アオスに負けれないと言った貴方を見てみようと思います。」

聖地「じゃあ『力』を貸してくれるんだね？」

レイラーム「いいでしょう。ただし、貴方が再びアオスと同じ道を歩んだその時、聖地…分かっていますね？」

聖地「その時は…僕を灰にしてくれ。」

レイラーム「覚悟はあるということですね。」

聖地「うん。でも一つ聞いていいかい？」

レイラーム「何ですか？」

聖地「君の『力』なら、アオスも灰に出来たはずだよね？どうしてしなかったんだい？」

レイラーム「…私も『天駆ける者』と同じだったようですね。」

聖地「え？」

レイラーム「アオスを信じていたからです。幾度裏切られても…私はアオスを完全には捨てられなかった……ではないですかね。」

聖地「アオスは本当に馬鹿なことをしたんだね。」

レイラーム「ただし、今度は…無いですからね。」

聖地「大丈夫だよ。僕はアオスじゃない。」

レイラーム「…では…始めましょうか。私の中に入りなさい。」

聖地「ああ！『鳳凰大樹レイラーム』、アオスの育ての親よ、僕に『力』を貸してくれ！」

それぞれが各々の想いを持ち、時を過ごしていく。同じ脅威から、大切なモノを守るために、限られた時間の中で必死に生きていく。そして、時は経ち、半年も僅かになっていく。はたして、最悪の未来を避えることが出来るのか。それは、皆が望んだ世界の未来なのか。全ての答えは、すぐ近くまで来ているのだった。

ユエ「半年まで、あと一週間か…。」

ユインシス「ということは、アイオーンはもう近くにいるということだな。……怖いな。」

ユエ「そう…だな。もうすぐ三段階も完遂出来る。間に合ってくればいいが。」

ユインシス「焦るよな…。」

（その時地震が起こる）

ユインシス「な、何だ！」

ユエ「まさか！」

ユインシス「く、誤差の範囲外だぞ！早すぎる！」

ユエ「どうする。」

ユインシス「……俺が出る。」

次回に続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7834d/>

---

第二部『天と地』

2010年10月22日14時50分発行